

## 第八章 華州

**宿願**であった官人生活は始まるやすぐに極めて難儀な次第となる。

わずかな明かりが差してきたばかりの暗がりには、地面を擦るようにして歩む人々の流れがある。皆が背を丸めて無言。韋荘もその中にいる。

皇帝の前より下がってきた。宿に戻り、出発に備える。行き先が北から東に転じられた。その先がどうなるのか、道をゆく人々にはわからない。

足音がまばらになっていく。位の高い者ほど町の中央に宿を得、そうでない者は町の外縁に、韋荘のような新参者はさらに離れた場所に泊まった。この町も幾度かの戦火を蒙り、暗がりには並ぶ家屋で無傷なものはなく、いまから戻る農家は、母屋が焼かれ、馬小屋だったところで老農夫が暮らしている。「お泊めするようなどころではとてもありません」と言うのを無理に頼んで、

どうかか体を休める場所を得た。困窮したこの町には、突如やってきた皇帝一行を迎えるだけの資力はなく、貧しい老夫は自身が食べる物も持たない。

韋荘のいまの一番の気がかりは、これからの皇帝の行き先でも、どこで空腹を癒せるかでもなく、一人の病人、すなわち春琴である。

婺州を出たころには、春琴の病は消えたかのようにも見えた。それはわずかに一時だけ、旅の間にまた悪化し、都に着いて落ち着けば回復もしようかと一縷の望みを繋いだものの、今回のこの騒動で、もはや予断を許さない。都から逃げ落ち、立ち昇る土埃の中を驢馬の背に揺られるのは、春琴には地獄の責め苦に等しい。ひっきりなしの咳、血が混じり、見る目にも痛ましく、先ほど、朝儀に並ぶために農家を出たときには、どうにか身を起こして見送ってくれたものの、わずかな風にも堪えられぬありさまであった。

これほど辛い目に遭わせるのならば、婺州から連れてくるのでなかった。都にいくのを強く願ったのは春琴で、韋荘には、お上のため、民のため、何よりも春琴のために立派な働きをしたいとの思いがあった。病が由々しきも

のであるとわかってはいた。しかし、絃と名乗っていたころの凜々しさが韋莊の心には刻まれていて、あれこそが本当の春琴であるのだから病など克服してくれるだろうと、半ば本気で思っていた。婺州に留まることはあり得なかった。しかし、抱いていた願望は潰えようとしている。

春琴は病に苦しむだけではない。平陽公主を理想の女性と仰ぎながら、いまは夫の足手まといとなっているのを、どれほど悔しく思っていることか。それがわかるだけに、韋莊は労わりの言葉をかけるのも難しく感じられる。婺州を出たことも、そもそも貢挙を受けようとしたことも、誤りだったのではないかと後悔もされる。そのような思いを口にしたならば、春琴をさらに苦しめる。

春琴の心を安んずるには絶望してはならない。病に克つと思うべきだ。己には、皇帝のために、唐土の民のために、為し得ることがあると思うべきだ。立派な官人でなければならぬ。

町はずれの緩い坂を上る。周囲をいく人はまばらになり、竹林の向こうで

鶏が鳴き、空が赤く染まっている。

白みゆく大地を遠く見晴らす場所に一人の男が腕組みをして立っている。その脇で足を止める。暗くても友人を見違えることはない。東呉くんだ。

「君もきていたのですか」

婺州に帰る途中の道で出会って以来だ。都に戻って朝廷の一員となった韋荘は崔胤と距離を置き、東呉くんとの交流は途絶えていた。昔からの友情はそれでも変るまいと信じている。

東呉くんは前方を見やっただまま、

「あの丘の彼方に、西から東へと渭水が流れています。都を出て、我等はあの川を渡ってここにきました。お上は再びあの川をお渡りになるのでしょうか」

「いま伺って参りましたのは東に向かわれるとの御決断。渭水をお渡りになるとはおっしゃっていませんでした」

「しかし、韓建どのにお会いになるのでしょうか」

「恐らくは」

「お会いになれば、どこかで渭水を渡られて、華州にお入りになることでしょうか」

「宰相どのがお一人だけ残って、都にお戻りになるよういまもお上にお話されています。宰相どのお考えの通りになれば、ここで引き返して渭水を渡ることになりましょうが、そうはなりませんでしょう」

宰相とは崔胤である。

「いずれにしましても、渭水は決して渡るべきではありません」

「それは、宰相どのお考えとは違いました」

「難しいところです」

東呉くんはうなだれる。

「宰相どのと何かあったのでしょうか」

東呉くんはすぐに答えようとしなない。

乾寧二（八九六）年七月、韋荘は富平にいる。さほど大きくもないこの町に、

昨夜、皇帝を初めとして、後宮の人々、朝廷の全官僚、その家族、若干の兵士、都の市民、合わせて数万の人々が押し寄せた。李茂貞の暴戻を避け、都を脱出したからだ。

昨年夏の夏の婺州出發前に、李茂貞、王行瑜、韓建の三人の節度使が都に乗り込み皇帝と直談判に及んだことを、韋莊は耳にしていた。都は平穩からいくら程遠くともいかねばならぬと決断した。

事は護国節度使の王重盈（おう じゅうえい）の死去に端を發した。王重盈は王重榮の兄である。黄巢を裏切った朱全忠が投降したのが王重榮。領内の塩田が生む富を使つて強大な軍団を作り上げた実力者である。軍規を守らせることに極めて厳格で、それが崇つて部下に殺された。王重榮の後を兄が継ぎ、その王重盈が死んだために、軍団の兵士たちは、王重盈のさらに上の兄の子の王珂（おう か）を後継者に立てることにした。王珂は王重榮の養子として育てられ、兵士たちと気心が良く通じる。

王重盈には実子である王珙（おう きょう）、王瑤（おう しょう）の兄弟がいる。

兄弟は、自分たちこそが軍団の正統の後継者であると朝廷に訴えた。朱全忠がここに乗り出してきて、王珂などこの馬の骨とも知れぬ男だと、王珙、王瑤の兄弟の肩を持った。相手の王珂が李克用の婿で、それが節度使になれば、強大な軍団がそっくり李克用の側にいつてしまうのを恐れたからだ。

朱全忠と李克用の反目は激しさを増し、東方の地で熾烈な戦いを繰り広げている。二人の大物がからむ跡目争いをどう調停したらよいものか皇帝は大いに苦慮した。宰相の崔胤が自ら火中の栗を拾う形で仲裁案を出した。軍団の指揮は兵士が選んだ王珂に委ね、節度使の地位は崔胤自身が預かるとした。

これでおさまればよかったのだが、都を取り巻く三人の節度使、李茂貞、王行瑜、韓建が不満を顕わにした。三人は必ずしも思惑を同じくしないものの、もめごとに乗じて利を得ようとした。最も粗暴な王行瑜が、王珙、王瑤の兄弟を煽り、弟の王行約（おうこうやく）を援軍に添え、三人で王珂を攻めさせた。王珂は李克用に救援を求めた。

ここに宰相の人事もからだ。王重盈が死んでひと月ほど後に、李谿（りけ

いなる人物が宰相に任命された。諧謔の詩を得意とする鄭繁は宰相に大抜擢されて半年ほどで辞め、次に皇帝のお気に召したのが李谿だった。例によって、文学の才があり、弁が立つ男だ。李谿の宰相任命はすんなりはいかず一度は頓挫した。李谿を宰相にしたいと、皇帝が最初に漏らしたとき、劉崇魯（りゅう すうろ）なる者が突如奇声を発し、「李谿は姦邪」「国を傾ける」などと叫んだ。劉崇魯は泣きわめいて、李谿は李茂貞、王行瑜と深く結託しているなどと言い連ねた。

奇怪なこの騒動で任命は見送られた。後にそれは崔昭緯の仕業であったことが知れた。皇帝が李谿を宰相にしようと考えたのは、崔昭緯が李茂貞と通じているのに腹を据えかね、それに対抗するためだった。その李谿が李茂貞や王行瑜と結託しているのでは元も子もないと皇帝は諦めたのだが、李谿の無実が晴れるや、皇帝はすぐさま宰相に任命した。

崔昭緯は今度は外から揺さぶりをかけようと、王行瑜を煽った。王行瑜は、かつて尚書令の地位を求めたときに拒否した韋昭度とともに、軽佻浮薄な李



谿を罷免せよと朝廷に要求した。皇帝は「軍旅のことは節度使であるそちたちに任せてある。宰相の任命は朕一人の仕事だ」と跳ねつけた。王行瑜は李茂貞をも誘って実力行使に及ぶ姿勢を見せた。皇帝は腰砕けとなり、李谿と韋昭度を降ろした。

王行瑜はこれで調子付き、李茂貞、韓建とともに、それぞれ千名の精兵を率いて都へと乗り込んだ。安福門に兵を並べ、皇帝を呼び出した。皇帝は門に上って三人の節度使と面会した。王行瑜と李茂貞は、唐の皇帝に自ずから具わる威厳に、いざとなると口がきけなかった。韓建だけが、「我等がここに参りましたのは、都を清めるためでございます。恐れ多くもお上の御宸襟を脅かそうなどと不届きな意図は毛頭ございませぬ。昨今、宮中の宦官も、朝廷の百官も、それぞれに徒党を組んで我が利を図るばかり、なかでも失政の多い韋昭度と李谿の二人の元宰相は、国を累卵の危機に陥れた極悪人でございます。その罪は重く、直ちに誅殺すべきです」と、都にきた理由を述べた。皇帝は三人を門の内に招いて宴を催した。王行瑜は、皇帝直属の軍隊を三人

の節度使で分け合おうとする本当の目的をとうとう言い出せなかった。宴が終わると、腹立ちまぎれに、兵士たちに市で好き勝手な乱暴を許した。王行瑜は熱に浮かされたように、韋昭度と李谿を捕まえ、その場で殺し、さらには宮中に兵士を突入させ、日頃から気に食わない宦官を引っ張り出して次々に殺した。

都は大混乱に陥った。三節度使は、かくなる上は、皇帝を廃して自分たちに都合のよい人物を新皇帝に立てて事態を收拾するしかあるまいと考えた。そこに、李克用が太原を発って一路都に向かってきているとの報が飛び込んだ。三人は慌ててそれぞれの本拠地へと引き上げた。

李克用は、王珂を追い出そうと攻撃をしかけていた王珙、王瑤の兄弟と王行約の連合軍を一撃のもとに蹴散らした。王行約は、これで逃げ帰ったのでは面目が立たないと、都に乱入し、皇帝を攫って兄の王行瑜への手土産にしようした。皇帝を取られては一大事と、李茂貞の養子の李繼鵬（り けいほう）が王行約と争った。白兵戦となり、御衣をかすめて矢が飛び、皇帝は都大路

を南に走って啓夏門より脱出し、南に連なる山岳地帯に逃れた。宮中の人々も、市中の人々も、皇帝を追った。

李克用は、韓建のいる華州城を包囲した。韓建は城壁に登り、「某には、李公どのに非礼を働いた覚えはありません。なのに、なぜ攻められねばならぬのでしょうか」と詰った。「貴公は臣でありながらお上を脅迫した。それが礼に合致するか、無礼であるか、よもやわからぬことはあるまい」。李克用は華州城を攻撃する準備に取り掛かった。騎馬の機動力を活かしてこそ無類の強さを發揮する沙陀軍団にとって城攻めは得意でなく、王行瑜と李茂貞が南山に軍を繰り出して互いに先を争って皇帝を探しているとの報せに、李克用は華州の囲みを解いて都に向かった。

皇帝は山中を逃げ惑っていた。都を出た人々は、残虐な兵士に脅かされ、飢渴に迫られ、三人に一人が命を落とす事態となった。かくなる上は李克用に助けを求める以外に道はないと、皇帝は、宦官の張承業（ちようしやうぎよう）を李克用のもとへと走らせた。張承業は都と太原の間を幾度か往復し、位は

低いが宦官としては珍しく骨のある人間であるとして、李克用の信頼を得ていた。

李克用は張承業に会うと、太原から出てきたのは三節度使の非礼を正すためであると、皇帝への忠節を誓った。皇帝は山を下り、李克用の軍門に迎え入れられた。皇帝を警護して李克用は都に入り、宰相の崔昭緯を罷免とし、崔胤を宰相に復帰させた。李克用は、王珂を救った際に崔胤と会っていて、それなりの人物であると認めていたのだ。

李茂貞は養子の李繼鵬の首を送って皇帝に許しを求めた。王行瑜はあくまで態度を改めず、李克用はその征伐に乗り出し、乾寧二（八九五）年十一月、王行瑜の首が都に届けられた。この一連の功績によって李克用には晋王の位が贈られた。王号は通例は皇帝の近親者にのみ許され、皇帝より賜る称号としてこれに勝るものはない。もしその上を望むのなら皇帝になる他はなく、李克用はそのような野望はさらさらないと内外に明らかにするべく、太原に引き上げていった。

この一連の騒動がおさまったところに、韋荘は都に入った。授かった職は校書郎。朝廷の文書類を整理する地味な仕事だ。六十にして初めて官人となった韋荘は、李洵らに朝廷での立ち振る舞いを教わりつつ、まずは与えられた職務を全うすることに努めた。旅の間に病気が進んでしまった春琴も、韋荘の官服姿を喜び、顔を輝かせた。

安邑坊の家は林婆さんが守っていた。春琴は林婆さんのお蔭で初めて本当に体を休めることができるようになった。

蟻光禪師のいる青竜寺もほぼ無事で、牡丹の咲く春に向かって世の中も落ち着き、春琴も良くなつていつてほしいものだ、と、韋荘は期待した。しかし、そうはならなかった。

朱全忠が朝廷の人事に介入してきて、張濬を宰相に戻すよう要求した。張濬はかつての皇帝のお気に入り。宰相に抜擢され、李克用相手の無謀な戦をししかけて失脚した。都から追放されている張濬を宰相に戻せとは、李克用に對するあからさまな挑発である。李克用は怒り、「朝に張濬が宰相になつたと

聞きましたら、夕べには都でお上にお目にかからせていただきます」と、朝廷を威圧した。

天下無敵の李克用の意を損ねることはできないと、張濬の話はうやむやにしたのだが、どのような間違いからか、李克用が突如躓いた。東方の戦線を見学しにいった李克用の幼い息子が朱全忠側に捕まった。動揺した李克用は、息子を救出しようと敵に向かい、馬が倒れ、あわや自身も捕らわれの身になりかけた。東から軍隊を退却させるから息子を返してくれと、李克用は仇敵の朱全忠に腰を曲げて懇請した。朱全忠は一切妥協せぬと、李克用の息子を殺した。息子を喪って意気消沈した李克用は指揮を誤り、大敗を喫して悄悄と退却した。

李克用の敗走を見て李茂貞が動いた。皇帝は前年の事件に懲りて自前の兵力の増強に努め、李茂貞の本拠地の鳳翔との間に官軍を配備した。それが目障りだと、李茂貞は蹴散らしに出て、勢いに乗じて長安へと進撃した。迎え撃つか逃げるか、皇帝は選択を迫られ、崔胤は都に留まるべきと主張したが、

皇帝は都落ちを選んだ。昨年は南の山岳地帯に逃れて多くの人命を失った苦い経験から、今度は北に向かうことになった。行き先は鄜州とされた。鄜州は小さな町で、皇帝の落ち行く最終目的地にはなり難い。鄜州から東に転じて、最後は李克用を頼って太原にいくのだろうと誰もが推測した。

東呉くんは空を見上げ、

「これまで宰相どのを正しいと信じてまいりました。いまも信じております。都に戻っていかなる成算があるのか私にはわかりません。それでも、宰相どの中には立派なお考えがあると信じます。宰相どのを疑うことはありません。しかし、私とは一点の相違があるのを認めずにはいられません」

「何でしょうか」

「張承業どのをどのように思うかです」

李克用と皇帝を結ぶ宦官である。

「いかなる人物と見ておられるのですか」

「宰相どのは宦官というだけで全て嫌っておられます。張承業どのは忠義無

類のお方であると多くの人に知られ、李克用どのもお人柄に強く惹かれています。私もまた、はからずもお会いし、確かに立派なお方とお見受けいたしました」

「いずれでお会いになったのでしよう」

「今年の秋です。南山に入られたお上が、張承業どのを李克用どののもとに使者として派遣されました。私は宰相どのの命を受け、お上の行方を探しに南山に向かっておりました。張承業どのと行き逢い、言葉を交わしてすぐに、あの方が並々ならぬ義士であると知りました。私は張承業どのを李克用どのの陣営に御案内しました。もしも、張承業どのがこられなければ、あのとまきにお上と李克用どのの橋渡し役には宰相どのがなっていたことでしょう。そうであつたならば、宰相どの、都に留まることをあくまで主張されたりはなさらなかつたでしょう」

「李克用どののところにいまいけば、張承業どのを始めとする宦官を勢いづかせてしまうと、宰相どのは恐れておられるのですか」



「ひとたび渭水を渡られた後では事情が異なります。綸言汗の如しです。戻ってはなりません。信なくんば立たずと、孔子も言われました。この破れた国を建て直すには、何よりも信義が肝要です。お上は言を左右されてはならないのです」

「李克用どのは信用できましようか。韓建どのではいけないのですか」

「韓建どのも立派なお方かも知れません。しかし、お上をお迎えするだけの力を備えていますましようか。李茂貞にさえ劣りましよう。李克用どのや朱全忠どのには及ぶべくもありません」

「潼関を越えて、朱全忠どのに頼るのはあり得ましようか」

揚州の裸男を頼るべきではないと思いつつも、敢えて東呉くんに見つけてみる。このところ、崔胤が朱全忠と接近しつつあるとの噂が聞こえてきているからだ。

東呉くんは嘆息し、

「これ以上申すのはよしまししょう。私は宰相どのを信じております。宦官を

憎悪されるお気持ちの激しさが、時と場合によっては、目を曇らせてしまうこともあるのかと要らぬ危惧をするのです。他の誰よりも唐朝の行き先を案じ、他の誰よりも果敢に行動される宰相どのに、もしも避け得ぬ陥穽があるとしたら残念でなりません」

韋莊が崔胤と距離を置くのは崔胤を嫌うからではない。朝廷の一員になって間近に見るようになった崔胤には悲壮感すら漂っている。それでも、息の詰まる党派争いに我が身を投じたくはない。

「宦官の弊は申すまでもなく、まず内を清めねばならぬとの宰相どののお考えはよく理解できます。しかし、我が朝において宦官が力を持ってきたことには何らかの理由があります。排除するか排除されるか、互いに脅し怯えさせ合って、唐朝を太らせていくことができるのでしょうか」

「宰相どのを恐れるのですか」

「我等は同志であったはずです」

金陵で同志の誓いをしたとき事は単純に見えていた。

東呉くんは話を転じ、白く輝きを増してきた東の空に身を向け、

「新たな一日がここに始まるうとしています。いくつもの王朝が過去に倒れ、いくつもの王朝が過去に興りました。興れば倒れ、倒れば興る。唐にも終わりの日がありましょう。永遠には続きません。しかし、今日のこの新たな日を、我らは唐の民として迎えています。明日にも同じ新たな日があるのなら、我が唐には明後日があると信じるべきではありませんか。我が唐にはまだ時間があるのです。二百八十年の昔、唐朝が興る前夜に、かくも強大な王朝が誕生するとは誰も知りませんでした。新たに始まる一日の可能性に賭けた人々がいたために、今日まで続くこの唐の時代となったのです。我らもこの新たな日に賭けるべきではありませんか」

春琴が憧れる平陽公主は、唐が興ろうとしたときの新たな可能性に賭けた一人だった。

東呉くんの言葉に心を打たれる。無位無官の東呉くんは、官職に就く己が劣るようであってはならない。

「思わぬ長話をしてしまいました。出発の御用意もあることでしょう」

東呉くんは別れを促され、

「道々またお目にかかることもありませんよう」

日が昇って明るくなった道を急ぐ。

たちまち春琴が思われ、東呉くんの前にあった己と、春琴の元に向かう己と、二つに分かれてしまう。どちらか片方だけでも一人の身で背負うには重過ぎる。二つが我が身の内に、しかもばらばらにあるのは辛い。本来は二つは一つでなければならぬ。唐朝に尽くすことが春琴のためにもなる。そう思うからこそ春琴を連れて婺州を出てきた。

現実には、もしも春琴が驢馬に乗るのが適わなくなったらば、皇帝に従う己は春琴を置き去りにする決断を迫られるだろう。逆に、春琴のために官位を捨てることはあり得るのか。皇帝にいま従う何万もの人間の中の無力な一人ではない己に、皇帝のために何かができようか。それよりは己にとつて一人しかいない春琴を大切にしたい。春琴はそれを望んではいいまい。

立派な官人であり、立派な夫であり、立派な詩人であろうとした男がかつて存在した。皇帝が昨日のままに北に進み続けければ鄜州に至る。鄜州は、かの安祿山の乱のときに、杜甫が妻子を預けていた町だ。杜甫は賊に支配される長安を脱出して西の鳳翔に走り、新たに即位したばかりの玄宗皇帝の息子の肅宗皇帝にまみえ、左拾遺の官を授けられた。貢挙では不首尾であった杜甫は初めて官位を得、家族に会うため鄜州に走った。その道筋のありさまを詠んだのが『北征』の詩だ。

靡靡踰阡陌

はかどらぬ歩みに道を越えゆくに

人煙眇蕭瑟

人家の煙は淋しくもごくわずか。

所遇多被傷

会う人ごとに傷を被り

呻吟更流血

うめき声とともに血を流している。

杜甫がこのように歌ったありさまと、都を出て韋荘が見てきたものはほとんど変わらない。

鄜州に着いた杜甫は妻子との対面をこう歌った。

経年至茅屋 年を経て茅屋に帰れば

妻子衣百結 妻子の衣類は結び目だらけ。

慟哭松声廻 泣く声が松風とともにめぐり

悲泉共幽咽 泉が湧くばかりの涙を流す。

韋荘の人生は時折杜甫と重なる。黄巢に支配された長安を脱出し、『北征』の詩を思いつつ『秦婦吟』を作った。それから十四年が経ち、『北征』の旅の跡の一部を踏んでこの富平にまで来た。

杜甫のように全てに対して誠実であろうとするのは難しい。一つであるべき己の心は二つに分かれている。杜甫は国家の行き先を思う心と家族を愛する心とを一つの詩の中にみごとに調和させて詠み込んだ。己はどちらか一つさえ詠めない。

四世の祖韋応物はこの道で私的な感情を詩にした。妻の喪中に所要あつて富平にいき、その帰路母を失った子を再び見る忍びなさを歌ったのである。

丈夫須出入 男というものは外に出ねばならぬものだ

顧爾内無依

内に残る子らは誰を頼りとすればよいのか。

銜恨既酸骨

恨めしくも母は骨となり

何況苦寒時

ましてこの寒さの時節。

單車路蕭条

一人いく道はどこも枯れ果て

廻首长透遲

首を廻らせて足は余りに重い。

春琴を運れるこの旅の苦しみを己は詩にできない。いまここで己の感情を発露させたならばどうなってしまうのか。東呉くんに負けない立派な官人であらねばならぬというのに。

同じこの日。

人々の後ろに従って幔幕の外に出る。官位の高い者から順に、韋荘は最後尾の一群。表に立つと、先に出た人とそれを迎える人とでこつた返している。高位にある者の従者が高慢な顔で振る舞い、うかうかしていると韋荘などは

肩で突き飛ばされる。

鄭郎の姿をこの雑踏の中で容易に見つけられない。

富平から半日歩いたこの高台に、韓建が皇帝の到着を待ち受けていた。韓建は涙ながらに訴えたと言う。

「近頃の藩臣で横暴跋扈するは一人李茂貞にとどまるものではございません。臣が最も恐れますのは、このような折に、宗廟園陵を離れた僻遠の地へとお出ましになられました。最後に、何よりも大切な祭祀が再びは行われなくなってしまうことでございます。華州の地は宗廟園陵に程遠からず、我が兵は微弱とは申せ、逆賊黄巢と戦ってから十五年、衆を集め訓厲に励んでまいりました。関中の地の利は守りに固く、臣が忠信は一日たりとて揺らぐことなく、主上をお守りする藩屏として、華州の地に優る所、臣に優る者はなきと、恐れながら自負いたしております。華州にお出ましただきますれば、微力ながらも、朝廷の興復に努めさせていただきます」

韓建に会えば華州に向かうのは必然の流れであった。皇帝の決断を聞いて、



幔幕の内に安堵の空気が流れた。李克用のいる太原を望む者はもとより少なかった。華州は長安に近く、韓建は民衆の間に人気がある。華州の人口はいまでは都をしのぐほどだ。

皇帝は、昨年の南山での悲惨な逃避行に思いを致し、汝ら臣民にさらなる労苦を強いるは憊び難く、韓建の申し出を受けることにしたと、百官に話した。人々の間にすすり泣きが漏れた。

韓建は百官に茶菓の接待までし、今夜は下邳の町で一行を迎え入れる用意もしてあると言った。昨夜のように各自が宿を探し回り、韋荘のように食べれる物もなく一夜を明かす心配はない。

幔幕の外に出た人々は、今朝までと違って、笑みさえ浮かべている。

韋荘は、今朝よりも重く苦しい気持ちで、鄭郎の姿を求めて街道の方へと歩く。人々から離れ、先ほどの高台にくるために上った坂を下る。向かいから鄭郎が走ってくる。

「あちらでお坊ちやまが待っておられます。お急ぎください」

鄭郎は立ち止まらず、すぐに引き返そうとする。

「どうだったかい」

後を追いつつ尋ねる。鄭郎は答えない。

春琴を道の途中に残し、鄭郎一人を従えて高台にまで来た。幔幕の内でお上の言葉を聞く間に、様子を見にいかせた。鄭郎が黙ったままにいるのは余程悪いからなのだろう。

覚悟せねばならぬかと思ひ、いや、希望を持つべきだと思ひ返し、また、いま己に許される時間はどれほどだろうかと思ひもする。皇帝が発発するまでに若干の時間は要するだろう。こうして黙って抜け出してきて、出発に間に合わなかったなら、逃げ出したと見なされるのだろうか。今日の行き先は下邳と決まった。夜までに着けば許されるだろうか。下邳なら知る土地だ。何十年も前になるが、父が死んで長安の屋敷を失った後、しばらく母とともにそこに住んだ。

坂が終わり、茫洋とした荒地の間を道が緩やかにうねる。

「まだかい」

息を切らしながら、ずんずん進む鄭郎の背に尋ねる。

「あの小川の向こうです」

春琴を置いたのはこれほど遠くだったろうか。つい今しがたのことが定か  
でなくなっている。

川を渡って、綜の姿はどこにもない。

「どこなのかい」

「あの木立の向こうです」

そう言われると、木蔭に春琴を横たえさせたのだった。

木が群れる脇を回ると、近づく二人を認めた綜が駆け寄ってくる。

綜の他には誰もいない。鄭郎も意外な様子で、

「あそこでお休みなっていたのですが」

叢を指す。

綜は息の荒い韋荘の前に立ち、

「一人のお坊さまが現れ、持仏堂で休むようにと親切にも言ってくださり、背負っていかれました」

街道から分かれる細い道を示す。

「僧とな。どのような僧なのか。大丈夫なのか」

やや非難めいた口調になる。

「おびただしい血を吐いて苦しむ姿に、哀れんでくださいまして」

叢に血の痕が残る。春琴の悶える様子が目に浮かび、胸が締め付けられる。

「藪たちも皆一緒にいったのかい」

「私一人がここに残っております。ともかく参りましょう」

三人は小径に入る。

「で、どのような僧だったのかい」

悪い僧ではないかと心配でならない。

「身に纏うのはぼろぼろの僧衣、小柄な老僧でした。この乱れ世に、僧といえどもたやすく信じてはなるまいと、母も初めは警戒していました。僧の言

葉にだますような様子はなく、とにかく病人を休ませたいとの気持ちがありました」

「初めからだましてしていると知れてしまうようなだまし方は誰もしないだろう」

「それに父が、どこか楊爺に似ていると申しましたので」

「それだけで信用できるのかい」

「林婆さんも止めませんでした」

「そうかい、それならたぶん信用できるのだろう」

綜を問いただすのを止める。綜も少々苛立つてきた。春琴が心配でならぬのは己だけではない。

道は林に入り、木立の下を抜け出て、そこからはきちんと耕された穏やかな風光に変わる。三叉路に藪が立っている。弟はいつも通りの表情だ。

「あちらです」

小さな家並みの間から、こんもりとした丘の横を斜めに巡る緩い坂を上る。大人の背丈ほどの石碑に突き当たる。ここが寺なのだろう。

崩れかけた石段を見上げ、ここにくるまでに結構な道のりがあったのを思う。いま直ちに引き返しても皇帝の出發には間に合わないだろう。どうしてこれほど遠くにまでこなければならぬのかと、理不尽ないまいましさを覚える。

石段の先に小さな堂がある。その斜め奥に、大木に寄り添うように小さな方丈があり、その前に林婆さんが待ち遠しげに立っている。

微かに咳が聞こえる。春琴だ。少なくとも最悪の事態までには至っていない。

林婆さんが無言のままに簾を持ち上げ、腰を屈めて潜る。黴臭さが鼻を衝く。中はぼんやりと暗い。慣れぬ目に、板張りの床があつて、敷物の上に横たわっている春琴がぼんやりと浮かんでくる

外より射し込んできた明かりに気づいたのか、春琴の顔が動く。暗い中で「とさつらに白い。

「どうなんだい」

春琴は声にならない息を漏らし、起き上がろうと身を動かし、咳き込む。淑娥が背中に手を添え、抱えるようにして斜めにする。背中を摩る淑娥に、

「もったいないことです」

弱々しい声だ。

「起きずに寝ていなさい」

春琴の肩に手をあてがいがい、淑娥の力も借りて、春琴を再び横にする。春琴は起きていようと少し抵抗するが、荒い息で頭を枕に載せる。

その苦しげな様子は痛ましく、首筋に触れると熱を持っている。

「気分はどうなんだい」

春琴は唇を動かして何か言おうとして、再び咳が始まりかけるのをこらえ、苦しい顔になる。

「何も答えなくていい。静かに横になっていればいい」

春琴は目を閉じる。息が収まってから、

「申し訳ございません」

細く言う。

「謝らねばならないのは私の方だ。こんなにも辛い思いをさせて、すまない」  
春琴は重そうに腕を動かし、目頭を押さえる。

「足手まといになるばかりでございませう」

韋荘は春琴の腕に手を添え、

「そのように言わないでくれ」

腕は骨ばかりだ。

「ここの親切なお坊さまが許してくださるのなら、しばらくここで休ませて  
いただきなさい。お上は華州に向かわれることになった。行き場所が定まっ  
たのだから、後から追ってくればよい」

「いえ、もういつでも出かけられます」

春琴は再び起きてみせようとするが、その力がない。

枕辺に座す陸氏が、

「華州の町は立派に復興したと聞きます。そこから潼関を越えれば虢州も近



いです」

「そうだ、その気になれば訳なくいける。間もなく八月がくる。お狐さまのお祭の月だ。こうして私も朝廷に仕える身となった。お祭もじきにできるよようになる。そなたをお祭の中に置くと言った約束を果たそう。棗の入った菓子を焼こう。楊爺の大好きだったあの菓子こそなたはまだ食べたことがないのだろう」

韋荘の声に涙が混じる。春琴を慰めるために実現するあてのないことを並べているだけだ。

春琴の手を握り、

「お狐さまに祈ろう。楊爺の生まれ代わりのそなただ。お狐さまが守ってくださらずにぬはざがない。狐潭に帰ることを一心に思って祈れば、叶わぬことはない」

皆でお狐さまに祈る。

春琴はそれで少しく安心したのか、静かな寝息を立て始める。

そつと立ち、

「こちらの和尚さまにお礼を申し上げたいが」

陸氏は、

「お堂でお経を読んでおられましたか、その声もいまは途絶えているようです」

簾を潜つて外に出ると、その向こうに立っていた男と当たりそうになる。

男は飛び退き、一瞬だけ目を向け、顔を大きく歪め、土に身を投じる。綜が言っていた通りの小柄な僧だ。

韋荘が問うよりも先に、

「この愚か者に天のお咎めをお与え下さい。この首、どうぞここで刎ねてしまってください」

伏せたまま僧は両手で衿を肩まで下げ、首筋を露わにする。

「いかなること」

韋荘は当惑する。

「愚か者のこの顔を御覧いただければおわかりでしょう」

僧は被り物を取り、毬栗頭をゆつくりと上げる。確かに楊爺にどこか似る角ばった顔だ。

「以前にお目にかかりましたでしょうか」

「この首を刎ねていただきましても犯した罪は償えません。良く御覧ください。ただいまこの内でお話されていた莊園を滅ぼした男にございます」

僧は顔を突き出す。

「まこと楊銀なのか」

僧は再び地に伏せ、

「楊金の弟にして、肋、胆、臆の父の銀にございます」

「そうであったか」

安邑坊の店から銀子を盗み出したあの日からすっかり面変わりしているが、確かに楊銀だ。どうしてここにいるのか。

尋ねるより先に、銀に最も大切な一つを告げる。

「そなたが難儀を救ったのは誰であるか知つてのことか。あれは胆の娘だ。すなわち紛れもないそなたの孫だ。そして我が妻だ。されば、そなたは私にとつて義理の祖父になろう。妻の難儀をお救いいただきお礼を申し上げる。」

忝い」

地に膝を付いて頭を下げる。

楊銀は地面を擦つて後に退き、

「旦那さまに頭を下げていただくなどんでもないことです。伺いまして思いがけないことに驚くばかりです。しかし、いかなることがありましても、この愚か者の首は刎ねていただくよりないのです」

「祖父に対してそのようなことができようか」

「この愚か者、何が何だかわかりません」

一瞬にして心を決める。この楊銀に委ねる以外にない。

「首を刎ねるなどもう言わないでくれ。すんだことはもうよい。それよりもいまはそなたに頼みたい。あれの祖父であるからこそその頼みだ。我が妻をこ

ここで預かっていただけまいか。あの様子ではここで死ぬやも知れぬ。そのときはまことにすまぬが、どこなりと葬ってくれまいか。この願い、どうかきいてほしい」

楊銀は目をむき、

「旦那さまはどうされるのでしょうか」

「お上の後を追って、いますぐにいかねばならない」

その言葉通りに立ち上がり、楊銀の腕を取って方丈の内に戻る。

中では、淑娥に支えられて春琴が起きている。

「聞こえたのかい」

春琴はうなずく。

「この和尚さまがそなたの祖父の銀だ。互いにそれと知らずに、ここで行き逢ったのも御仏のお導きであるのだろう。先ほども言った通りだ、そなたはここで養生しなさい。私はお上に従い、官人としての勤めを立派に果たすつもりだ」

春琴は顔を歪め、

「ここのお坊さまがもしも楊銀とか言う人であるのなら、私にとつては深き仇です。この春琴は楊爺の生まれ代わり、胆の娘です。知らなかったとは申せ、仇の背に負われたとは、汚らわしい限りです。ここにはいられません。旦那さまについて参らねばなりません。それができぬのなら、どこかの道で野垂れ死ぬだけです」

春琴の顔が真赤に染まる。

「仇も何もない。銀にかつて何かの罪があつたとしても、出家したことで消えた。そなたを背負つて救つたことで、恨みも何も全てなくなつたのだ。御仏のお導きでこのようになったのだ」

己の言葉は真実であると思ふ。

「楊爺の仇、我が父の仇、金輪際許すことはありません」

春琴の叫ぶばかりの声に、楊銀は、

「その通りでございます。この愚か者は兄の仇、息子の仇、莊園の皆さま全て

の仇です。いかなることがあっても罪が消え去るものではありません。どうかこの首を刎ねてください」

床の上に四つんばいになる。

「刎ねずにいられますようか」

春琴は横に置いた懐剣を手にし、立ち上がろうとする。

「一切有為法 如夢幻泡影 如雲亦如電 感作如是觀」

楊銀は金剛經を唱える。

春琴はひとたびは立ち、痩せ細った腕で剣を抜き、楊銀に向かって振り下ろす。たちまち崩れ、激しい咳に身を振る。淑娥が口元に差し出した布が見る見る赤く染まる。

楊銀が泣き、林婆さんが春琴の体を抱える。

韋荘は静かに、

「これが祖父と孫の避けられぬ宿命であるのか。そうではあるまい。そうであってはならない」

身を伏せ続ける銀に、

「そなたはどうしてここにいるのか、どうだろう、それを聞かせてはくれまいか」

春琴は、

「仇の口からそのようなことを」

と言いかけ、後は荒い息でぐったりとなる。

楊銀は涙を拭い、

「あのとき洛陽で胆に討たれてしまっていればよかったです。ここに、胆はおらぬのでしょうか」

「胆は死んだ。私が死なせたようなものだ」

「息子に切ってもらおう機会を失いましたか。いかなることも、この愚か者が悪いのでございます。罪はこの一身にございます。形ばかりは僧となつても、罪が消えるものではありません」

「出家しての名は何と申されるのか。どなたのお導きで出家したのか。罪が



消えぬと言いつけるのは、得度してくださった方に相すまぬのではないのか  
い」

楊銀は再び金剛經の一節を唱え、

「この愚か者は孤真（こしん）と申します。この名を与えてくださいましたのは  
仏蕃上人さまです」

「ああ、そうなのかい。それは驚いた。お上人さまなら、間違いなく罪は消  
えていよう。お上人さまとはいつどこでお会したのかい」

「十年になりましたようか。洛陽で胆と切り合ってから、我が身を恐ろしく覚  
え、我が所業を深く憎むようになりました。肋も弟に傷を負わされて、これ  
で少しは心を入れ替えるのかと思いの他、ひたすら弟を恨み、山賊稼業を続  
け、人を殺めては金品を盗っていました。血に染まった金子に、息子と妻が  
目を細め合うのが疎ましく、ある日、一人身をくらましたのでございます。  
乞食をしつつ、いつしかまた洛陽に戻ってきますと、かつての面影はなく、  
お店がありましたところも廢墟となりました。我が罪を思い、もう死の

うと決め、いかなる死に方を選べば良いかとぼんやり思案しておりますと、声を掛けてくださるお坊さまがおられました、それが仏蕃上人さまでした。お上人さまに全てを打ち明けますと、その場で髪を剃ってくださいました。弟子となつて、金剛経のお札を配つて方々を巡り、揚州のお寺にお連れくださいました。『これより三千日の間、いかなることがあつても門の外に出てはならぬ』とお上人さまはお命じになり、御自身はまた回国の旅に出ていかれました。以来、寺に火がかけられましたときにも、焼かれる覚悟を定めて内において、今年の春、ついに三千日の期が満ち、かねて言われておりました通りに、長安を目指す旅に上りました。この村を通りかかり、この持仏堂に宿を求めますと、庵主さまが重い病に臥せつておられました。ひと月ほどお下のお世話などさせていただき、庵主さまが亡くなられて、野辺の送りをすませますと、寺が無住となりましては盗賊の棲家にもなりかねないからと、村人に乞われますままに、お堂をお守りしてはや三月ほどになります。今日はお上の御一行が通られると聞き、難儀しているお方でもあればお助け申そう

と街道に出て、はからずもこのようになったのでございます」

潼関で仏蕃と別れた。あのときに付いていかなかった己に代わって楊銀が弟子となったのか。

春琴に、

「仏蕃上人さまに全てをお任せしようではないか」

「いえ、ここにはいられません。このままでは父の言いつけを守れずに終わってしまいます」

春琴は悶えるように言う。

「胆の言いつけ。何を言いつけられたのかい」

「楊爺が死ぬ前に父に言いつけましたことを、父も死ぬ前に私に言い残したのでございます。これまで申さずにおりましたが」

「そうだったのかい。それはどのようなことなのかい」

春琴は姿勢を改め、

「お祭を継ぐ者は必ずあると」

「それが楊爺の最後の言いつけだったのかい」

「そのまま父は私に。ですから」

春琴は言いかけて咳き込む。

「そなたの心はわかつている。無理に言わなくてよい。ようやく楊爺のもわかってきたような気がする。蘭くんが、楊爺は全てを知っていて莊園を滅ぼしたと言っていた。それがどうやら本当だったのだろう。楊爺の考えによるのなら、銀はもとより我等の仇ではない」

「それは違います」

小声で楊銀が言い、陸氏は、

「楊爺がそのようなことを言っていたのはいま初めて聞きました」

「胆は死ぬまで心に秘めていた。楊爺は莊園を一新して誰かに継がせようと考えた。そうであるに違いない。胆はそれを自分のことと受け止めた。私がお祭のことを話した際に、楊爺より課せられた責務を果たさねばと重く受け止めていたのだろう。気の毒なことをした」

「父に続いて私まで病の身となり悔しくてなりません」

「胆もそなたも重荷を負う必要はない。仇も恨みもない。そなたはここで体を休めるのが何よりなのだ。良くなったら、華州にくるのだ」

「それはなりません」

咳き込みながらも韋莊にすがって起きようとするのを、

「いまが最後の別れではあるまい」

少しばかり厳しい口調になって、春琴の横を離れる。

春琴は見上げる。

「もう言うでない」

覚悟を決め、

「春琴一人を置いていくのではない。すまぬが、そなたもここに残ってはくれないかい」

戸口の脇に立つ綜に言う。

綜は驚く様子もなく、

「かしこまりました」

静かに短く答える。

もとよりそうするつもりでいたのだろう。綜の気持ちに応えるには、ここに残ってもらおうのが一番よい。

「頼むぞ」

「華州に必ず連れてまいります」

春琴は首を振ってそれに不同意であると言おうとする。

「それに、林婆さんにもいてもらおう」

「お部屋さまのことはお任せくださいませ。必ず華州にお連れいたしまし  
う」

淑娥が、

「私も」

と、言う、春琴は、

「私一人が道に死ねばすむことです」

韋莊は、

「皆の心に任せるのだ。そうしてくれ」

「いえ」

韋莊は春琴の言葉をもう耳に入れず、淑娥に、

「そなたは父と母のそばにいなさい」

見返ることなしに方丈の外に出る。

これが最後であるのかも知れない。

日が傾きつつある。躊躇する間はない。方丈を後にする。

楊銀が走って前に立ち、

「この愚かな者でよろしいのでございましょうか」

「仏蕃上人さまと思って預ける」

「必ず華州にお連れいたします」

「もしもそうなるのなら何よりだ」

金剛経を唱える楊銀の脇を抜けて石段を下る。

これが最後の別れか。ここは去るしかない。急ぎ皇帝を追うのが己のいま  
為すことだ。

後ろに気持ちを残さず、前へと歩む。林を抜け、街道に出て、坂を上って  
高台に達する。すでに幔幕は跡形もない。遠く彼方に土煙が立ち昇る。そこ  
に一行の最後尾があるのだろうか。

高台からは下り坂。足に痛みが走る。古傷までが疼く。都を出てから歩き  
詰めた。全身が重くなり、顔が歪む。

方丈を後にした気持ちに揺らぎが生じる。

追うのだ。坂を下る。

痛みに額の汗を拭う。目にも手が及ぶ。汗でないものが出てきている。声  
が漏れそうになり、天を仰ぐ。

春琴とはもう会えぬのか。その覚悟をして置いてきた。そうする他はなか  
った。

遠くを見て、再び歩み始める。ここまでのようには早くはもう歩けない。



またしてもこうなった。

春琴を思う心に、嫋嫋と銀犁の顔が浮ぶ。故なくして嫋嫋を揚州に、銀犁を平康坊に置き、そのまま永遠の別れとなった。今回はどうなのか。

故なくして置いていくのではないと、己自身に弁明する。連れていくのは不可能だ。己は皇帝を追わねばならない。官人としての義務であり、春琴の望みでもある。楊銀が現れて、道に捨てずにすんだのは仏蕃上人の導きなのだろう。

嫋嫋と銀犁の場合とは違う。どこが違うのか。

官人として立派な仕事をするのを春琴は望んでいる。皇帝の後を追うのは春琴の望みに副うものだ。ここで一行から脱落して春琴のもとに留まろうと考えても、春琴の最も望まぬところだ。

だから、それでよいのか。

「抱柱の信」

韋蘭に幾度となく笑われた言葉をつぶやく。これを貫く以上に難しいもの

はないとも言っていた。

　　目頭を強く押さえる。何が最も大切であるのか。

　　驢馬の足音が聞こえ、藪たちが追いつく。

　　「お疲れではありませんか」

　　陸氏が言う。

「進まねばならない。我が身のことなど省みて許されるときではない。お上の一大事である」

己に言い聞かせるように言う。杜陵出身の進士及第者、七品官の校書郎のこの韋荘、皇帝に忠義を尽くし、民のために身を捧げ、先祖に恥じぬ立派な生き方をここに示さねばならない。貢筆を受けたのは何のためであったのか。歩み出す。

しかし、勇ましい言葉を吐くとむしろ虚しくなる。皇帝に従う数万の中のいかほどの人間なのか。皇帝が都を出て行き場を求めてさまようこと自体が尋常でない。東呉くんが鼓舞された今朝が遠く昔に思える。

「心が臆せば時に遅れ、心が逸れば時流に吞まれましたよう」

葵州を出るときに貫休が言った。唐朝そのものもはや時に遅れているのか。時代錯誤も甚だしく堂々の隊列を組んだ王鐸は節度使の息子の恰好の標的になった。貫休が聞かせてくれたその王鐸と皇帝はどこが違うのか。

そのような疑念を抱くのは官人として許されない。

青竜寺の蟻光禪師は都に残った。唐の命運によらず、仏弟子としての勤めを果たすため、牡丹を枯らさないためと、言っていた。

潼関で見送った仏蕃上人の背を思う。仏蕃に従う機会を二度見送った。よろめき、駆け寄る弟に身を支えられる。

「休みましょう」

いつも通り変らぬ表情の弟がいる。

「そうするか」

傍らの切り株に腰を降ろす。

鄭郎が水の入った瓢箪が差し出す。

「もう見捨ててくれて構わない。いつまで従ってなくても、何一つ好いことがない」

鄭郎は怪訝そうな顔、

「何をおっしゃるのでしょうか」

水を一口呑み、

「もう十分にしてくれた。そなたの自由にしてくれ」

「ここで旦那さまに放り出されては義父に叱られます」

「私が放り出されるのだ。もう無理についてこなくてよいのだ」

「妹にも叱られます。妹の受けた恩に酬いるために、何でもいたします。こ

れしきのことは、戦場を駆け回っていたころに比べたら、至極楽なものです」

「そうなのか、これは至極楽なのかい。これで挫けてしまうようではいけないのだね」

いのだね」

うなだれる韋荘に、淑娥は、

「兄はきつと約束を守ります。安心してください。春琴さんは本来とても丈

夫なお方です。きっと元通りになりますから」

心の底からそう思っているような声に、

「そなたにそう言ってもらうとそう思えてくる。あれは頑健だったのだ」

楊絃と言っていたころを思い出すと、泣けてきそうになる。

「綜に任せていただいてよろしいと思います。あれはあれで彩霞ちゃんに言われたことをやり抜く意地があるでしょうから」

陸氏が言うので、胸にはっと気づくものがあり、

「やはり彩霞が綜に何か言ったのかい」

「彩霞ちゃんは、自分の代わりに春琴ちゃんを見守ってほしいと綜に言ったのです。あれは神妙にうなずいていました」

「そうだったのかい」

彩霞に会いにいつてから綜の態度が変わったのはそのためだったのだ。

皆のお蔭でこうしていられるのだ。

藁が立ち、

「兄上には為さるべき大きなことがあるのです」

と、前に進むのを促す。

「そうだな」

兄が誰よりも立派であることをこの弟は一度も疑ったことがない。

果たして為すべき大きなことがあるのか。

華州に着いてから何をするのかと、理想を求めれば、唐のあるべき姿へと戻す仕事をする。第一には、韓建の恣にさせないことだ。韓建は良からぬ企みを抱いているに違いない。それを見抜いて挫くのだ。だがそのようなことが己にできるのか。官人になったばかりでまだ何の力もない。しかも、韓建のもとには従弟の愠がいる。

立ち上がるうとして、その力が湧いてこない。

藹はその姿に、朗吟を始める。

時天寒烈

時に寒さ厳しく

衆皆飢疲

一同は皆飢え疲れていた。

異上豆粥

馮異が自ら豆粥を煮てさしあげた。

明日旦

翌朝

光武謂諸將曰

光武帝は武將たちに言った。

昨得公孫豆粥

昨日、馮異が豆粥を煮てくれ

飢寒俱解

飢えも寒さもなくなった。

漢王朝の再興を果たした光武帝の姿。かつて洛陽に入る前の晩に、この同じところを藹が同じように読んだ。

なお望みを絶ってはならない。

「この水は、馮異の豆粥だな」

もう一口呑み、ゆっくりと立ち上がる。

皇帝一行の土煙との距離は少しばかり縮まったようだ。追いつけないほど離れている訳ではない。

五人は先へと進む。

夕日が傾き、弱い光に包まれる周りの風景が、何か懐かしいものであるか

のように見えてくる。

見覚えがある。五十年の昔に下邳の町に住んでいたところに、このあたりにもきていたのだろう。あのころは、貢挙に合格して母に孝行しようと、それ以外には何も考えていなかった。

昔為童稚不知愁 童子のころは愁いなどは知らず

竹馬閑乘遶眞遊 竹馬に乗って町を巡って遊んでいた。

曾為看花偷出郭 こっそり町から抜け出して花を見にいき

也因逃学暫上楼 勉強から逃げて高殿に登ったりもした。

招他邑客来還醉 他所のからのお客がくればお酒を飲ませてもらい

僂得先生去始休 先生がわずかでもいなくなるとすぐに休んだ。

今日故人無処問 あのころの仲間はどうしているのか

夕陽衰草尽荒丘 荒れた丘の枯れ草を夕陽が照らしている。

すらすらと詩が浮かんでくる。

勉強から抜け出して李兄弟とともに高殿に登った。それは都だった。も



しかししたらあのころが最も良かったのか。韋家にはまだまだ多くの資産があった。李兄弟はいまはどうしているのか。兄弟には一人の妹がいた。幼心に、将来は妻に迎えるのかと思った。そうなっていればと、彩霞の母と結婚した後、苦く思い出したこともあった。あの妹も生きていれば六十歳か。

取り戻せぬ過去の日々だ。

あのころから何もかもやり直せば、己も唐も、全く異なる今日があることだろう。下邳に住んでいたのは武宗皇帝の時代だった。安祿山の乱の後に、武宗皇帝だけが武力で節度使を押さえ込むことができた。節度使征伐に出た官軍が勝利したのは韋荘が九歳のとき。これより唐は再び隆盛の向かうと見えた矢先に、皇帝は仙薬の呑み過ぎで三十三歳の若さで死んだ。

唐がこうなるとは、あのころの誰が想像しただろう。これからはどのような未来があるのか。過去と同様に、いま想像することはできないのだろうか。無力な己が未来を考えてどうにかなるのか。

朝の思いがよみがえる。

立派な官人にも、立派な夫にも、立派な詩人にもなれぬ男がここにいる。昔を思う詩は口をついて出てきたのに、この胸にある本当の苦しみは歌えない。

もしも歌って、己は耐えられるのか。

銀犁のときもそうだった。銀犁を平康坊に置いてきた思いは、結局のところ歌えなかった。全く別の姿の『秦婦吟』になった。

己の詩は一体何であるのか。そして、抱柱の信とは。その間に答えるのはいまは避けたい。下邳に向かう足を止めてしまいかねない。

**下邳**で皇帝に追いつき、一行に混じって華州に入る。以来、激しい焦燥感に悩まされ続ける。

春琴を楊銀の持仏堂に置いてきた。いまはこのようなことをしているときなのか。根底からして誤っている。華州にきてはいけなかった。春琴とともに

にしなければいけなかった。

あの日の決断を悔やみ、思考を前に戻してやり直せば、やはり華州にくるしかなかったとの結論になる。

銀犁の記憶が重なる。皇帝が都を去った夜明けに銀犁と別れたとき、また会う機会があると思っていた。持仏堂ではこれが最後かも知れないと、ある程度の覚悟はした。それがなおさら己を苦しめる。

いまはこのようなことをしているときではないと焦るのならば、何をすればよいのか。華州を出て持仏堂に戻るのか。朝廷の人々は韓建の厳重な監視下にある。華州を出る自由はなく、官職を捨てる他はない。それで会いにいき春琴を喜ばすことになるのか。

同じところを回り続ける思考から抜け出るためにも、官人としての勤めを立派に果たすべく気持ち奮い立たせようとする。何もできない現実がさらに焦燥感を強める。華州にきてからの朝廷の惨憺たるありさまを見れば、一人己を責めるべきものでもないとの言い訳が成り立とう。それをもって焦燥

感を糊塗するのでは春琴に顔向けならない。

韓建は初めのうちは忠義の士のように振る舞った。皇帝を迎え入れるに当たって、州署を明け渡し、自身は竜興寺に移った。膨大な人数の官人とその家族のために、急拵えではあるが官舎も整えた。まずまずのもてなしに皇帝以下喜んだものだ。

しかし、次第に朝廷を圧迫してきて、手始めに、崔胤を宰相から引き摺り下ろして追放する。代わって宰相になった陸扆（りくゐ）は、汲々と韓建の顔色を伺い、朝議に加わってくれるよう懇請し、それを許す皇帝の詔を用意する。韓建は自分には朝議に並ぶ資格がないと固辞する。唐朝の機構上はその通りである。結局のところ、重要な案件は竜興寺で定められ、それを陸扆が受け取り、そっくりなぞるよう朝廷で決めることでおさまる。

崔胤が去り、その一派は鳴りを潜め、韓建に唯々諾々と従う連中が朝廷の主流になる。崔胤に毛嫌いされた宦官がのさばり始める。宦官にはもともと西の李茂貞と関係の深い者が多く、韓建憎しと陸扆たちの足元を掬うような

企てをする。李茂貞はといえば、皇帝の去った後の長安に入り、略奪を恣にして、李克用が修復した宮殿を焼き払う。

皇帝は憂憤に耐えない。唐朝のこの難儀を一気に解決してくれる奇傑の士の出現を夢想する。そこに道術と医術で皇帝の近くに侍る許巖士(きよげんし)が付け入る。朱朴(しゅぼく)なる人物を推薦する。古書に通じ、経世の才があり、悠揚(ゆうやう)迫(せま)らぬところは謝安(しゃあん)に似、直言(じきげん)憚(はば)らぬところは魏徴(ぎちょう)の趣(おもむき)があると口を極めて褒める。謝安は北方より襲(せま)い掛(か)かってきた百万の大軍を一戦で斥(しりぞ)けた名宰相(めいさいそう)であり、魏徴は唐の太宗に仕えて言うべきことを言った臣下の鑑(かたど)りである。朱朴を召し出してみると、大した弁舌(べんげつ)家で、皇帝はすっかり心を奪(さら)われる。

朱朴は、「某(たれ)を宰相(さいそう)にしていたいただきますれば、ものの一ヶ月で、天下を太平にしてみせましょう」と大法螺(だいばら)を噴(ふ)く。皇帝は幻惑(まぼろし)され、周囲の反対を押し切(き)って、宰相(さいそう)に任命(にんめい)する。朱朴(しゅぼく)を推薦(ていせん)した許巖士(きよげんし)は莫大(もくだい)な褒美(ほうび)を得る。

韓建(かんけん)は、資糧(しりやう)を華州(くわしゅう)の行在(ぎやうざい)所に輸(ゆ)送(そう)するよう全土(ぜんと)の節度使(せつどし)に向(む)かって檄(げき)を飛

ばす。韓建の狙いは、皇帝を我が掌中に置いて天下に号令することだ。実際問題として、皇帝以下数万もの人間を受け入れ、それ相応の物資の裏付けがなければやっていけない。二百数十年も続く皇帝の権威はなお完全に失せ果ててはおらず、義理堅く送り届けてくる者もいる。李克用は檄を受け、「韓建は天下の癡れ者である。しかし、華州を困らせるのは、結局は、お上を李茂貞の虜にさせてしまいか、朱全忠を利するか、どちらかになるだけだ」と、馬を連ねて大量の穀類を届けてくる。

諸侯からの貢納と言えば、多額の貢納で隴西郡王の称号を得た上に、勝手に帝位についた董昌がいた。韋莊が婺州を発つ直前に、錢鏐が董昌を討伐する戦いを始めた。董昌は揚州の楊行密に使いを送り、北と南から錢鏐を挟み撃ちにしようとした。錢鏐はものともせず北に南に奮戦し、乾寧三（八九六）年五月、越州城に入つて董昌の首を切り、それを都へと送った。董昌の首が長安に届いたのは、皇帝が李茂貞に追われて脱出する直前のことだった。

揚州の楊行密、成都の王建、そして汴州の朱全忠からも、若干の物資が届

き、それぞれが皇帝の行幸を願い出る。現実には、揚州や成都や汴州へ皇帝が出向くのは不可能で、韓建を牽制しようとしてのことだ。朝廷は取りあえず聞き流すと、朱全忠は、皇帝を洛陽にお迎えするべく二万の兵を率いて参上すると、脅しをかけてくる。「崔胤はこの上ない忠臣、お上のおそばから離すべきでない」とも言ってくる。朱全忠に本当にこられては面倒なので、韓建は崔胤の宰相復帰を受け入れる。

九月、崔胤が華州に戻る。崔胤派が息を吹き返し、陸扈の足元はたちまちぐらつき、宰相職を解かれる。崔胤派が勝利したところで、所詮は籠の中の鳥の争いでしかない。皇帝は朱全忠の後押しで戻ってきた崔胤を信用せず、朱朴の大言壮語に心を傾ける。

このようなかで、官人となつてまだ一年に満たない者に何ができるか。羽振りによさそうな閥に加わるのがよいのか。朝廷の片隅でじっと息をこらしているのがよいのか。同じ華州には従弟の愠がいる。可能な限り愠に知られぬよう身を縮めているのが最善か。身の保全を図るだけであるのなら、何

のためにここにきたのか。これで春琴にもしものことがあったならば、持仏堂に置いてきた意味は何であったのか。

幸いにも、淑娥が言った通りに、綜は約束を果たす。冬の初めに、春琴を連れてくる。

「ようやく追いつきました」  
手をつく春琴を凝視する。

春琴を思わぬ日は一日とてなかった。心の内にあった春琴に比べ、目の前の春琴はひと回りもふた回りも小さい。余りの痛ましさにたちまち目が曇る。  
「よくぞここまでできてくれた」

言葉がすでに潤う。

答えようとする春琴は、声を出す前に咳に苦しみ、床に崩れる。韋荘は両腕で支える。力を少し入れただけで壊れてしまうほどに体が細い。

呆然としてしていると、林婆さんが慣れた手つきで、春琴を楽な姿勢にする。  
「随分と好くなられました」



林婆さんが言う。

「そうかい、好くなったのかい」

長く伸びた髪に触れる。細く真白な首に青い血管が浮かび出ている。剣術の修行をして真黒に日焼けしていた楊絃とは全く違う。

やや落ち着いた春琴は、

「平陽公主がこれではいけませんですね」

か細く笑う。

「よくぞできてくれた。ここで静養すれば元に戻る」

努めて自然な声を出そうとする。

林婆さんは春琴の背中を撫ぜ、

「お望み通り華州にこられたではありませんか。これで旦那さまのために存分にお働きになれましょう」

「ええ」

春琴はうなづく。

「そのためにも、もっと好くなるのです」

綜が夜具をかける。

春琴に安堵の表情を浮かぶ。

春琴に会えたのは大きな救いだ。しかし、遠く離れて想うのとはまた違った辛さがある。

春琴が眠りに落ち、韋荘は戸口に出る。

「楊銀はどうしたかい」

鄭郎に尋ねる。

「いつの間にか、帰られたようです」

「礼を言いたかったのだが。いろいろと聞きたいことも、話したいこともある」

持仏堂での短い時間では心残りがあった。

左右の通路を見て、楊銀の姿はない。粗末な同じ作りの建物が両側に並ぶ。韓建が用意してくれた下級官僚のための住いである。

「そのうちまたこられましよう」

しかし、楊銀はそれつきり姿を見せない。

春琴は持仏堂で静養し、幾分か持ち直したものの、華州にくるために、残る力をほとんど使い果たした。起きることも適わぬままに、季節は寒さを増していく。

春琴がきても、焦燥感はかえって強まる。春琴に残された時間は明らかに長くない。この貴重なときに己は一体何をしているのか。このようなことをしているときなのか。春琴は己のために何かをしようと華州にきてくれた。その気持ちに副うには、官人としての立派な姿を見せるのが何よりであるに違いない。現実はそれと程遠い。

病人の前では隠しているが、綜も伯父に対して苛立ちを見せる。何をしているのかと非難されて当たり前だ。

朝廷は無意味な内輪もめに明け暮れる。韋荘は瑣末な仕事を与えられているだけだ。

一つの転機が訪れる。宮中より立派な紙が届けられ、藹の筆で『秦婦吟』を差し出せとの命だ。藹は潔斎して筆を執る。藹の不思議な才は、皇帝の所望であろうともいつもの素朴な筆運びのまま一字も淀むところがない。

提出して数日後、韋荘は皇帝に召し出される。

「光栄なことだ」

横に伏せたままの春琴の見送りを受け、行在所にいく。韓建の役所に少しばかり手を加えた皇帝の仮住いの小さな一室、皇帝とこれほど間近なところには身を置くのは初めだ。

「まこと哀れな詩である。あの折、朕は先帝に従って成都にいき、都で何があったのか、これまで十分に聞いていなかった。そなたは秦婦の言葉をどこで聞いたのか。詩にある通りに中和三年に洛陽でまこと秦婦に会ったのか」

皇帝の御下間に答えるべく身をわずかに起こす。恐る恐る皇帝のつま先から見上げていく。思うに反し、皇帝の視線はこちらにはない。どこを見ているのかつかめぬどんよとした眼差し、表情にはまるで生気がない。華州に

きて以来、酒びたりとの噂を聞く。その通りなのだろう。

「臣の見たままを、秦婦の口を借りて詠みましたものにごさいます」

「では長安におったのか」

大儀そうに口中で言葉を転がし、自身聞いていることに大して関心もないのだろう。

己にとつてより、『秦婦吟』にとつて幸いするかとの期待があつた。昔なら『秦婦吟』を皇帝が聞いてくれるのは大変な名誉だ。いまでは皇帝とても秦婦と変らぬ無力な存在なのか。

貢奉を受けるために都に滞在していたことを手短かに告げる。

「なるほど、それで合点がいった。伝聞では、かくも立派な詩は作れまい。自身の体験があればこそ真実の言葉となる」

「恐れ入ります」

気乗りしていない皇帝の様子に、さほどには恐縮もしない。

「そなたは女に代わって歌った。女は哀れにも我が身を守れない。我が身に

起こったことを我が口から語れもしない。この詩は、女たちの哀れを伝える貴重なものだ」

「臣の詩の出来はともかくも、秦婦たちの悲しみの言葉は人々の胸に響くものであつてほしいと願つております」

そこで話が途切れる。

皇帝はどんよりとした目のまま黙つてしまふ。韋荘は頭を垂れ、静かに次の言葉を待つしかない。

皇帝が舌打ちする。

「全て詰まらぬことだ」

怒気を含んだ声に、はっと目だけを上げ、初めて皇帝の目と合う。

「そなたに言ったのではない。あの連中だ」

皇帝は大きく息を吐く。酒の臭気が鼻を衝く。

「昔の都のことを話していたのだったな。都には無数の哀れな女がいた。『秦婦吟』にも歌い尽くせぬ草々があつただろう。どうだ、一つでも二つでも聞

かせてはくれまいか」

皇帝は微笑む。

ここでどうすべきなのか。皇帝の言葉に素直に従ってよいものなのか。脇に控える宦官に目を向ける。

「お上の御所望である。何なりと知るところを話されよ」

宦官に礼を返し、哀れな女を思う。すぐに浮かぶのは銀犁だ。次には阿枉であり、莠の妻や娘。身近すぎる。林婆さんに聞いた雲芳子（うんほうし）の話にしようと思える。

「臣が直接に知る人物ではありませんが、李茵（りいん）にまつわる話を申し上げさせていただきます。李茵と申すは荊州の出身で、右諫議大夫の李洵（しゆん）のと同郷でありますから、李洵（しゆん）どのも御存知であるかも知れません。であれば、実際にあつたことなのでしょう」

鄭郎（ていろう）のほとりの主人の李洵（しゆん）の名を出したのは、どの派にも属さない李洵（しゆん）は、誠実な人柄で皇帝にも信頼されているからだ。

「そうであるか」

皇帝は少しく首を前に出してくる。

「時は黄巢がくる直前の秋であります。李茵も私と同じく、翌春の受験に備えて都にきておりました。勉強に疲れ、気晴らしにと、ある日、ぶらぶらと町を歩き、何時の間にやら御溝の脇へときておりました。ぼんやりと水を眺める李茵の前へと、赤や黄に色づいた葉が流れて参ります。この水は禁苑よりくるものなのか、この葉もあるいはお上のお目に触れたものであるうかなどと考えておりますと、中にひと際大きな葉が目につきました、文字らしきものが書かれている様子です。冠の紐を使って導き寄せますと、葉の上に一篇の詩がしたためられています」

その詩を朗誦する。

流水何太急

水の流れはどうしてこうも急なのでしょう

深宮尽日閑

深い宮殿の奥はひねもす閑かでありますのに。

慇懃謝紅葉

さあ、紅葉よ、いつてらっしゃいまし



好去到人間　人々の暮らしのありますところへ。

「外に出るのを許されぬ後宮の女の書いたものであるのか」

皇帝は尋ねる。

「李茵はそのように考え、誰とは知れぬ宮女の心を憐れみ、葉を持ち帰って、書囊の内に大切にしまったのであります。」

間もなく黄巢がやってきまして、先帝は都をお出になり、遅れて李茵も脱出し、南山へと逃げ込みました。山中をさまようある夕暮れのこと、木の根元で寒さに凍えておりますと、『立派な男子が、脛を出して震えているのは可笑しゅうございます。これでもお被りになつたらいかがですか』と、女が温かな衣をかけてくれます。その親切に身を任せておりますと、『お一人だけ温かくして、妾が冷たい風の中に立っただけでも知らん顔なのでしようか』と、女は一つ衣の内へと身を寄せてまいります。

皇帝は先ほどまでと異なる顔で聞いている。

「夜が明けましてから女を見ますと、この世に二人とはいないほどの美人。」

宮中侍書の雲芳子と名乗り、都に残っていては賊に身を汚されるだけと、懸命にここまで逃れてきたと、その身の上を語ります。言葉の端々に才思が感じられ、もしや例の紅葉の主ではとの疑いを持ち、『流水何太急』と告げてみます。『それは妾の詩。どうして御存知なのですか』と、女は後の三句を言います。李茵は囊中より紅葉を出して見せます。女は『まさに妾の題したものです』と泣いたのであります

「不思議な会邀であるな」

「二人は手に手を取ってお上の後を慕って成都へと歩み、綿州に至って追いつきました。たまたま通りかかった田令孜さまが、雲芳子を見るなり、『これは書家さんではありませんか。どうしてこれに』と、自分の馬に乗せて連れて行ってしまわれました。雲芳子は再び手の届かぬところへと行ってしまい、李茵は一人宿でしよんぼりしておりますと、夜更けに、どこから入ってきましたものか、部屋の内には雲芳子が立っております。『監視する宦官に賄賂を渡して逃げ出てまいりましたの。お上にお願ひして、あなたさまに官

位をお授けいただくと思つていたのですが、考えてみれば、勝手に男女の契りを結びましたのは宮女として大罪を犯したことになり、妾もあなたさまも重い刑罰は免れません。二人で逃げましょう。李茵は雲芳子の言葉に従い、故郷である荊州に走つて、両親に引き合わせて結婚したのでございます。

二人は人も羨む仲のよき、李茵はこの上ない幸せに浸つておりましたが、どうしたことか日に日に痩せていきます。ある日訪ねてきた友人の道士が李茵を見るなり、『貴殿の顔には邪気があります。このままでは命が危うい』。聞きました雲芳子は咽び泣きます。『あなたさまに邪気を及ぼす気など毛頭ありませんでした。しかし、所詮、生者と死者は道を異にせねばならぬのでした』。雲芳子は、黄巢が宮中に入つてきた際に自経していたことを告げます。李茵の深い思いに引かれて魂がこの世に留まっていたのです。李茵は、死んで雲芳子と同じ黄泉の国にいけるのなら本望と言いましたが、雲芳子は別れの酒を置き、一篇の詩を残して消えてしまいました。

「その別れの詩とはどのようなものであったのか」

「それは伝え聞いておりません」

「それは残念だ。雲芳子のように後宮に入れられて、哀れにも命を落とした宮女がたくさんいた。雲芳子の残した詩を耳にしたいものだ。伝え聞かぬと申すのなら、どうだ、『秦婦吟』を書いたように、雲芳子に代わってそちが詠んではくれまいか」

「臣にはとても」

「辞退」しても皇帝は許そうとしない。

「宮女に代わっての詩は臣には難しく、あるいは李茵に代わっての詞ならば、同じ貢奉の受験生であったこともあり、座興に御披露させていただくこともできましようか。それにて御容赦願えませんかでしょうか」

ある種の決意と、若干の警戒心を持って、深く頭を下げる。

皇帝は微笑み、

「そちの好きなようにするがよい」

「有難き幸せに存じます」

すでに一篇の詞が心の内にできあがっている。  
自ら拍子を取り、節を付けて歌う。

昨夜夜半

昨日の夜中に

枕上明夢見

はつきりと夢に見て

語多時

たくさんのことを話した。

依旧桃花面

桃の花のような顔は昔のまま

頻低柳葉眉

柳の葉のような眉をしきりに曇らせていた。

半羞還半喜

半ば恥じらい、半ば喜び

欲去又依依

行こうとしてまたためらっていた。

覺來知是夢

覚めれば、まさにこれは夢

不勝悲

悲しむばかりだ。

雲芳子の詩になぞらえたものを作るのは実際にはそれほど困難ではない。

雲芳子は宮中の外の世界へ強い憧憬を抱いていた。流水に浮かぶ葉ととも  
に外に出ていきたかった。その気持ちを敷衍していけば、華州に閉じ込めら

れている韋荘のいまの思いが強く投射され、皇帝が先ほど舌打ちした思いにも通じようか。

韋蘭の風任せの生き方を強く羨ますにはいられない。蘭の誘いを断り、ここに己の身を置くに至った。雲芳子の心を我が事として皇帝の前で歌うのは危険だ。

何もできぬいまの己にふさわしいのは軟弱な詞だ。

皇帝はうなづく。

「雲芳子の悲しみは安易に歌い尽くせるものではあるまい。無理な所望をした。許せよ。それにつけても思い出されることが数多くある。中和四（八八四）年七月のこと、まだ成都におられた先帝のもとに、黄巢の首が送られてきた。賊に従っていた姫妾たちも救われてきた。いずれも雲芳子のような者たちだ。先帝は大玄楼で姫妾たちに、『汝等はみな勲功ある家々より宮中に入った貴女ばかりではないか。代々、国の恩を受けてきながら、何故に賊に従ったのだ』。先帝のお尋ねに、姫妾たちは恥じ入って頭を深く垂れた。一人の女が顔

を上げた。『国家は狂賊凶逆を百万の衆をもつても防ぐことができたのでしょ  
うか。潼関を破られ、長安を保てず、蜀の地に都を移されました。いま陛下  
は、妾たちが賊を拒めなかったのは何故かとお叱りになりました。では、  
数多の公卿将師は一体何をなさったのでございましょうか』先帝は黙然と姫  
妾たちの前を去った。都を見捨てて逃げ出された先帝が如何にして女たちを  
非難できよう。そちはどう思う』

皇帝は俄に熱を帯び、韋荘は頭を下げ無言のまま聞く。

「先帝が都を出られたとき、まだ年若かった朕は、懸命に先帝を追った。履  
物が傷み、ほとんど裸足で山中を歩き、疲れ果て、ここで死ぬしかあるまい  
と、岩の上にくぐったり臥せった。田令孜が馬に跨ってやってきた。朕は道に  
出て、『どうか馬を貸してはくれまいか』と、手を擦り足を擦って頼んだ。田  
令孜は目を剥いて怒り、『この山中のどこに余計な馬があるものか』。朕の背  
中を鞭で撃った。『馬の四本の脚よりも、うぬについているその二本足を動か  
して進むのだ』。田令孜の罵声はいまも耳に残り、そのときの痛みはいまもこ

の背にある」

声の激しさに見上げると、皇帝の目付きが一変している。李茂貞と王行瑜が、皇帝を見るなり口がきけなくなってしまった理由がわかる。皇帝は三十五歳、本来はこの厳しさを有しているのだ。

左右に侍る宦官が身を縮めている。

「昔語りに熱が入ったようだ。今日は朕の事を言うつもりはなかった。不幸な女たちについてそちに聞こうと思っていた。朕の本来の願いは、秦婦の嘆きが二度と聞かれぬ世にすることだった。即位のとき、先帝の柩前に我が朝の恢復を誓った。皇祖皇廟の遺徳を受け、賢豪を集え、大綱をなお太からしめんとこの烈々たる志を抱いていた。それより九年の歳月が過ぎ、秦婦の嘆きは疾うに絶えるべきであったのに、天下にはむしろ嘆きの声が充満している。これはいかなることであるのか。朕が皇位にあるのを天は嘉せぬのか」

皇帝は拳で座を撃つ。

「朕が不徳は天に見放され、民の望みを絶ってしまったのか。ここ華州にき



てより、朕はこの小さな行宮所に幽閉同然の身だ。何もできない。しかし、なお朕は皇帝なのである」

皇帝はここで杜甫の詩を朗誦する。

煌煌太宗業　太宗皇帝のお仕事は煌煌と輝き

樹立甚宏達　樹立されたものは広大にして永遠に貫き通る。

「かの安祿山の乱の余燼が消えやらぬとき、朝廷の小官に過ぎなかった杜甫でさえかような高い志を抱いていた。朕は皇帝である。煌煌たる太宗の業を継ぐ者として、秦婦の嘆きを必ず絶たねばならない。朕にいま何ができようか。そちの考えを聞かせてはくれまいか」

「臣が如きにいかなる考えがございましょうか」

初めて皇帝の真実の声を聞いた。どう答えたらよいのか。

貢挙の合格者が宮中に呼ばれ、皇帝の前に身を置いたとき、突如として思われたのが朱全忠だった。皇帝のために、民のためにと、今日まで考えてきた。春琴もそれを望んできた。『秦婦吟』を作ったのも、貢挙を受けたのもこ

のようなきを得るためではないのか。

大言壮語する軽薄な朱朴の顔が浮かんでくる。

「いかがいたしたか」

黙っている韋荘に皇帝が口を開くよう促す。

「何であれ、遠慮なく申せ」

韋荘は決断する。

居天下之広居　　広々とした天下にいて

立天下之正位　　天下の正しい位置に立って

行天下之大道　　天下の大いなる道を実践する。

得志与民由之　　志を得れば民とともに居て

不得志独行其道　　志を得なければ一人その道を守る。

洛陽において進退窮まったときに韋蘭が歌ってくれた孟子の言葉。東呉くんの背にもかつてこれを贈った。

二千年の昔、孟子が言った通りに、王道政治の理想を皇帝に告げる。

「それはいまにおいては迂遠過ぎるのではなからうか」

孟子の話聞いた王と同じ問を皇帝も発する。

「仁義あるのみにございます」

孟子が困難な時代になぜ理想を掲げたのかを言い、漢が一度は滅んで再び興った時代を説き、「志ある者は事ついに成る」との光武帝の言葉で皇帝を励ます。これはかつて甥や姪に話した筋道のままだ。

皇帝は静かに膝を打つ。

「よくわかった。朕はここに窮すとは言え、光武帝が一椀の豆粥に飢えを凌いだようなところには至っていない。我が唐朝は衰亡の淵より脱し、昇竜の勢いを得られると信じたい。それには誰ぞ、光武帝を助けた耿弇將軍に代わる者が必要である。それは誰であろうか」

その間に、東呉くんならば李克用を挙げるだろうと思うが、韓建のいる華州においてそのようなことは言えない。恐縮の体で黙っていると、

「時が移り過ぎております」

宦官に促され、

「また話を聞かせてくれ」

皇帝は出ていく。

行在所から下がると、忸怩たる思いがある。

間違ったことは決して言っていない。しかし、己の身を守ろうとした。具体的な事柄を言上すれば、何かしら争いごとに巻き込まれるのは必定だ。朝廷内には薄汚い策謀が渦巻き、華州において絶対的な力を持つ韓建がいて、その下に慍がいる。

我が身が危うくなつたならば、病の床にある春琴はどうなるのか。春琴が体を横たえる寝床だけは確保しておきたい。

春琴のために言えなかつたと春琴が知れば、春琴は自身の身を責めるだろう。春琴に隠さねばならぬのは辛い。

他に何が言えたのか。孟子が考えた以上のことは己にはない。

「お聞かせいただけませんでしょうか」

春琴は皇帝の前で歌った詞を聞きたがる。

春琴の琴を持ち出し、韋荘は自分で奏いて歌う。春琴や銀犁のように上手には奏けない。

覚来知是夢　　覚めれば、まさにこれは夢

不勝悲　　悲しむばかりだ。

歌い終わると、様々のことが浮かんでくる。

「銀犁さまを想われての詞でございましょうか」

そのようには考えていなかった。春琴に言われてみれば、そうでもあるようだ。

「そなたを想つてのものだ」

春琴は微笑んでいる。

本当は違う。己のいまの気持を言葉に出したならば、こうして一見平静でいることはできなくなるだろう。

**乾寧四**（八九七）年正月。

韋莊は左拾遺の職を拝す。杜甫が皇帝に仕えたときと同じ地位であるのは単なる偶然だろうか。

その前の一時期、韋莊が宰相になるかも知れないと、噂が流れた。皇帝は韋莊の話にいたく感心したと人々の間で語られ、それから話が発展したようだ。人々の口吻は羨むより、蔑むかのようなだった。諧謔の詩で宰相になった鄭縈や、虚誕の説で皇帝を惑わす朱朴と同類と見られたのだ。

誰かがそのような噂を春琴の耳に入れたのだろう、  
「旦那さまの御活躍を待ち望んでいるのでございます」

韋諱も、

「兄上を不合格にして一番困るのはお上御自身だったと言うことによく気づかれたのです」

二人ともよいこととして受け止めているように言ってくれる。

「あり得ないとは思うが、万が一にも有難き命を頂戴すれば、唐朝の中興のために全てを捧げよう」

二人に決意のほどだけは示した。本心では、噂が噂のまま終わるのを望んだ。もしそうならなければ我が身は長くは持たない。

その予感を裏付ける噂も流れた。秦婦吟の秀才は、かつて黄巢に心を寄せ、賊の大官、皮日休と深い親交を結び、唐の王族や高官が斬られるたびに快哉の声を挙げていたと言う。杭州では皮日休の息子と仲がよく、まぎれもない証拠が『秦婦吟』の中にあるとも言う。それは「天街踏尽公卿骨」の句。韋荘は喜んで「天街において公卿の骨を踏み尽していた」。この噂のとは崔胤であろうか。初めて洛陽で会ったとき「天街踏尽公卿骨」に崔胤は不快感を示した。

続いて別の噂。韋荘には、若い頃から女狂いの性癖があり、いまも六十を超える年齢でありながら、四十歳余りも年下の若い妾に心をとろかし、富平から下邳への移動の際には、お上の難儀を他所に愛妾のそばから離れられず

一行に遅れた。この噂のもとには韋慍であろうか。

宰相になるやも知れぬと思われなければ、このような不快な噂が流れることもなかつたらう。万一、宰相にでもなつたらより酷いことになるうか。幸いにも左拾遺に留まり、さらに幸運なことに上役は李洵だ。

鄭郎が縁で親交を持つようになってから、李洵は何かと好意を示してくれる。このごろは韋藹を訪ねに官舎にくる。藹の字を絶賛し、純朴さを高く買ってくれている。韋莊が留守のときは、藹はもとより口下手であるから、李洵と二人で話すようなことはあまりなく、静かに時を過す。綜が居合わせれば、話し相手はもっぱら綜で、陸氏や淑娥とも自ずと親しくなり、春琴にも気を遣ってくれる。

李洵の下で杜甫と同じ地位に就けたのは、皇帝の計らいであるのかも知れない。あの日以来、皇帝の覚えはなかなか愛でたく、齊雲楼の最上階に近臣を集めての新春の酒宴にも、韋莊は李洵ともに居並ぶことを許される。

その酒宴で、皇帝の最も近くに控えるのは朱朴で、崔胤とその派閥の人々、



あるいは、韓建に媚びる人々はいない。

皇帝は初めから沈鬱な面持ち。華州にきて初めての元朝の儀は、唐朝始まって以来と言ふべき寂しさだった。かつては周辺諸国からの使者も多数並ぶ国家の一大盛事であった。それが、行在所のこじんまりとした広間でほんの形ばかりになってしまった。それさえも韓建にお伺いを立てて許されたからできたので、元朝の儀さえ自身の意志で行えない皇帝とはいかなる存在なのかと、誰しもが思わざるを得ない。

盃が近臣の間を巡り、順に祝賀の辞を述べても白々しく、皇帝は一言も発しない。朱朴も得意の弁舌も虚ろに響き、座は白ける一方である。

朱朴は苦り切つて、宦官に指図して、管弦系竹を並べさせる。数人の宮女が皇帝に挨拶し、帝の徳を讃える頌歌を演奏する。目出度い歌でありながらも宮女の声は沈み、体を硬直させる人々の間を陰々と素通りしていく。

「止めよ」

皇帝の声が轟く。

「聞くに堪えぬ」

盃を床に放り投げ、

「これほど不味いものがあるのか」

朱朴が詫びを言いつつ盃を拾う。

「旨い酒が呑みたいものだ」

朱朴は何事かを言いつつ盃を皇帝の前に捧げるが、それを払いのけ、

「そうだ、石濼（せき）そくは控えおるのか」

朱朴はその一言で宦官を走らせる。

水を打ったような沈黙がしばらく続き、

「ただいま参りました」

駆け戻つての宦官の返答に、わずかにほっとした空気が流れる。

宮女たちはしおしおと出ていき、広間の中央に胡琴が据えられる。

石濼が宦官に手を曳かれて入ってくる。先々代の皇帝の世から宮中に出入りする琵琶の名手だ。老いた石濼は型通りの挨拶をする。

皇帝は優しげな声で、

「朕の心を穏やかな春のようにほぐしてくれる曲を聞かせてくれまいか」

石濂は一考し、温雅な曲を選ぶ。

手練の演奏は、第一音からして韋荘に強い感銘を与える。まさしく旧き好き唐の音だ。

曲が終わると、自然と涙が滲み出てきている。

「良い曲であった。しかし、酒はちと呑みにくい。どうだろうか、卑俗な曲をそなたは知らぬだろうか」

石濂は首を傾け、

「この曲などはいかがでございましょうか」

別の曲の始まると、

「それはいかん。朕には相応しからぬ曲だ」

皇帝の言に、

「恐れながら、陛下の御聖徳には、いかなる曲も及ばぬと存じます」

朱朴が間に入ろうとするのを、

「徳などとはおよそ無縁の曲がよい」

石濼は困惑し、別の曲を奏き、皇帝の意に適わぬこと三度に及んで、

「それにしよう。難儀な所望をした。それを聞きつつ酒を呑むとしよう」

新たな盃が皇帝の手に運ばれる。

ようやく御意を得た曲目は『菩薩蛮』。唐の世の始めのころに、女蛮国からの使者が入貢し、菩薩蛮隊と称する楽隊が金の冠を傾け瓔珞を揺らしつつ演奏したのがその最初とされる。宮廷と無縁ではないが、実際には色街で聞かれる俗な曲だ。石濼の手にかかると、素晴らしく麗しいものになる。

韋荘の身が震える。これは銀犁との最後の夜に歌った曲だ。

人人尽説江南好 人は江南のすばらしさをたたえる

遊人只合江南老 漂泊の人は江南に老いるのが良い。

春水碧於天 春の川は空よりも青く

画船聽雨眠 船は水声の中に眠る。

追憶に沈む韋荘の耳に、衣擦れの音がする。皇帝は玉座を離れ、人々に背を向けている。その前で扉が開かれ、午後の日差しが射し込む。光の中へと皇帝は出ていく。

石濼の演奏はそのまま続けられ、皇帝は斉雲楼の高殿に巡らされた欄干に身を寄せる。皇帝が見る西の彼方に長安の都がある。

皇帝の肩が動き、深い嘆息が漏れる。

石濼は初めに戻って『菩薩蛮』をもう一度奏く。

皇帝の声が微かにする。曲に合わせて歌っているのか。声は空に散じ、楼閣の内の韋荘には意味ある言葉としては聞き取れない。

二度目も終わりに至り、石濼は一瞬のためらいの後、三度目を繰り返す。

皇帝は振り返り、ゆっくりと歩み出してくる。重く沈んだ声だ。

野煙生碧樹 靄につつまれる緑の木々の向こう

陌上行人去 人は道を去っていく。

安得有英雄 英雄はどこにいるのか

迎帰大内中　大内に迎えてくれる者は。

聞き取れたのは終わりの部分。

皇帝は玉座に戻り、石濼の演奏が止まり、周囲よりすすり泣きが漏れる。

「朕が心に適う演奏であった」

皇帝は都に戻れぬ孤愁を歌った。

石濼に褒美の酒が与えられる。盃が人々の間を一巡する。

「誰ぞ朕の詞に続けて歌う者はおらぬか」

皇帝の声に応じる者はいない。

皇帝は盃を煽り、

「石濼がもう一度弾く間に、誰ぞ、詞を考えよ」

静まり返った中を石濼の琴が流れ、終わると、皆が身を堅くし顔を伏せる。

「詞を考えた者はおらぬのか」

皇帝が二度、三度と問う。

「この席に秦婦吟の秀才がおりましたよう」

誰かの声がする。韋荘の身がぴくりと痙攣する。

「そうであつた。秦婦吟の秀才だ。韋荘はどこにおるのか」

韋荘は顔をわずかに上げ、

「ここにございます」

「そこにおつたではないか。秦婦吟の秀才のそちは韋応物の四世の孫と聞く。『菩薩蛮』に詞を添えるくらい何の難しいこともあるまい。遠慮はいらぬ。

歌つてくれまいか」

「仰せのままに」

深く頭を下げる。そうする他はない。

誰が秦婦吟の秀才を名指ししたのか。決して好意からではあるまい。

皇帝は英雄の出現を希求する気持ちで歌つた。英雄は韓建ではなく、宰相の朱朴でもない。皇帝の意を受けて続きを歌えば、韓建の怒りを買ひ、朱朴に憎まれる。ここにはいない崔胤にも嫌われるだろう。

「石濼の横に出よ。いま一度猶予を与えてつかわす」

「畏まりました」

韋荘は進み出て石濼の隣に座す。

石濼は弦の調整を始める。時間を稼ぐ情けであろう。

「よろしいか」

石濼の声に、

「お願いいたします」

韋荘は目を閉じる。

石濼は達人だ。音が出始めると、その曲だけがこの楼閣に存在する。皇帝の前であろうが、華州の斉雲楼であろうが、一切関わりなしに『菩薩蛮』の曲だけがある。

頭から雑念が払われる。石濼の弾く『菩薩蛮』のままにこの曲の心を歌うのだ。

平康坊の仙水楼の情景が浮かんでくる。金の糸で編まれた籠の内に「相思、相思」と鳴く鸚鵡がいる。銀犁の琴に合わせて一つの詞を歌い、続けて次の



詞を歌おうとした。

如今却憶江南樂

いまでは江南の樂しさがかえって想われ

最初を口にしたところで、銀犁が強く弦をはじき、その先が消えた。

韋莊は目を開く。

二度目の演奏に、韋莊は歌う。六十一歳の韋莊にかつてのような声は出ない。それでも音律に適った詞が発せられる。

紅樓別夜堪惆悵

この夜の紅樓の別れにどうして堪えられましょう

香燈半捲流蘇帳

燈が入り、刺繡の簾が半ば巻き上げられています。

殘月出門時

門を出ていくのは月の傾くこのとき

美人和淚辭

美しき人は涙で言葉に応じます。

富貴な家の女性の部屋。恋しい人は門を出て行って戻ってこない。

皇帝がさきほど歌ったのとはまるで違う内容の詞だ。

石濼の胡琴は後半に入る。

琵琶金翠羽

琵琶を飾るは金翠の羽

絃上黄鶯語

絃上に語るは黄鶯の声。

勸我早帰家

我に勸める、早く帰れと

緑窓人似花

緑の窓に寄りそう花に似た人のもとへと。

遠く別れていった男の情。石濼の弦上の黄鶯の声が、韋荘に早く帰るよう勧めるのか。花に似た人は誰か。銀犁か。それとも嫋嫋か、あるいは春琴か。

曲は終わる。

石濼が弦を押さえて余韻を消す。韋荘は静かに息を整え、皇帝を拝す。

座は静まり返ったまま。

石濼の『菩薩蛮』に引かれるままに歌った。皇帝の詞とは何ら関係ない情痴の詞だ。韓建を恐れて、わざと皇帝の詞と内容を変えて歌っても、このようになっただろう。

張り詰めた静寂が続き、

「佳い」

皇帝の声がして、人々の間に安堵の息が漏れる。

「朕が誤っていた。『菩薩蛮』はかくあるべきだ。秦婦吟の秀才は曲の心をよく知っている」

「この悪声は石濼殿の音色を汚し、拙き詞は『菩薩蛮』に合うとは申せません」

「いや、まことに佳かった。どうだ、もう一曲、歌ってはくれぬか」

韋荘は後ずさりし、

「有難きお言葉にはございますが、お耳障りなこの声、これ以上お聞かせ申すのは平に御容赦を願います」

「もう一度だけでよい。曲目はそちの好みに任せる。頼む。ここでがらりと気分を変え、この後の酒を愉快に飲みたい。さあさあ、盃を巡らせよ。皆の間をひと回りする間に、秦婦吟の秀才が佳き詞を考えてくれるであろう」

拒むことはできない。

一巡した盃が最後に韋荘の前に置かれる。

「どうだできたか」

「恐れながら、曲は『訴衷情』を選びたく思います」

「情趣溢れる曲である。石濼は存知おるか」

「耳に覚えがございます」

「では、二人に御苦労をかけるでしょう」

韋荘は拝礼し、静かに立ち上がる。

石濼の胡琴が鳴ると、韋荘の身はまたしてもかつての平康坊に置かれる。

燭燼香残簾未捲　　蠟燭の燃え尽きた香、簾は下りたまま

夢初驚　　いま夢から目覚めた。

花欲謝　　朧月の明かりに

深夜月朧明　　花が落ちようとしているこの深夜。

何処按歌声　　どこからの歌声か

輕輕　　軽やかに

舞衣塵暗生　　舞う衣に立つ塵

負春情　　春の情に背く私であるのに。

深夜、どこからか聞こえてくる音曲。落ちかかる花びらは、一人もの思いに沈む女性そのものか。それは、嫋嫋であろうか、銀犁であろうか、それとも春琴か。

声が震え、春の情に背いていまでも散りゆくばかりの春琴を思う。

歌い収めると、静かに座し、涙を拭う。

皇帝は深く嘆息し、しばらく宙を見上げ、

「佳い詞である。朕が心を深く打った。さあ、そこに置かれた盃を干すがよい」

盃を頂き、石濼に礼を言う。

「好いことをなされました」

石濼がささやく。

そうであろうか。石濼の曲に引かれて歌えばこうなるのは必然であった。しかし、少なくとも左拾遺の職を拝した者のすべきことでは断じてない。左拾遺の役目とは、皇帝の行為が道義に適っているかどうか厳しく見定め、

そうでない場合に、皇帝の顔を冒して諫めることだ。痴情の詞を歌って聞かせるなどもつての他。同じ左拾遺の職にあった杜甫はむろんこのようなことはせず、生真面目に皇帝を諫めて不興を買い、朝廷に居られなくなった。

英雄を求める皇帝の悲痛な思いに、男女の痴情で答えた愚かしい老官人を、人々は心の内で笑っているだろう。

齊雲樓の宴は和やかな雰囲気が変わる。

官舎に下がると、春琴が身を起こして迎えようとする。

「そのままにしていなさい」

「旦那さまの晴れの日でございませぬ。寝たままでは許されませぬ」

林婆さんの手を借りて、床に座す。

「すばらしい宴であった」

韋荘は、春琴を横に寝かせてから、宴の次第を語る。華やかな正月の宴だ。

口から出るのは今日の宴ではない。先祖が記録した唐の盛時の元朝の宴のありさまだ。

春琴は一心に聞いている。

その顔に、

「そなたに偽りを申すのはよそう。かようなことは、いまの華州で為し得るものではない。全て嘘だ」

春琴は驚く様子もなしにうなづく。わかっていたのだろう。

「ありのままに言おう」

皇帝の前で歌った二つの詞を春琴に聞かせる。

「皇帝を諫めるべき者が、かような詞をお上の前で歌うとはな  
自嘲するよりない。

春琴は腕を伸ばしてくる。もう骨だけだ。

「旦那さまのお心なのでございましょう」

春琴の手を取り、

「そうかも知れない」

「間もなく銀掣さまにお会いできましょう」

春琴の声はごく細い。少しでも咳き込まずにするためだ。韋荘は耳を寄せ、

「何を言い出すのだ」

「銀犁さまはお幸せだったのでしょうか」

「私はあれを不幸にした」

「銀犁さまにお会いしましたら、旦那さまはいつも銀犁さまを愛していらっ  
しゃいますと、いまの詞をお聞かせできます」

「何を言う。いま私が愛するのはそなた一人だ。そなたは元気になり、狐潭  
でのお祭を見るのだ」

「もう十分に幸せでございました。それ故に銀犁さまもさぞお幸せであった  
と思うのです」

春琴の手を握ったまま夜具に顔を押し当てる。

春琴は泣かない。

「銀犁さまにかの夜に歌われた詞をお聞かせいただけませんか」

韋荘は顔を押しぬぐって、



「『菩薩蛮』の詞をかい」

春琴はうなずき、希望するままに、静かに低く耳元に歌う。

人人尽説江南好 人は江南のすばらしさをたたえる

遊人只合江南老 漂泊の人は江南に老いるのが良い。

春水碧於天 春の川は空よりも青く

画船聽雨眠 船は水声の中に眠る。

涙が出てきて、後半はかすれ声になる。

炉辺人似月 炉辺にほのかに照らされる人は月に似て

皓腕凝双雪 雪のような白い腕。

未老莫還鄉 若いうちは故郷に帰らなくてよい

還鄉須斷腸 帰れば悲しみだけがあるのだから。

「揚州は佳きところでございます」

春琴が言う。

「揚州のこと、覚えていいのかい」

「ええ」

「まだたった二歳だったではないか」

「母が後になってからも聞かせてくださいました。荆十三娘さまのようになりたいと心から思ったのが揚州ででした」

「彩霞は『揚州にいるいまのこのときが一生のうちで最良のときなのかも知れない』とそなたに言っていた。それも知っているのかい」

「ええ」

「幸せは遠い昔にあったようだ」

「いえ、この春琴はいまが最も幸せでございます」

「そなたを幸せにしてやれなかった。私ばかりがそなたに幸せにしてもらったのに」

春琴は首をゆっくりと左右に動かす、

「これ以上の幸せ者はありません。銀犁さまに申し訳なくて」

「銀犁のことを言わずにいてくれ」

「お願いでございませう」

春琴は強く声を出し、咳き込む。

韋荘はその背を撫ぜ、

「何かい、何でも言ってくれないかい」

春琴は苦しげに息を継ぎ、

「銀犁さまにお聞かせしようと言われていた『菩薩蛮』の二つ目の詞、それをお聞かせいただけませんかでしょうか。そうすれば、銀犁さまにお会いしたときに、歌ってさしあげられますから」

二つ目の詞は最初の句だけがあつて、永遠に途切れたのだ。

「望むに任せよう」

韋荘は春琴の琴を持ち出す。

如今却憶江南樂　　いまでは江南の楽しさがかえって想われ

当時年少春衫薄　　そのときの青年は薄い春の衣。

騎馬倚斜橋　　馬にまたがり斜橋を渡れば

満楼紅袖招

酒樓の女たちが紅い袖を振る。

銀犁に歌おうとしていたのがこの通りであったかはわからない。揚州での最良の日々を想って歌えばこうなる。

江南の地に遊ぶ若い貴公子は、まさに唐の最も佳き日の幸を享受する者だ。

翠屏金屈曲

緑と金の屏風が廻らされ

醉入花叢宿

酔って花の妓楼に入る。

此度見花枝

いま花の枝を見ているのは

白頭誓不歸

白髪頭の私、決して江南には帰るまい。

遠く江南から離れ、老いたかつての貴公子は、決して江南には帰らないと誓う。それはなぜなのか。佳き日々はすでにどこにもないと知るからだ。

「ようやくわかりました」

「何がだい」

「母が揚州で申したことです」

「いまが一番良いときであると言うことかい」

「いえ、旦那さまがどのような人であるのか、自分の目でよく見なさいと言ったことです」

「それがわかったのかい」

「ええ」

「私をどう見たのかい」

春琴は林婆さん呼び、助けてもらって身を起こす。

「申し訳ありません。旦那さまの本当のお心を、いままで知らずにおりました。おそばに置かせていただきながら、この春琴、深くお詫びせねばなりません」

頭を下げると激しい咳が出る。林婆さんの押さえる布が赤く染まる。

「そなたが謝るようなことは何もないはずだ」

韋荘は春琴の体を抱える。

「いままでわからずにいたこの春琴をお許してください。お上の御前で男女の情をお歌いになりました。それは他の人にできることではございません」

春琴の声は途切れ途切れだ。

「誰もしい恥ずべきことだ」

「それがおできになる旦那さまですから、楊爺も生涯を捧げたのでございます。祖父の銀も正しい道に戻れたのでございます。この春琴はこれまで旦那さまのことを良く理解せずに、平陽公女さまのようになりたいたいの思いだけで、旦那さまに御無理を強いておりました。それが申し訳なくなりません」

春琴は泣く。

「もう何も言わなくてよい。私がいかなる人間であるのか、そなたが一番良く知っていてくれる。これほどの幸せ者は私の他にはいない」

春琴を静かに横たわらせる。

林婆さんが春琴の濡れた顔を拭い、

「またとないよい子です」

韋荘はうなづく。

いまはまさしくこうしている時である。他のことは考える必要がない。己

のことを春琴がわかってくれていればそれでよい。

皇帝が歌った『菩薩蛮』の詞のせいであろうか、韓建の猛烈な揺さぶりが始まる。

皇族の八人の王に陰謀の嫌疑がかけられる。韓建の命を奪って皇帝を河中に連れ出す計画をしたと言うのだ。皇帝は驚き、八人の王を韓建のもとに赴かせて釈明させようとする。韓建は八王との会見を拒絶し、王たちの兵権を解き、長安の十六宅坊に帰還させると要求する。八王は若干の兵を所有している。それと宦官の指揮下にある殿後の軍を合わせた約二万が、皇帝が現有するなけなしの兵力である。皇帝は一度は拒否しても、韓建に屈する他なく、八王はわずかな従者とともに廢墟同然の長安に帰る。

韓建は、殿後の軍が乱暴狼藉を働き民の迷惑になっていると、解散を求め、それにも従うしかなく、皇帝は全ての兵力を失う。殿後の軍の指揮官の

二人が大雲寺の前の橋で処刑される。

この一連の一方的な処置に韓建もやや気が引けたのか、八王の一人の徳王を呼び戻して皇太子に立てる。その儀式が少しばかり華やかに行われる。

それも束の間、二月のはじめ、朝廷の百官は行在所に足止めを食らう。門が鎖され、誰も外に出られない。

この日、韋荘は、とりわけ早くに官舎に戻りたかった。今朝、声を掛けても春琴は虚ろな様子、耳に入っているのか、眠ったままでいるのか、どちらとも了解し難かった。数日来衰弱が激しく、いつしか覚悟はせねばなるまいと思ひ、しかし、まだまだ今日ではないと否定し続けてきた。今朝は、いよいよであつても仕方ないかとの思ひを拭い去ることができなかった。

行在所は韓建の兵士によつて嚴重に包囲されている。夕暮れ時になつて、馬道殷（ぼ どういん）と許巖士の二人の方士が捕えられたと知れる。馬道殷は天文を見ることで、許巖士は医術によつて、皇帝の近くに仕える。許巖士は朱朴を推薦して褒美を得た男だ。



どこから入ってきたものか鄭郎が忍んでくる。一刻も早く帰ってほしいとの韋諷からの言伝だ。春琴に何かあったに違いない。問うても鄭郎は、帰ってほしいと言うだけ。どうすることもできない。

暗くなり、行在所の中庭に火が焚かれる。皇帝をたぶらかした罪で馬道殿と許巖士がそこで処刑される。韋荘たち百官は斬首の様子を見るよう強制される。

百官の監禁は解かれず、翌日、人々は蔭で、次は朱朴ではないか、あるいは他の官人にも手が及び、果ては皇帝は讓位を迫られるのではないかと、ささやき合う。

昼過ぎ、階のもとに鄭郎がうずくまっている。人のいないのを見計らって近くに寄る。

「今日こそはぜひともお戻りください」

春琴の様子を尋ねるが、鄭郎は顔を上げず、

「早く」

としか言わない。

「帰れるようになったらすぐに帰る」

他に言いようがない。

その日も帰れずに暮れる。

三日目の夕刻、突如、門が開き、自由が許される。朱朴らが罷免されたらしいと聞こえてくるが、詳しくはわからない。

一目散に官舎に走る。迎えにきた鄭郎とぶつかる。

「どうした」

「皆さまがお下がりになったと聞きましたものですから、お迎えに参りました」

鄭郎は言わずともわかることを口にし、韋荘の間を避ける。

「よくはないのだな」

努めて普段通りの声を出そうとする。

鄭郎が戸を叩き、綜がすぐに出てくる。

「奥へ」

手で指し示す。

一步踏み入れるまでもない。いつもはない香の匂いにうなずく。己を己で納得させるしかない。

「兄上」

内で迎える藹に、

「そうか、そうだったか」

疑いの余地はすでない。

春琴が床についていた部屋の様子はすっかり変わっている。白い布で榻がおおわれ、その前に香炉が置かれ、陸氏と淑娥が悄然と立っている。

「そうかい」

榻に寄り、覚悟をしてから、布をめくる。

真白な顔。目を閉じ、微笑みはなく、苦悶の表情もない。

布を戻し、春琴の顔が隠れると、ここに横たわる春琴以外にもう一人の春

琴を求めるかのように部屋を一瞥する。

春琴は一人しかおらず、その春琴がいなくなった。

林婆さんが泣き出す。

涙を出さずに立っている己がここにいると、韋荘は意識する。

「いつだったのかい」

落ち着いた声だ。

「昨日の夜明け前でした」

弟が答える。

「そうかい。鄭郎がきてくれたときには終わっていたのだね」

そう言う途中で声が震え出す。

「まだ十七歳ではないか」

足が揺れ始め、綜が体を支えてくれる。鄭郎が後ろに滑り込ませた椅子に

崩れる。

楊絃の凜々しい姿が瞼の裏に浮かんでくる。どこへ行ってしまったのか。

白い布を見る。

楊胆の小屋の脇で、春琴を初めて見たのはつい昨日ではないか。幼かった春琴が、わずかな歳月だけを生き、消えてしまった。

泣いている己に気づき、

「どうしたらよいのかい」

陸氏に尋ねる。

陸氏は香炉を示す。韋荘は体の向きを変えてもらって、香をくべる。白い煙が上がっていく。天井に当たって広がる煙を見上げ、そのようなものを見ている己が白々しく感じられる。

己はどうしてこのようなことをしているのか。春琴がいなくなったのに、一体何をしているのか。

いままでは春琴がいた。それがあり得ないほどに不思議なことと思われる。春琴はいつからいたのか。六年だったのか七年だったのか、三年だったのか十年だったのか。思い出そうとしてわからない。

六七年来春又秋　そなたとは六七年の春また秋を

也同歡笑也同愁　ともに歡びともに笑いともに悲しんだ。

詩句が浮かびくる。何年であろうとも、己には春琴のいた日々があった。

纔聞及第心先喜　及第と聞いて真つ先に喜んでくれ

試説求婚涙便流　結婚を言いかけると涙を流した。

そのようなこともあったのだ。

試験の前だったかに、「及第したら妻にする」と言うと、「そのような幸せを得ては妬まれます」と春琴は泣き出した。春琴が泣くのは稀で、韋荘は驚き、「誰に妬まれるのかい」と尋ねると、「大勢いらつしやいましょう」とすぐに笑った。

本当にそれはあったことだったのか。

幾為妒来頻斂黛　妬まれますからとしきりと眉を顰め

每思閑事不梳頭　髪を梳る暇もなく忙しくしていた。

最初に妻にしようと言ったのは、雷雨の翌朝だった。「下僕ですから」と、

春琴は耳を貸そうとしなかった。

合格後も春琴は下僕として働き続け、結婚は、父の喪が明けてから、あるいは、韋荘が立派な仕事をしてからと、先へと延ばされていった。

下僕の娘を妻にするのは、名家としての歴史を誇る韋家では、普通ならあり得ない。莊園が減び、世の乱れのために親類が散り散りになり、世の規範が崩れ、己一人の考えで、春琴を妻に成し得ると考えていた。

春琴は困惑していたのか。

何がどうあるうとも、春琴を妻にしておかねばならなかった。

如今悔恨将何益　　今さら悔いたところで何の益もない

腸断千休与万休　　はらわたが断ち切れ、千回傷み、万回も嘆く。

なぜ春琴は逝ってしまったのか。

ただ一つの答えがあるとすれば、己に会ったからだ。

長安から虢州に帰った日、もしもそこに春琴がいなかったならば、何事もなかった。狐潭の小径を楊爺の小屋からたどり、林の内に通じる道を韋蘭と

見つけたとき、その先に誰かがいるとは必ずしも期待していなかった。楊胆の小屋の中に誰もいなければ、全てはないことだった。

莊園が一人も残ることなく滅んでいたなら、己はいかなる詩を詠んだらうか。

黙黙無言惻惻悲

ただにただに言葉はなく、ただにただに悲しみ

閑吟独傍菊花籬

一人、菊の籬のもとで静かにこの詩を吟じる。

只今已作経年別

別れよりすでに年を経て

此後知為幾歳期

この後に幾歳月があるのか。

小屋の内に、人々がここに生きていたしるしを見ただけだったろう。

開篋每尋遺念物

箱を開いて遺された品を見て

倚楼空綴悼亡詩

高どのに寄つて悼亡の詩を虚しく綴る。

頭に詩が浮かんできているが、意識は混濁し出し、己がいま虢州にいるのか、それとも華州にいるのか、果たして誰のための悼亡の詩なのか、何もかも明瞭でなくなっていく。



夜来孤枕空腸断　　夜、孤独の枕に腸を断ち

窓月斜暉夢覚時　　窓に月が斜めとなるとき、夢より覚める。

これは夢であるから、何がどうなっているのかわからなくて当然なのだ。妙にその理屈だけがはつきりと判断できる。

白い布を見て、煙を見て、これは夢で、まだ覚めていないのだと、考える。貫休は、夢に真実を見ると言った。だとしたら、これが真実なのか。

涙が止めどなく流れ、体が床に崩れる。

「それを聞かせてくれないかい」

最後となった晩に、ふと目を覚ました春琴は、「旦那さまは今夜は大切な御用でお帰りにはなれないようです」と林婆さんから聞かされると、不思議にも穏やかな顔で周り囲む人々を見て、韋諷に、「いま気にかかつてならないことがあります」と言い、意外にも史書のある箇所について尋ねた。綜の助け

を借りて藹は記憶を呼び出し、所望されたところを朗誦して聞かせた。

そのようなことがあったと、並んで歩く藹から初めて聞かされる。

春琴の亡骸をおさめた棺を土に埋めた。綜と鄭郎が方々を尋ね、葬る場所を華州郊外に見つけてくれた。春琴が正式な妻であるのなら、いつかは杜陵の一族の墓地に葬るべきだ。皇帝が華州で難儀するこの時節、一人の愛妾のために特別なことはできない。身内だけでひっそりと埋めてきた。

この日に至るまで、ほとんど正気を失っていた。

魂帰寥廓魄帰煙

魂は虚ろなところへ帰り、魄は煙に帰り

只住人間十七年

人間界にあったのはたった十七年。

昨日施僧裙带上

昨日は僧侶の布施物に帯の上の飾りを使い

断腸猶繫琵琶弦

断ち切られた腸をなお繋いでいるのはあの琵琶の弦だ。

このような詩も詠み、己の心を言葉に出してしまえば、どのようなことになるのかはかねてよりわかっていた。だから感情の放恣な発露を避けてきた。

言葉がほとぼり出てしまえば感情の抑えはきかず、己が悲しんでいることさえわからなくなる。

棺が土に中におさまって、混濁した日々もようやく終りそうだと思えた。弟は春琴に聞かせたと言う部分を静かに唱える。

臣愚以為禁民毋得挾弓弩使 臣は民に弓弩の所持を禁じるのが有益と

存じます

漢の時代の宰相の公孫弘（こうそん こう）は、盗賊の跋扈を防ぐには、弓や弩などの飛び道具を禁じるのがよろしいと皇帝に提案した。それに対してある者が、弓弩の所持を禁じると、良民の自衛力を損ない、かえって世を乱すもとになると反論した。皇帝はそちらに理があるとして、宰相の意見を退けた。

「あれは聞いた後に何か言ったのかい」

「しばらく黙っていて、か細い声で、どうして弓弩だけだったのでしょうか、ぼつりと言われました。はっきりと話をしたのはそれが最後だったと思います

す」

「そうだったのかい」

春琴がそれを聞いていたとき、周りを武器を手にした兵士に囲まれ、己は州署に閉じ込められていた。

「どうしてここを聞きたがったのだろう」

「わかりません」

弟の返事はいつも単純だ。死んだ者の考えがわかろうはずがない。しかし、

「あれは、たぶん最後にそなたの声を聞きたがったのだろう」

「私のですか」

「そなたの望みを知っていたのだろう」

「私のですか」

弟は全くもって腑に落ちないという声だ。

「覚えているかい、叔父上がまだお元気だったころ、虢州の南山でそなたが

言ったことを」

安得壯士挽天河

どうかすれば、立派な男に、天の川の水を引いてこ  
させ

浄洗甲兵長不用

地上の鎧甲を洗い流し、永久に使えなくさせられる  
のか。

杜甫の詩の末尾を韋荘は静かに唱える。

「あのことですか」

韋藹は、はにかんだように微笑む。

藹は、なぜこの世から戦がなくならないのかと、そのとき尋ねた。それに答えるようにして、己は、貢奉を受けるとの決意を明らかにした。以来、世の動きは戦がなくなるのとは全く逆の方向へと進んできた。

春琴は死の床にあつていかなる思索を巡らせていたのか。

「あれは幸せだったと思うかい」

訊いても弟が困るような問である。

弟は躊躇なく即答する。

「兄上と一緒にいて、幸せでないことがありますでしょうか」

「どうしてかい」

「私がそうだからです」

「だからと言って春琴もそうだとは限らぬだろう」

弟の言うことをそのまま肯定はできないが、目頭が熱くなっている。

「いえ、同じです」

「私はあれを幸せにし損ねた。それは間違いのないことだ」

感情がまた抑制を失い出す。

前を歩く綜が振り返って、

「伯父上はどうして御自分ばかりを責められるのですか」

吐き捨てるように言う。

「もちろん私が悪いからだ。でなければ、春琴がこんなにも若くして死ぬは

ずはなかった」

「いい加減になさってください。伯父上一人だけだったと、どうあっても言い張ろうとなさるのですか。母も父も僕もいなかったとおっしゃるのですか。彩霞姉さんだっていらしたではありませんか」

明らかに綜は怒っているが、その背を見て、怒る理由が理解できない。

春琴が死んでから、自分のことさえわからず、綜にまで考えが及ぶことはなかった。弟夫婦のことも考えていなかった。まして、遠くにいる彩霞など全く念頭になかった。

「そうかい」

韋荘は口につぶやく。

怒らせたのは明らかに己だ。

綜はどうして彩霞のことを言ったのだろう。彩霞のことはこれまで思わずにいた。彩霞は春琴を自分の娘のように育ててきた。彩霞に酷く悪いことをした。楊胆に続いてまた一人、彩霞が最も大切にしてきた者がいなくなつた。今回もこの父親のせいだ。

「お待ちなさい」

陸氏が綜を呼び止める。綜は止まったが、前を向いたまま振り返ろうとしない。

「ここにいる誰もが春琴さんの幸せを願ってきたのです。それでいながらこうなったのです。責め合いをして、春琴さんが喜ぶとでも思うのですか」

その言葉は己に辛い。

春琴は皆に愛された。春琴が死に、残った者はいかに生きたらよいのか。大きな問題がすでに始まっている。

春琴なしに己は生きられるのか。わからない。春琴なしにこの小さな家族は、この乱れた世を生き抜いていけるのか。春琴がいたから生きてここまできた。春琴を失ってそうだったとはつきりわかる。人々を繋いでいた絆も切れてしまうのだろうか。綜は怒っている。陸氏は綜を叱るが、本当に叱られるべきは己だ。春琴の幸せを願う気持ちで皆はこれまで一つになっていた。春琴が死んではばらばらになっていくしかないのか。



楊胆の小屋から洛陽へと移っていった日々を思う。己一人が皆と溶け込まずにいた。蘭が人々を繋ぎ合わせる力に、己には、この小さな家族でさえ、結び合わせる力はない。

己は韋家の主であり続けようとしてきた。貢挙に合格し官人になることが、即ち、最も期待される韋家の主の姿であると、幼いときに教え込まれた。狐潭の祭の復活を目指したのも、春琴を喜ばせたかったし、楊爺に恩返しをしたかったし、韋家の主であろうとしたからだ。

綜は陸氏の叱責に対して何も答えず、勝手に前に歩いて行ってしまふ。

綜に対して何を言うこともできない。淑娥も、林婆さんも、鄭郎も、陸氏も、綜と同じなのか、綜とは違うのか、わからない。変わらずにいてくれるのはただ藹だけなのか。

韋家の主として、貢挙に合格するのではない別の姿を追い求めたこともあった。貢挙を目指すのをやめれば、力で威圧するしかなかった。韋愠を杖で撃った感触が甦ってくる。あれは快感だったのか。

あのとときに韋愠を杖で撃っていないければ莊園は違っていただろう。彩霞の母には別の生き方があっただろう。彩霞にも違う人生があった。純の苦しみも違っていた。

己は一体何を皆にしてきたのか。

己は韋家の主らしくしようとして、実際には、皆に助けられてかろうじて生きてきた。楊爺であり、楊胆であり、韋蘭であり、春琴によつて生かされてきた。

春琴は死に、己にはここにいる人々をどうすることもできない。

ならばいつそのこと、韋愠に頼んでみたらどうだろうか、ふと思う。

平康坊のお狐さまの祠に愠のこともかつて祈った。愠も韋家の一人だ。お狐さまは等しく愠にも御加護をお垂れになるに違いない。ならば、韋家の将来は愠に託すのでよいではないか。愠は韓建のもとでよい地位を得ている。韋家のことはそっくり愠に託し、己は身一つになつてここを去るのか。

それでどこへいくのか。

仏蕃の後に、二度も付いていこう思いながら、果たさなかった。それがいけなかったのか。もしもここに仏蕃が現れたならば、今度こそ付いていくことになるだろう。そうだ、楊銀がいたではないか。楊銀に会って得度を頼めばよいのだ。

依然として混濁から脱し得ていない。明瞭な脈絡なしに思考が進む。

華州城の門の手前にまできると、道の左右を店が挟む。客で賑わうこれらの店は、どれも皇帝が華州に入ってから建てられた。韓建の檄を受け、諸国からの物資がここの門を通って運び込まれるようになり、自ずと商人が集まり、門外に旅籠やら酒楼やらが軒を連ねることになった。

「兄上、孤真なのです」

藹に袖を引かれ、現実に戻される。

心に思っていた楊銀が、笠の縁を持ち上げ、顔を見せて斜め前に立っている。

合掌する楊銀に、陸氏が、

「少しばかり遅うございました。たったいま終わったところです」

「それは承知しておりました」

韋荘は勃然と、

「かくなつたのも定めであろうか」

楊銀はいつも携える札を示し、

「愚僧は金剛経を唱える他は何も存じません」

「仏蕃上人さまなら教えてくださるうか」

「愚僧が思いますに、やはり金剛経を唱えるようにとおっしゃいますでしょう」

「定めか否かは問うても詮方ないのか。定めであると安易に断じては、無為に時を送るもよしとなろうか。もとよりそのような考えであれば、胆と臆のように生きるのは無意味と見えしまう。胆と臆は決して無駄に生きたのではない。そのことを告げずにいてはならないとずっと思っていた。今日、ようやくにその機会を得た」

前から楊銀に言っておかねばならないと考えていたことをここで言おうとする。

「愚僧は倅に捨てられた身にございます。ここに参りましたのは、旦那さまにお別れを申し上げ、この最後の機会に、ある方とお引き合わせをするためでございます」

楊銀は聞く意思を示さない。

「どこかへいくのかい」

ただ楊銀の言ったことに反応して問う。

「持仏堂は後を継いでくれる者に渡し、いまは何の気がかりもなく、お上人さまにかつて言われた通りに長安に参ります。それから先は、御仏のお導きがあれば、それに従うままとなりましょう。旦那さまにお目にかかることはもうなかるうかと存じます」

ならば己も仏蕃にと、さきほど思いかけていたことがある。

楊銀は金剛経の札を懐中に収め、

「どうぞあちらの店へお越し願います。中でお待ちでございます。旦那さまと陸さまとお二人だけ、お入り願えませんかでしょうか」

「どなたがおられるのかい」

楊銀に言われるままにその店を見る。

楊銀は答えず、

「これにてお別れでございます」

くるりと背を向け足早に去る。綜が追って引き止めようとするのを振り切り、塵の立つ道の彼方に消える。

また時が失われたのか。

示された店には誰が待つのかの予感もなく、陸氏とともに門口に立つ。目の前にあることが現実のようでもありそうでもないようでもある。

店の主人に中へと導かれる。俄普請にしては造作がしっかりとし、官舎と格段に違う。小奇麗な中庭もあり、その奥の部屋に案内される。

「お連れ申し上げました」

主人が中に声を掛ける。

窓辺に男が立つ。薄暗い屋内に入ったばかりの目には、大きく開かれた窓の光の中に、背中の黒い輪郭を見るだけである。

男がゆつくりと振り返ってくる。瀟洒な儒服を身に付け、頭に葛巾を載せ、ゆつたりと団扇を使っている様子が見えてくる。

「しばらくですな」

影になった顔はまだ判然としないが、声は聞き覚えがあるようだ。

「長い年月が経ちましたからな、おわかりいただけませんか」

口調も声も蘭に似ている。しかし、蘭ではない。

「恥ずかしながら年老いて、眼ばかりか、頭の方もうすぼんやりと致しまして」

相手に失礼ならぬ程度に会釈をし、顔を斜めに見上げる。

男は団扇を使いながら卓の横へと回り、窓からの光が自身の顔に及ぶようにする。

「いかがですか、この顔に見覚えありませんですか」

韋荘は息を呑む。

男は微笑み、

「思い出していただけましたかな。二十年にもなりましようか。こうしてまたお会いするとは思っていませんでした。兄上におかれては、御不幸に見舞われたと伺いましたが、まずまず御壮健の御様子。さあさあ姉上もこちらへどうぞ」

部屋の外に立つ陸氏に声をかける。

歳月を経た分の風貌の変化はあるが、確かにここに立っているのは韋慍だ。慍に託そうと思った。慍の方は深い恨みを抱き続けているに違いない。何を目的にここに立っているのか。

「どうしてここに」

不躰に問う。

春琴を失ったいま、これ以上に悪いことはあり得ない。恐れることはない。



愠は悠然と団扇を動かしつつ、卓の前の椅子に座るよう指し示し、自身も腰を下ろす。

「そうですね、どうしても兄上から訊かれますと、あの日の杖の痛みを、今日こそお返しさせていただきますと、そんな答えがよろしいでしょうか」  
にやりと笑う。

「そうなのかい」  
すぐに動揺する。

愠は冷ややかに眺め、

「我が目で見ることができませんが、背にはまだあの日の痕がはっきりと残っておりますからな」

「そうであるう」

「こうして春になつても、朝などは、重く痛みますな」

「それもそうなのだろう」

「兄上におわかりいただけますかな」

これ以上に悪いことはあり得ないとの思いが再び起こり、

「存分にそなたの思いを晴らしてくれ。すまなかつた」

卓を打つように頭を下げる。

慍は高らかに笑う。

「兄上の御心労はいかばかりと思っておりましたが、かなりお疲れの御様子。秦婦吟の秀才どのは最愛の妾を喪つて正気を失つておられると、この華州で知らぬ者ありません。その評判通りですな」

「笑いたければ存分にそうしてくれ」

「いやいや、感心しておるのです」

慍は再び笑い、突如、団扇で卓を叩く。

「惜しむらくは、昔より兄上にその情が備わっておれば」

押し殺したような声に、少し頭を上げ、

「あれのことを言っているのかい」

「はて、どうですか」

愠は団扇を大きく動かしつつ背を反らし、斜めに韋莊を見下ろし、

「兄上はお変わりになりましたな。こうももろくなられるとは」

「元からこのような男だ」

「そうではないと見せつけるために、大いに無理をなされたのですな」

「まことにすまない」

額を卓に打ち付ける。

愠は冷ややかに笑い、椅子から立ち、部屋の内を歩み始める。

愠の使う団扇の風が韋莊に及び、背中に悪寒が走る。

愠は窓辺に立ち、外に顔を向けたまま、

「兄上はこんな話を御存知ですか。美しい妻を持つある挙人がいましてな、その妻がふとした病でこの世を去りまして、挙人は悲しみに沈み、勉強も放り出し、ただぼんやりと日を送るだけ。そこに、とある旅の画工がやってきて、女を描くのがとりわけ巧みであるとの評判に、挙人は百金を出し、妻の生前の姿を描かせましてな。まこと生き写しの姿に、挙人は、毎夜、酒と食

べ物を絵の前に置き、絵の妻とかつての日々と同じように過ごすようになった。百日が経つと、挙人の話しかけに對して、絵の中の妻の目に何やら光が宿るような気がしてきましたな、ますます情を込めて話すと、次第に目が動くようになる。昼間の光で見ると、絵は元のままで少しも変わったところがない。夜になると目の光はいよいよ確かなものになり、幾晩かの後には、瞬きまでするようになりましたな。日を追って顔全体が活き活きとし、再び百日が経つと、絵よりすらりと妻が抜け出し、二人は元の夫婦に戻りましたな。挙人は翌年の春の貢挙にみごと合格したと、何とすばらしい話だとは思いませんかな」

従弟はなぜこのような話をしているのか。返答できずにいると、慍は窓辺を離れ、

「姉上はどう思われますかな」

陸氏は脇に立つ慍を見上げ、

「その挙人の情がたいそう深かったのでございましょう」

慍は指先で卓を叩き、

「まことそうでしょうな。その画工がいまもいてすな、兄上のために亡くなった人の絵を描いてもらったならば、この話のようになりましようかな」

慍は韋莊の背後に立つ。

「どうしてそのようなことを聞くのかい」

「まあ、かく言う私も、この挙人のようににはなりませんでしょうな。兄上と共にそれを悲しもうと思ひましてな。それだけです」

慍の言うことは掴みようがない。

慍は部屋の口に出て店の者を呼ぶ。

「頼んでおいたものを持ってきてくれ」

団扇を使いながら椅子に座る。

重い沈黙となり、韋莊は耐え難く、  
「私はここでどうしたらよいのかい」

慍は笑い、

「どうしたらですか、それは無論、酒がきましたなら、従兄弟同士、盃を交わすのでしょうか。そうするのも、ひよつとしてこれが初めて。そして、間違いなくこれが最後ですかな」

「最後と言うのは、あなたの背の傷に代えて、この命を差し出すからなのか。それなら拒みはしない」

「本当ですか」

「願わくば、残る弟たちを預かってくれるのなら」

「同じ一族ですから、拒まず受けるとしますかな」

「それは有難い」

店の者が入ってきて、卓の上に盃やら皿やらを並べる。

「さあ、まずは盃を上げていただきますかな。姉上、恐縮ですが、注いでいただけませんか」

慍の差し出す盃に陸氏が酒を注ぎ、慍はそれを韋荘に渡す。三人の前に酒の満たされた盃が置かれる。

「では、この弟の前途を祝していただきましょうかな」

慍は酒を呑み干す。韋荘は少しだけ口をつけ、ためらいがちに、

「どこかへいくのかい」

「数日中に華州を出ます。兄上とも姉上とも、もう会うことはないでしょう。

汴州にいつて戻らぬつもりです」

「汴州とは、朱全忠さまのところかい」

「李振(り しん)さまがお声をかけてくださいますな」

李振とは朱全忠に仕える文官。切れ者として名が聞こえている。

「韓建さまとはどのようなことに」

「華州と汴州の間を取り持つのがこれからの仕事となりましょう。容易なことではありませんでしょう。途中、虢州に立ち寄って、狐潭のお狐さまの御加護でも願ってみますかな。まあ、この罰当たりを、お狐さまは守ってはくれませんかでしょうかな」

慍は笑い、

「さあ、料理の方も召し上がっていただきますかな。兄上に御馳走するのもこれ切りですからな」

慍は陽気そうに料理を勧める。

韋荘は箸を手にして、どうしてよいのかわらない。

慍は一口、二口と放り込むと、すつと立ち、三つの盃をまた酒で満たし、「兄上も姉上も、これは是非干していただきますしょう。これが今生のお別れです」

慍は一気に煽る。韋荘と陸氏は顔を合わせ、言われるがままにするしかあるまいと呑み干す。

慍は盃を置き、

「私は私なりに己の人生を始末する考えです。背中傷は消えていませんが、それを別の傷によって晴らそうとする考えを捨てました。そうしたところで、傷は消えるものではありませんからな」

「すまない」



「謝っていただきたくありませんな。昔のことは言わぬことにしていただきたい」

「ではなぜ今日ここで会うことにしたのかい」

「こうして盃を干していただくためですな。もうそれは済みました。かつて韋家には慍と言う名の者がおりましたが、いまここで別れてからは、慍などと言う者は初めからいなかったと思っていたきましようかな。この背中の傷と兄上は今からは無縁です」

慍は出ていこうとする。

韋荘は立ち、

「待ってください。これでは何のことやらわからない」

「十分に申したと思っておりますな」

「深い恨みをどうして捨てるのかい。なぜなのかい。それだけでも教えてくれないかい。もしかして楊銀が何か言ったのかい」

「楊銀は何も言いませんな。腑に落ちなければ姉上にお聞きください。楊銀

から手紙を受け取りましてな」

「手紙」

陸氏の顔を見る。陸氏はうなずく。

「何も隠すこともありませんかな。彩霞ちゃんの手紙ですな」

「彩霞の手紙」

陸氏も立って、頭を下げ、

「実は蘭溪にて預かりました。何かあったときにお渡しするようにと託されたのでございます。それを孤真さまにお頼みして、お渡しいただいたのです」

「それは何の手紙なのかい」

「中身については何も聞きませんでした」

慍は口を曲げ、

「それは言いますまい。ただ、あのころの苦しみをわかってくれているのは彩霞ちゃんだけですからな」

慍は足音高く部屋を出ていく。

韋莊は追っていかうとする。

慍は去りつつ、

「縁は切れました。決して近くにこられませぬように。名残に一つだけ言い置いておきますかな。彩霞ちゃんの手前、兄上のためになることをしておこうかと、韓建さまにお願いをしておきました。韋家に慍なる者がかつてはいたとのこれが最後のしるしですかな」

慍の声が遠くに消える。

「呼び止めましょうか」

陸氏が言う。

「いや、これでよいのだろう」

いま初めて慍と心が通じ合う糸口を得たようだったが、最後の別れでなければ生じ得ないものだったのだろう。

これは彩霞に救われたのか。憎しみを抱き入ろう従兄弟が救い出されたのか。彩霞がどうしてそのようなことをしてくれたのか。

母のことを考えてほしいと洛陽で言われ、まだ果たしていない。彩霞のことはすっかり忘れていた。

大事な時を失ったのか。楊銀は去り、慍もいつてしまった。

何が己の身に起こっているのか、混濁から抜け切ることがまだできない。

**朝廷**は形ばかりではあっても、従来からの機構を維持し、韋荘にも一応の公務がある。為すべきことを前にし、為さねばならぬとわかつてはいても、手につかない。

春琴がいらない今、何をすればよいのか。春琴がいたから貢奉にも合格できた。春琴がいなければ、ただ存在しているだけの老人だ。たとえ何かを無理にしたところで、春琴がいなくて何の意味があるのか。何もかもどうなっても構わない。己の心に響くものは何もない。楊銀との別れも、慍との出会いも、彩霞の手紙も、意味の了解できぬままに放置してある。混濁から放心へ

と、これは少しはよくなったのだろうか。

韋荘のこのような状況は、幸いにも直接の上役である李洵の理解があつて、問題にされずにすんでいる。孫のような年齢の若い愛妾を亡くし、六十を越えた老爺が正気を失っているのはいささか滑稽ですらある。皇帝の前で披露した詞と思ひ合わせれば、なるほど韋荘は情痴の人であると人々は理解する。

ある日、何かの用事で州署のとある場所にいこうとした。途中で心が虚ろになり、何の用でどこにいこうとしていたのかわからなくなる。周囲を見て、見覚えの全くない場所に、急ぎ出ようとして、ここは己如きが入つてよい建物ではなさそうだと気づきうろたえる。右往左往していると、

「拾遺どの、お出になるには、あちらがよろしいでしょう」

太い声に、振り向くと、小柄な男が立っている。

「あちらの戸が見えましようか」

曲がつた通路の向こうを指差す男の後ろには、剣を携えた屈強の武者が幾人も控えている。

「うっかり迷い込んでしまいました」

頭を下げつつ、目の前の男は誰であろうかと考える。

「拾遺どのの情の深さに感心させられております」

男は微かに笑う。そこには同情が籠っていると感じられる。

顔を赤らめて礼を言い、教えられた口からそそくさと出る。外に出て建物の扁額を仰ぎ、あれは韓建だったかと知れ、背中に冷や汗が噴き出る。

それから一ヶ月ほどが経ち、どうにか表向きばかりは職務をこなせるまでに回復する。

韓建の命で竜興寺に呼ばれる。池のほとりで待たされ、大男を従えてこの前会った男が足早にやってくる。

韋荘が恭しく挨拶する間を与えず、

「拾遺どの、気晴らしに成都にでもいらしてはどうですか」

唐突に切り出す。

「悲しみの度も余り過ぎますと、大事なお体に障りましょう。外に出てみら

れるのもよろしいのではありませんか。無論、お嫌ではないと思っております」

相手は韓建だ、何であれ断ることはできない。

「有難いお言葉にございます」

何の話であるのか全くわからぬままに礼を言う。

韓建は上機嫌に笑い、

「詳しくは追ってお知らせさせましょう」

韋荘の肩を軽く叩き、足早に立ち去る。

きびきびした物言いと、人情の機微をわきまえたような笑みに、韓建が民衆に慕われる理由が少しわかる。

竜興寺を出て州署の部屋に戻る間に、これがもしかして、愠が韓建に願うと言っていたことではないのかと気づく。韓建の様子からして、悪いことではなさそうだと考えていると、その日のうちに、「気晴らし」とはいかなるものかがわかる。「兄上のためになる」と愠が言ったのはその言葉通りではなく、

韓建の笑みも素直に受けてはいけないうだ。

李洵に両川宣諭使の命が下る。韋莊はその副使だ。事を決めたのは韓建だが、形式上は皇帝の命による勅使である。両川宣諭使の任務は、西川節度使の王建と、東川節度使の顧彦暉（こげんき）を和解させることだ。それは容易ならざる仕事で、李洵は、死をも覚悟せねばなるまいと言う。

王建は、かつて南山において、仏蕃から聞かされた賊王八だ。変わった盗人も世の中にはいるものだ、その名が耳に残ったのだが、いまや成都にあつて蜀の地を治める西川節度使だ。その王建の意志を敢えて曲げさせるのが両川宣諭使の使命である。

王建と韓建は、姓は異なるが名は同じで、兄弟同然の仲だった。二人は、先帝を山中に救い、迫りくる猛火の中、王建は先帝を背負つて走つた。その功績で、王建は利州知事に、韓建は華州知事に任命された。王建は利州に向かう途中、「このまま小さな利州にいったところではつまりませんでしょう」と、周庠（しゅうしょう）が説くのに従い、山間の酋豪を集めて閬州を急襲した。



閬州は軍事上、通商上の結節点で、そこを手にとると、じわじわと勢力の拡大を図った。当時、閬州より東には顧彦朗（こげんろう）が、西には陳敬瑄（ちんけいせん）がいた。顧彦朗は王建が並みの人物ではないと見て、戦いを避け、同盟関係を結んだ。陳敬瑄は例の「お父ちゃん」の田令孜の兄で、兄弟二人で成都に居座り、大きな力を振るっていた。王建は韓建とともに、「お父ちゃん」の田令孜の仮子、すなわち義理の息子になっていた。田令孜はその関係を使つて、王建を成都に呼び寄せた。息子によい職を授けるとの名目であったが、きたら捕らえてしまう心積もりだった。王建は疑いながらも、筋を通さねば気のすまない性格から、義父の招きは断らずに、顧彦朗に家族を預けて成都に向かった。

王建は二千の兵を引き連れた。王建が成都に近づいてくるにつれ、陳敬瑄は次第に怖くなり、鹿頭関を鎖し、ここで帰るようにと言った。王建は、義父に呼ばれたのだからと、筋を貫き、関を破って成都へと行軍した。それを止めようと陳敬瑄が兵団を繰り出すと、自分で呼んでおきながら迎え撃つと

は理不尽など、王建は撃破し、それよりあれこれあって、ついには成都を包圍するに至った。

成都の攻防戦は長く続いた。これに先立つ数十年前から、高駢や崔胤の叔父の崔安潛らによって、成都城は極めて頑健な城に造り直されていた。王建は、再び周庠の策に従い、朝廷の力を借りることにした。皇帝は、田令孜に鞭で打たれたことのある新帝に代わっていた。田令孜を憎む皇帝は、陳敬瑄の西川節度使の任を解き、新しく任命した韋昭度に成都をすみやかに明け渡すよう命じた。陳敬瑄は唯々諾々と従いはしませんが、王建の包圍軍は皇帝のお墨付きを得た官軍となり、成都は完全に孤立した。

王建は都からきた韋昭度を陣中に迎え、恭しく仕えた。成都城内は長い包圍によって食糧が尽き、勝利が間近に見えてきた。朝廷は、成都がそっくり王建の手に渡ってしまうのを恐れ始め、俄に方針を転換し、王建と陳敬瑄を和解させようとした。韋昭度が王建に朝廷の意向を受け入れるよう説得する間に、韋昭度の近習が何者かに襲われ大怪我を負った。「長引く戦闘で城中に

は食物が尽き、肥えた人間は特に気を付けねばりません。あの者もかなり太っていたようです」と、王建は、恰幅の良い韋昭度を気の毒そうに眺めた。韋昭度は震え上がり、近習を襲ったのは王建の企みであったのかも知れないと疑心暗鬼に陥り、病氣と称して帰京した。

王建は総攻撃に出た。田令孜が王建の陣に赴いた。王建は、義父を脅かした不孝を泣いて詫び、田令孜、陳敬瑄の兄弟の安全を確約した。陳敬瑄は城門を開き、王建は成都に入城した。王建は広大な蜀の地の大半をこれで得た。

王建と同盟関係にあった顧彦朗は間もなく死に、後を継いだ弟の顧彦暉は王建の勢いを恐れ、王建を挟撃して蜀の地を山分けしようと言う李茂貞の誘いに乗った。攻め入る顧彦暉を王建は簡単に撃ち破った。顧彦暉は李茂貞とは絶縁すると誓い、兄とのよしみから、王建は顧彦暉を許した。

しかし、顧彦暉は李茂貞とのつながりを保ったままで、秘かに準備を整え、再び戦端を開いた。王建は反撃に出たが、さすがに顧彦暉も今回は用意周到の作戦でしかも死に物狂い、勝敗は簡単にはつかない。

ここに韓建は、王建と顧彦暉の和解に乗り出すことにした。韓建の思惑は、李洵にも韋莊にも容易に推測がつく。韓建は弱小ながらも皇帝を抱えている。物資は華州に流れ、華州は空前の繁栄を呈している。それは節度使間の微妙な力関係の上に成り立っている。王建とは兄弟同然の仲とは言え、王建が強大化すればこのままですむかどうかわからない。節度使間の争い事を鎮めることができれば、韓建の名は天下にさらに重んじられるようになるだろう。

王建が簡単に和睦に応じるとは考えにくい。顧彦暉はいまのところはよく戦っているが、顧彦暉単独では王建に勝つだけの力はなく、頼みとするのは李茂貞である。李茂貞に背後から衝かれたならば、王建はかなり苦しくなる。だから李茂貞が動く前に早く結着を付きたい。李茂貞は、韓建や李克用、朱全忠の動静を見極めないことには、軽々しくは蜀に攻め入ることができない。両川宣諭使は微妙な節度使間の力関係の中に分け入って、当該の任務を果たさなければならぬ。かつて韋昭度は王建に和解を勧めて命を脅かさされ、都に逃げ帰った。その後、韋昭度はこの失態を問われ、韓建、王行瑜、李茂

貞の三節度使が長安に乗り込んできた際に惨殺される憂き目に遭った。

李洵は韋昭度のように臆病ではない。王建の脅しに屈して逃げ帰ったりはせず、王建が断固和解を拒否すれば、いかなる事態になるのか。戦の神への捧げものにされてしまう恐れも十分であろう。賊王八の王建だ、今や力を失った朝廷の使いなど何とも思わないに違いない。

「お断りになればよろしいではありませんか」

綜は至極当然のように言う。

「宣諭使はお上の大切なお使いだ。断るなどもつての他だ」

「何がお上のお使いですか。韓建に言われているだけではありませんか」

「いや、お上がお命じになるのだ」

「何が嬉しくて韓建のために命を捨てるのですかな。華州だって長いことありませんか」

「勝手なことを言うな」

「韋荘は怒ったように言う。綜に腹を立てたのではない。綜と同じく、己に

腹が立つのだ。己は何もできない。慍や韓建に言われるままに動くしかない。綜の言うように断ればどのようなことになるのか。

「蘭おじさんなら、こんな息の詰まるところにはおりませんでしょうな」

「お上に仕える身としての義務を果たさねばならない。かつて宰相まで出した我が韋家の末裔として、この困難な時期に、官職に就いていながら、逃げ出すことなどできやしない」

韋荘の言葉は己自身さえ納得させる力を持っていない。

「葉公子（しょう こうし）と同じ苦しみを引き受ける必要がどこにあるのですかな」

綜は怒りとともに、伯父への憐れみの情を示す。

甥の態度に、情けなさを腹の内ですく味わい、返って気持ちを強く持ち変えることになる。

「葉公子とは、齊の国への使者を命じられて苦悩した男のことかい」

荘子が寓話に描いた葉公子と、韋荘が置かれている状況は少しく似る。葉

公子は楚の国の使者として齊の国に行くことになった。齊は強国、その国の王の意志を変えるのは到底無理である。葉公子は内臓が焼けてしまうほどの苦しみに陥った。苦悶する葉公子に向かって智者が説いたのは、天下には大いなる戒めが二つあると言うこと。一つは親子の関係、もう一つは君臣の関係。これは世界のどこへいっても逃れられず、人を困難な義務へと駆り立てる。社会に生きる限りは、親子と君臣の関係は如何ともできないのであるから、逆らうことなく、如何ともできぬところに安んじる以外にない。心が安らかであれば、使者として成功するか失敗するかなどは問題ではないと、智者は葉公子に説いた。

「大いなる戒めとして安んじることが、伯父上にはできましようかな」

「私にはできません」

己は唐朝の官人。何はともあれ皇帝の命を受けたのだ。できるかできないかではない。

「では、お断りする他はないでしょう」

「お上のために為すべき重要な任務を私は初めて授かった。それが危険そうだからと避けては、春琴に顔向けできまい」

春琴の名を出したために、綜はそれ以上は言うのをあきらめる。

韋荘は成都にいく決心を固めるが、これが春琴の望んでいた官人としての立派な仕事であるかどうかは確信がない。このようなことをしても、ただ韓建のためになるだけなのか。それとも、慍の罫にはまるだけなのか。

宣諭使の任務は急がれ、あれこれ考える間もなく、日を置かずして華州を発つ。

華州城の外に、初夏の陽光を受けて、緑なす田園が美しく広がる。ぽくりぽくりと馬に揺られ、清々しい風に吹かれ、生気あふれる風光を見やれば、気持ちには自然とほぐれ始める。前途にいかなる困難が待ち受けていようとも、気詰まりな現実はしばし後に置かれる。難しい旅にも、韓建の言う「気晴らし」の要素が皆無ではないようだ。春琴を喪った悲しみから離れたいとは思えないが、華州を出れば、心もこれまでの場所とは距離を持つようにも



なるだろう。

「道中の無事を祈願いたしましたしょう」

李洵は西嶽廟に詣でる。

十人ばかりの一行の到着を道士たちが出迎える。いずれも垢まみれの惨めななりだ。小さな堂の前で、いま西嶽廟に建つのはこの一字だけと聞かされる。馬を降り、堂の奥の石段へと歩む。虢州と長安の行き来の際にも、この石段を登ったのを思い出す。そのときとは似て似つかぬ荒れた有様だ。石段の上には、玄宗皇帝の真筆を刻んだ高さ数十丈の碑が聳え、その背後に雲を衝く莊嚴華麗な楼閣があった。現在では、石段はがたがたで、ところどころが崩れ、碑は中ほどでぼつきりと折れ、楼閣は全く存在しない。

長安に向かって黄巢が通過した際に、華州の町の人々はこの神聖な廟に逃げ込んだ。そこに黄巢が乗り込んできた。楼閣に籠った人々は、玄宗皇帝の碑の威光に、さすがの黄巢も畏れ入るに違いないと、皇帝に帰順せよと叫んだ。黄巢は怒り、立て籠もる人々ごと西嶽廟を焼いた。石碑は巨大過ぎて完

全に壊すことができず、半分ほどが残った。

李洵は西嶽の神に祈り、

「唐の御世が一日も早く正道に戻るよう、よくよく祈ってください」

いくばくかの金品を寄進する。それが目当てであった道士たちは大いに喜ぶ。

廟を後にし、李洵は韋荘に馬を寄せ、

「このお役目が終わったならば荊州に帰ります。まことはその決意を神に告げに参ったのです」

問い返すまでもない。李洵は朝廷の現実に希望を失い、己に課せられた任務を果たし得たならば、それを潮に退隠するのだ。

「よいお考えと存じます」

「あなたさまはどうされますか」

「先のことまではとても考えられません」

正直に言う。李洵は正しいと思いつつも、己も同じことをしようとはまでは

まだ考えられない。

道の左右には手入れの行き届いた耕地がしばらく続き、ところどころ人家のまとまる村がある。

午後の日が傾き出すと、荒れ地が散見されるようになり、人の姿も次第に見られなくなる。韓建の力が十分に浸透しない地域になってきたのだろう。

日暮れまでには間があるものの、とある集落で今日の行程を終える。日没までに次の集落を見つけられる保証はない。

農家に宿を定め、日の長い季節、まだ明るいう外をぶらりと歩く。

「穏やかな初夏のこの夕辺、平時における遊山の旅なら、のどかな詩でも浮かんでくることでしょうに」

李洵が言う。韋荘にも同様の思いがある。自然の風光を愛でる詩は、いまの時期に不謹慎であろう。

それでも、小川の水音の中に蛙や鳥の鳴き声を聞くと、心の内の重いものが散じていく。

喚声を上げて子供の一団が走ってくる。棒きれを振り回し、二手に分かれて戦の真似事だ。戦いがたけなわになり、一人凶抜けて大きな子が指揮する側が俄然優勢で、押され気味の子供たちは、もはやこれまでと、一目散に逃げ出す。どつと後を追って走るところへ、よちよち歩きの幼い子が出てきて、

「爺ちゃんのかたきだ」

石を投げつける。狙ったものか偶然か、最も大きな子の尻に命中する。

「後ろからとは卑怯な」

大きな子は振り向きざまに石を拾い、腕を振り上げる。

「あつ」

李洵が思わず声を漏らす。石をまともに食らえば、幼い子はひとたまりもない。

大きな子は体をぐいと捻り、

「見てろ。あの枝がおまえの首だ」

びゅんと風がうなる。木の高いところから枝先が折れ、どきりと落ちる。

子どもたちはやんやの喝采。得意満面の子を皆が囃し立てる。

「大した腕だ」

韋荘は感心する。

「村の子は全て戦を習い、論語を読む声は絶え果てたのでしょいか」

李洵がぼそりとつぶやく。

楽しくなりかけていた韋荘の気分が沈む。

長安で過ごした幼い日々、隣の李兄弟と、来る日も来る日も、論語や孟子を朗読していた。それが苦痛で、先生がいなくなると、書物を放り出して遊びに出た。しかし、論語や孟子が読めたのは幸福な時代だったからなのだろう。

李洵の嘆息を他所に、子どもたちははてんでに石を拾い、大きな子が折った高い技まで届かせようと、全身を使って投げる。

ふと韋荘の心に詩が浮かぶ。風光を愛でる閑雅の詩ではない。

已聞二世没軍營

祖父も父も戦場に斃れたと聞かされ

又見兒孫学戰爭

幼い孫は仇を討つのだと戦争を学ぶ。

見爾此言堪慟哭

おまえのその言葉を聞いて慟哭する

遺予何日望時平

いったいいつの日に平和な時は見られるのか。

細くそれを唱える。

「あの子どもたちに、我々は泰平の世を見せてやる術を持たぬのか」

李洵は韋荘の詩をそのまま復唱する。

韋荘が言う。

「泰平をもたらすのは字を知る者の責務でしょう。しかし、剣を持つ者の前に、我々は如何とも致し方のない無力な存在です。石を投げるよりも論語を習えと、あの子たちに向かって言えましようか」

「それでも、郷里に帰りましたならば、あのような童稚の一人でもよいから、孔子の言葉のたった一つでもよいから教えたいと思います。それが虚しいとしても、そうする他はないのでしようから」

「児孫に戦争を学ばせる必要のない世を築くには、孔子や孟子の教えによる

しかないとの確信を揺らがせてはならないでしょう。まことに難しいことですが」

「愚に近いと見られるまでに直く、形を持たぬまでに強くあらねば、己の信じるところを保つのは難しい世であります」

「字を知る者の責務を言いながら、この齢に至るまで何をしてきたかと思ひ返せば、世間に恥じるよりありません」

「常々感心させられておりますのは弟御さまです。古の純朴な世の人が今に現れ出たならば、かくあるうかといつも思っております。全く気負うことのない平静な心のままに生きておられます。それがそのままに字に表れて、この困難な時期に、あの簡朴な書を為し得るとは、我が眼前に見て信じることでできません」

「あれは愚鈍と周りからずっと思われてきました。今も愚鈍に違いありません。それであるからこそ、あの書があるのだと思います」

「実は、日ごろより考えていたことがあり、この機会に申し上げるのを是非

「お許しいただきたく存じます」

李洵の改まった態度に、

「何なりとおっしゃってください」

「荊州に、今年二十六になる弟がおります。まだ独り身で、よい相手を探しております。いかがでしょうか、弟御さまの淑娥さんを頂戴する訳にはまいりませんかでしょうか」

意外な話に、

「淑娥をですか。あれはすでに二十三。嫁にいく年齢は疾うに過ぎ、弟も私も、あれはあのまま家にいるものと考えております」

「年齢など関係ありません」

「御存知かどうか、あれは花作りだけが好きな娘です。華州にきてからそれがままならず、可哀相な思いをさせています。他家に嫁に出せるような娘ではありません」

「それもこれも含めて、我が弟には、淑娥さんの他によき相手は見つけられ



ないと確信しております。是非、お聞き届けいただきたい」

「有難いお話ではありますが、どう考えても、淑娥は他家に嫁にやって務まるとは思えません」

「弟御さま御夫婦と瓜二つの夫婦ができるに違いないと、それで申すのです」「そうでしょうか」

「我が弟は、兄から見てもまこと心配になるほどに頼りなく、弟御さまに遠く及ばないまでも、純朴であることだけが取り柄です。華州に帰りましたならば、弟御さまにお話しただけませんかでしょうか」

李洵は真剣だ。よき話である。

「わかりました。無事に任務を終えられましたら、そのように致しましょう」

李洵は礼を言う

ただし、自分たちに帰路が許されているのかどうかだ。

子どもたちは石投げに飽き、棒を振り回しながら駆けていく。この子らのうちの幾人が、あるいは全員が本物の戦に加わることになるのだろうか。

先のことは誰にもわからない。沈みゆく夕日に、この一日はとりあえず無事に終えられると、小さく喜べるだけで大きな幸いなのだろう。

華州から西に官道をたどると自ずと長安に達する。李洵は敢えて官道から南に反れ、丘の裾の道を選ぶ。馬上より時折遠く長安城が見え隠れする。目を凝らせば、高い塔の影が見分けられる。法統を守り続けようとする蟻光禪師のような僧侶や、韓建に追い出された王たちなど、ごく少数の者があの町にいる。都がかつての姿を取り戻せるとは、もはや想像し難い。

黄巢による洗城後の長安を脱出したのも遠い昔だ。穴から抜け出て南に走り、朝日のもとに見た長安城は不気味なくらいに黒かった。それでも長安はまだ多く以前の姿を保っていたのだ。

丘から連なる南山が淡くかすみ、どこかの一角より一筋の煙が立ち上る。動いているのは、その煙と、李洵のこの一行。まことに静かである。

独座山中静　　独り座る山は静かである

不意に一つの詩句が脳裏を過ぎる。誰のものか、思い出そうと額を叩く。

愁來復難整　　愁いに襲われ、心を整えるのがまたも難しくなる。

続く句だ。そうだ、韋応物が長安で役人生活をしていたころの詩だ。

我が先祖のそのときの愁いとはいかなるものだったのか。韋応物の詩を愛してやまなかった叔父にも愁いがあった。今から思えば二人は佳き時代に生きていた。それでも、整え難い愁いから免れはしなかった。

己には己の愁いがある。長安城を脱出した朝、己の胸の内にあるものをどうにかして外に出したいと思った。それは少しく姿を変え、『秦婦吟』を生み出すに至った。『秦婦吟』は銀犁が作ったものだと言った。己一人の力でできたものではない。銀犁のような女の思いを消させないために、己を通して『秦婦吟』は生まれ出たのだろう。

『秦婦吟』は皇帝の耳にまで達した。しかし、銀犁のような女たちの不幸が一つでもなくせたのか。何かが少しでも変わったのか。

皇帝に尽くすことが、世を泰平に戻す唯一の道であると信じ、貢奉を受けた。春琴もその確信を共有し、春琴の力で合格した。立派な仕事をしてほし

いと春琴の望みを叶えるために、都に上って官職に就いて朝廷の一員になった。それで秦婦の誰かが救われるようになったのか。

我が愁いは何か。

足先に得体の知れない冷気が忍び寄ってくる。己は何をしてきたのか。冷気が足先から体を這い上ってくる。全身が冷やややかなものに包まれ、身を震わせる。氷の手で掴まれて馬から引き摺り下ろされ、深い地の底へと吸われていく。これが悔恨と言うべきものなのか。

その一方で、熱ぼい奇妙な矜持が頭をもたげってくる。皇帝の前で男女の情を歌った。情痴に溺れる愚か者と笑う者がいるのなら笑うがよい。春琴が死んでこの日まで放心状態にあった。これぞ我が抱柱の信である。

だが、それを貫き通せたのではなかった。再び悔恨に沈み、また矜持で浮き上がり、上へ下へと、己の身は自身の心によって翻弄され、突如、そこから一篇の詩が生まれる。

何代何王不戦争

何れの代の何れの王であろうか。戦争をなくし

尽從離乱見清平 離乱を終わらせて清平を見せてくださるのは。

如今暴骨多於土 ああ、今も土の上に骨がさらされているというのに

猶點郷兵作戍兵 なお村から人を集めて兵士に仕立てようとしている。

口をついて出てきたこの詩が己自身を驚かせる。

我が愁いのもとはここにもあったのか。

この正月、齊雲楼で皇帝は『菩薩蛮』の曲に合わせて歌った。

野煙生碧樹 靄につつまれる緑の木々の向こう

陌上行人去 人は道を去っていく。

安得有英雄 英雄はどこにいるのか

迎歸大内中 大内に迎えてくれる者は。

皇帝の悲痛な叫びに胸が激しく痛んだ。いま思い出しても、同じように感じる。しかし、その皇帝の詞には応えずに、男女の痴情を歌った。それこそが我が矜持を生む。

身の慄きを覚える。皇帝には同情しても、忠節を捧げる気持ちは、そのと

きすでになかったのだ。この事実気づいてはいけなかったのか。英雄の出現を夢想する皇帝は、民に清平をもたらす英雄にはなれない。

黄巢が長安城に入ってきたとき、韋蘭は、黄巢の新政権に期待するようなことを言った。すぐに失望に変わったが、民を置き去りにした先の皇帝ではなく、黄巢に期待を寄せたのは間違ったことではなかった。何れの代でも何れの王でもよい。戦争をなくし清平を見せてくれるのなら、黄巢だってよい。唐の皇帝である必要などそのときからすでになかった。

京兆杜陵の韋一族は唐朝の歴史とともに歩んできた名家である。七世の祖、韋待價は宰相になり、四世の祖、韋応物は蘇州知事になり、我が身も進士及第を賜った。いま皇帝の使者として成都に向かっている。その己が、唐の世でもなく、唐の皇帝でもなく、何れの代でも何れの王でも、とにかく清平の世を見せてくれればよいと考えるのか。

いつしか馬は遅れ、李洵の背は先の方に小さくなっている。幸いにも、いま口にした詩は李洵に聞えていない。

先祖の愁いにもこれに近いものがあつたのだろうか。都の南の山中にいったとき、あるいは蘇州知事を辞めて仏寺に籠つたときに、韋応物に唐朝への失望感があつたのだろうか。己が抱くのは、失望以上のものだ。危う過ぎる。皇帝に絶望しているのか。それで使者の任務を果たせるのか。

智者より葉公子が教わつた安らかな心はもとより難しい。ならば、綜が言つていたように、この役は断るしかなかったのか。すでに成都への旅に上り、いまさら元に戻れない。

綜に言つたではないか。唐朝の官人としての務めを果たす以外に何があるのか。東呉くんは、新たに始まる一日の可能性に賭け、絶望すべきでないと言つていた。唐朝には、高祖、太宗に始まる赫々たる歴史がある。

煌煌太宗業　太宗皇帝のお仕事は煌煌と輝き

樹立甚宏達　樹立されたものは広大にして永遠に貫き通る。

い。この杜甫の句を皇帝自身も朗誦した。己の心をここに置かなければならぬ。

杜甫は立派な官人、立派な夫、立派な詩人であろうとした。そのどれも己は為し得ていない。

何代何王不戦争　何れの代の何れの王であろうか。戦争をなくし

杜甫が決して抱くことのなかった、このような思いへも抗えずに曳かれてしまう。

あるいは、春琴も最後の晩に、これと近い思いに至っていたと考えてはいけないのか。なぜ戦をなくせないのか、戦をなくすにはどうしたらよいのか。突き詰めて考えていけば、唐朝に忠節を尽くすのは困難にならざるを得ないだろう。

春琴は平陽公主に強く憧れていた。その憧れが無理を強いてしまったと詫びた。己が春琴の期待に応えられる男ではなかったと言うことなのか。春琴は全てわかってくれていたのか。

平陽公主は唐朝の樹立に大きな貢献をした。平陽公主が活躍したのは隋朝の末期。いま平陽公主がいたならば、果たして氣息奄々の唐朝のために働く



のだろうか。

春琴があのかき詫びたのは、己への優しさからか。春琴の心に応えることはもはやできないのか。

この危うい思いはここで止めておこう。いまは皇帝の使者として成都に向かっている。春琴のために何かできることがあるとしても、この任務を終えなければ始められない。

馬の足を速め、丘の巒を巡って林へと入っていった李洵を追う。

### 併呑与割拠 併呑と割拠

極力不相讓 力を極めて譲り合うことがない。

成都に至るには剣門の難所を越える。自然の險に阻まれ、成都を中心とする地域には、三国志の時代に劉備が蜀の国を建てたように、中原からの独立を可能にする条件が備わっている。

百五十年の昔、杜甫もこの道を通り、劍門の難所があるから、独立割拠するか、併呑されるかの争いが生じるのだと考え、この詩を詠み、山を削ってしまえば争いは永久に消えるだろうと美しく夢想した。

杜甫が成都を目指したのは、韋莊のような公務を帯びての旅ではなく、全くの私人としてだった。杜甫は都において左拾遺の職にあつて、皇帝を諫める役目を生真面目に果たそうとして摩擦を生じ、自ら官を辞した。浪々の旅に出て、西方の辺境の町で極度の生活苦に陥り、活路を見出すべく劍門を通った。

杜甫に恥じることはかりだ。杜甫は私人となっても堅固な忠節心はいささかも揺るがず、民衆に対し、家族に対し誠実に生きようと努め、平和な世を取り戻すための詩人の責務とは何かを懸命に問い続けた。どれ一つとして遠く及ばない。

劍門を越えると風景が一変する。

「ここは別の世界のようにだ」

李洵が言う。

山また山。いずれもが耕して天に至る山。村落より昇る人煙は数知れず、山の上の空高い雲と一つになる。

日に日に人の往来が増え、四方に通じる道を、高々と荷を積み上げた車馬が間断なく行き来する。

成都の北東の漢州の町に入る。城門を潜ると、ここにきたのは今日が初めてでありながら、漢州は長い歳月を経て元のままに保たれているとすぐに得心する。旧き時代がそのままにある場所だけに許される独特の気に満ちている。

町の中心へと幅広い街路が伸びる。よく手入れされた松や桂が左右に幹を連ねる。その木蔭を踏んで、簡素な衣服を身に纏った人々が歩き、荷を満載した商人の驢馬が進み、馬に跨る官人が威風堂々と往還する。色とりどりの幟を立てた店が並ぶ。卓や椅子が置かれ、人々がそこで食べかつ話をしていく。

周囲を圧する大伽藍に、あれは何かと問えば、これは大雲寺、それは開元寺と答える。大雲寺は則天武后が、開元寺は玄宗皇帝がそれぞれ全国各地の主要都市に建てさせたもの。唐の盛時がそのままここに存在している。

並木の道は広い池に突き当たり、水辺で少しく道中の疲れを癒す。折からの夏の風に美しくも開いた蓮の花が揺れ、深い香りを漂わせる。床几を出して池畔に憩い、小舟を浮かべて花を愛でている。何を売っているのか、屋台で売り子が声を張り上げる。遠く管弦の曲も流れくる。

ここは何百年も昔から、世の中に戦などというものがあるのを知らずに過ごしてきたかのようだ。

従者が今夜の宿と定めていた場所を探し当ててくる。漢州ならば赤虎亭と、昨夜の宿の主人が言っていた。それは池の近くにあり、その名前の通りに赤い虎の絵が軒に掲げてある。

「この辺りに赤い虎でもいるのでしょいか。勇ましい名も結構ですが、虎のように乱暴な主人では困りますな」

李洵は笑う。

虎とはおよそ異なる福々しい顔の女将が出迎える。年のころなら三十前後であろうか、唐の皇帝の使いと知って、

「すぐに奥の静かなお部屋を御用意させましょう」

女将よりも若く立派な体格の女を内に走らせる。

「相済みませんが、少しの間、ここでお休みくださいませ」

女将は愛想笑いをしながら、李洵たちを腰掛けさせ、若い衆に何事かを言いつける。その言葉は韋荘の耳には馴染まず、意味がわからない。

茶と菓子置かれる。一息ついたら州の役所に出向くつもりであるなどと話す間に、李洵は天井下の扁額を指差し、

「赤虎亭の由来でも記すものでしょうか」

墨の跡は薄れ、暗い室内では見えにくい。李洵はわざわざ立って近くで目を凝らし、

羨爾無知野性真

羨ましいのは、そなたが野性の真さえ知らぬこと

「何かの詩の一部でしょうか」

韋荘はそれを知っているような気がし、李洵と並んで見上げる。

李洵は女将に、

「名のある方の詩でしょうか」

「亡き父が去るお方から頂戴したものです」

「お父上は読書人であつたのですか」

「とんでもございません。一文字も読めぬ人でした。この詩も、意味などはわからぬままに、書かれた布きれを持っていて、ぼろぼろになった布の、かろうじて判読できた七文字だけをあそこに写して残したのです。生涯に一度立派な貴人に詩をもらったと、自慢の種でした」

女将は笑う。

「ほほう、お父上所縁の詩、よほど以前のことですか」

「父が二十歳になる前、私が生まれる以前のことです、遠く徐州で騙まし討ちに遭い、背中に大怪我を負って半死半生で逃げてきたと申します」

忘れていた記憶が甦る。これは己の詩だ。

「もしかすると、お父上の背には赤い虎の立派な彫り物があり、傷がそれを真二つにはいませんでしたか」

韋荘がそう言うと、女将は驚き、

「いかにもその通りです。父はその赤い虎を私どもに見せては、助からぬところを、親切なお医者さまに救っていただいたと申しておりました」

「その医者の名はお聞きになりましたか」

「妙な名なので覚えております」

「雀蛤先生と申しませんでしたか」

「そうです。その通りです」

李洵は、

「何か奇縁とお見受けしますが、いかなることでしょうか」

「雀蛤と申すは私の従弟。この詩はこの私がこの方のお父上にお渡ししたものです」

劉赤虎と名乗る若い暴れん坊のことを話す。

先ほどの大柄の女が戻り、

「奥の御用意ができましたが」

韋荘の話に呆然としていた女将は我に返り、

「はからずも大恩あるお方に今日はお泊りいただけることになり、何と申してよいのやら。残念なことに、父は先年死に、自らお礼を申し述べられませんでした。父に代わりまして、心を込めてお世話させていただきました。こちらは亡き夫の妹でございまして、いまでは私と二人でこの店を切り盛りしております」

劉赤虎のことを詳しく聞きたいところだが、まずは公務が優先と、奥の部屋に案内されると、衣服を替えてすぐに役所に向かう。

州知事はあいにく町の外を巡回しているとのこと、代わりの者が応接に出る。両川宣諭使の件はあらかじめ聞いているから、万事お望み次第にするとの返答。ひとまず宿に戻る。



赤虎亭の女将によると、劉赤虎は別れ際に言っていた通り、西に向かった。当時、成都は西方の羌族の度重なる侵入に苦しめられ、勇猛で知られる徐州出身の劉赤虎はすぐに傭兵として使われた。数多の戦場を巡り、楊青鰐（ようせいがく）と名乗る男と義兄弟の契りを結んだ。楊青鰐は猪突猛進の向こう見ずで、幾度となく死に損ない、毎度劉赤虎に救われた。義兄弟はそれぞれ妻を娶り、劉赤虎には娘が、楊青鰐には息子が生まれた。楊青鰐は自身の思慮のなさを反省し、息子に学問を習わせた。劉赤虎は徐州での苦い経験から官人を嫌い、娘はいずれ商家に嫁入りさせようと考えた。楊青鰐は戦場に斃れ、妻も病死したために、その息子を劉赤虎が引き取った。亡父の遺志を思い、息子が元服する際に儒（じゅ）と名乗らせた。しかし、楊儒はこの時代を生きるには学よりも武であるとして武人を選んだ。父と異なり緻密な作戦で手堅く勝利をものにすることに長け、頭角を現した。劉赤虎は後見人として楊儒を支え、楊儒が独り立ちしたならば、引退して娘とともに商売を始めようと考えたようになった。

折りしも、田令孜に呼ばれた王建が成都へと向かってきた。楊儒は陳敬瑄の命令で、邛州城の守備につき、劉赤虎も同行した。城の楼台上に上り、二人は迫りくる王建の軍勢を見た。「伯父上、あれは何と言うべきでしょうか。唐の世が傾いて以来、数多の戦場を踏んで参りましたが、かように規律厳正な軍隊があるのを、私は初めて見ました」。楊儒が驚嘆すると、劉赤虎も、「わしの経験からしても見たことがない。我々は我々なりに兵士を鍛錬してきたつもりだったが、あれと比べたら烏合の衆でしかない」。「我等が仕える御主人の悪口は厳に慎むべきでしょうが、陳敬瑄どこの軍勢は盗賊よりも民衆から憎まれております。王建が率いるのは、あたかも民を庇護する軍勢であるかのように見えます」。二人は城中の兵と民を集めて協議し、王建に城を明け渡そうと決めた。楊儒が王建の陣営に赴き、一人の民も損なわないと約束してくれるのなら城門を開けると告げた。王建はその通りにした。

邛州開城の成功は、以降の王建の戦術を決定的に変えた。入城と同時に、兵士には、いかなる略奪もいかなる乱暴も許されるのが常であった。兵士は

それが目当てで命を賭して戦う。完全な無血入城は、黄巢が洛陽と長安で行ったのが稀有な例外であった。王建は兵士の乱暴を徹底して戒め、それが蜀の地を迅速に平定していく大きな要因となった。成都を得た日には、最も獐猛で知られる張勳（ちょうけい）を真先に入城させ、兵士に次のように言い渡した。「張勳に対してわしは、成都の民に乱暴狼藉を働く兵を見つけたなら絶対に許してはならぬと厳命した。張勳が怒ったならばどういふことになるのか、諸君らはよく知っていよう。禁を犯した者を張勳が捕らえ、もしもわしに知らせてくれるのならば、わしは許してやることもできる。しかし、張勳がわしの命令に忠実に従い、その場で刑罰を下したならば、わしがいくら許してやりたくても間に合いはしない」。そう言ったにも拘わらず、長期にわたる包圍戦の末の入城であったから、禁を犯す者がいた。張勳は百余人を捕らえて市に並べ、鞭で順に胸を撃った。張勳の剛腕に、全員が一撃で即死した。

張勳は張打胸の仇名を得、成都は静かになった。

王建は、楊儒には多大な功績があるとして、自身の仮子、すなわち養子と

した。王建は軍隊は一つの家族であると考えていて、功績の著しい者を仮子にし、王の姓と、宗の文字の付く名を与える。楊儒は王宗儒（おう そうじゆ）と名乗るようになった。

劉赤虎は、王宗儒が重く用いられるようになったのを見て軍を退き、娘に商才のある婿をとって、漢州に旅籠屋を開いた。王建も一度ならず赤虎亭に泊まり、「漢州は長安と成都を結ぶ道筋に当たる。都から止むを得ず落ちてくる者もあろうから、困窮する者があれば必ず救って成都に送るように」と言った。幾人もの落人が救われた。

劉赤虎は数年前に、続けて婿も死に、いまは娘の劉女將と、婿の妹の趙十五娘の二人で赤虎亭を切り盛りしている。王建自身や王宗儒の後ろ盾もあって、漢州第一の旅籠屋として大いに知られているのである。

劉赤虎の話は、韋蘭を思い出させて感慨深く、また、王建の評判が都で聞くのと大いに異なっていることに驚かされる。かつて王建に和睦を勧めた韋昭度は、命を脅かされ、都に逃げざるを得なかったと聞いていたのだが、そ

の韋昭度が王行踰に殺され、韋昭度の息子たちは都から逃れ、赤虎亭に泊まって成都に送られ、いまでは王建の蜀政府でしかるべき地位を与えられている。

このような話を聞き、李洵と韋荘は、今回の任務に望みを抱くようになる。

翌日、州知事から使いがきて、成都と連絡を取り、王建に会うための段取りを整えるから、しばしの間、漢州で旅の疲れを癒すようにと言う。

李洵と韋荘は安心して、町を見物しつつ三日ばかりを過ごし、漢州のよさを深く味わう。劉女将のもてなしぶりもあって、この町を離れ難く思うようになる。

州知事から音沙汰がないまま四日目に役所に出向くと、州知事はまたも留守で、成都にいった使いの者はまだ帰ってこないと言う。何の心配もないと、代わりに出た者がひどく愛想好くもてなしてくれる。李洵と韋荘は、宜しく願うと言つて宿に帰る。

翌日も州知事からは何の連絡もなく、その次の日に役所にいくと同様の対

応で、どうにも埒が明かない。劉女将も不審に思い、独自に人を成都に送ってくれる。そして次の日、使いの者が帰ってくると、明日にも王建が五万の兵を率いて成都を発つ様子だと言う。急いで役所に問いただしに行く。州知事に初めて会え、気色ばむ李洵に、ひどくのんびりした口調で、出陣の話など聞いたこともない、両川宣諭使と王建の面会は五日後に予定されたから、明後日あたりにゆるゆると漢州を発てば十分であろうと言う。食事まで用意してのすこぶる丁寧な応対に、何が何だかわからなくなる。

劉女将は首をかしげ、王宗儒に事実の照会をする使いを出す。ともかくも、州知事の言うよう明後日の出発に向けての準備をしていると、翌日、王建は成都を出て、王宗儒も同行したと知れる。李洵と韋莊は役所にいき、州知事を詰るが、知事は出陣など根も葉もない噂と一笑に付す。

王建は両川宣諭使と会うのを忌避したのだ。李洵は即座に王建を追うと決める。戦が始まる前に王建に会わねば皇帝の使者としての任務は果たせない。

劉女将は道案内の者を付けてくれ、王宗儒への手紙も書いてくれる。

発つにあたって、父親に与えた詩の続きを教えてほしいとのかねてからの劉女将の所望に応え、記憶の薄れた昔の拙劣な詩ではなく、全く違う詩を書いて残す。

羨爾無知野性真　羨ましいのは、そなたが野性の真さえ知らぬこと

乱搔蓬髮笑看人　伸び放題の髪を乱して人を見て笑う。

閑衝暮雨騎牛去　夕暮れの雨を衝いて牛にまたがるそなたに

敢問中興社稷臣　問うのは、誰が中興の名臣であるのか。

劉女将から聞いた父の晩年の姿。中興の名臣は誰であるかと劉赤虎に問えば、王建であると答えるだろうか。

漢州の門を出て、李洵も韋莊も、幾度となく振り返る。劉女将が門から離れずにいる。劉女将がいなければ、漢州に逗留している間に王建は遠く去り、和睦の使いの任務はどうすることもできなくなっていたのだろう。韋蘭が劉赤虎を助けたことがこうしてここに巡ってきたのか。

漢州はそれでも立ち去り難い。唐の盛時のままに存在し、今やどこ

にもありそうにないこの町は、ここを離れたが最後、一時の幻として消えてしまいうさだ。

北儂初到漢州城

北国に生まれた私は初めてここ漢州城にきた

郭邑樓台觸目驚

町並みと樓台、見て驚く他はない。

松桂影中旌旆色

松と桂の間に店々の幟が美しく揺れ

芰荷風裏管弦声

蓮の香りを運ぶ風に管弦の音がまじる。

人心不似絳離乱

人心は戦乱の時代のものとは思えず

時運還応却太平

時が巡ってまさしく太平が訪れたかのようだ。

十日醉眠金雁駅

金雁駅での十日の酔いから目覚め

臨岐無限眼波横

岐路に立てば、ここより先は無限に続く山の波である。

漢州城外の橋のほとりの金雁駅まできて、漢州の穏やかさにもう酔い続けてはいられない。東に山を越えて王建を追う。その前途に何が待っているのか。漢州に戻ってこられないような気もする。



ぐ。  
梓州が王建と顧彦暉の決戦の地と目され、李洵と韋莊はひたすらに道を急

**梓**州との境の峠へ、雨に打たれつつ登っていく。

天候がいかに悪く、道がいかに悪くても進まねばならない。両軍が衝突してから追いついたのでは遅い。

道幅が広げられ、轍の跡が深く刻まれ、大軍がここを通過してまだ間がないことを示す痕跡に、泥濘に足をとられながらも休むのを惜しんで坂を登る。

雨の上がった翌朝、峠の先からうねうねと続く長い谷を白い霧が埋める。

わずかな風に霧は盛り上がり、横に流れ、遥かに目を凝らすと、霧の薄くなった蔭に、小さく淡く蜀軍の旗が見える。

「ついに追いつきました」

李洵の声が震える。

坂を下る。蜀軍との距離を少しづつ詰めていくことに極度の緊張を強いられる。前方から、二人を寄せ付けまい、跳ね退けようとする異様な力が及んでくる。力の源は、戦鬪を目前にした軍隊が発する殺気であろうか。それより一層研ぎ澄ますのに邪魔となる者を拒んでいるに違いない。

王建は開戦を急いでいる。そこに乗り込んでいってどのようなことになるのか。斉への使いを命じられた葉公子は内臓が焼けてしまうほどの苦しみを味わった。智者は心安らかにせよと言ったのだが、実際に葉公子はどうしたのか。

霧は次第に晴れ上がり、谷を進む大軍の長い長い列が、木々の間から切れ切れに見える。ひと際大きな軍旗がはためく。あの旗のもとに王建がいるに違いない。

「まずは王宗儒さまに手紙を渡してまいりましょう」

劉女将が特に選んでくれた老練な番頭が先に立つ。

李洵と韋莊はじりじりと蜀軍に近づいていき、昼になり、午後の日が傾き、

山の端に日が触れかかるころに行軍が止まる。

赤虎亭の番頭が戻ってくる。

「王宗儒さまは難しい顔で手紙を読まれ、赤虎さまの恩人とあらば、成るか成らぬかわからぬが、今夜のうちにも義父上にお話ししてみましようとおっしゃってくださいました」

番頭の表情から、困難さが読み取れる。

蜀軍から少し離れた場所で露営する。

翌朝早くに蜀軍が動き出す。

その後に従って付いていくと、軍中より数頭の馬が走ってきて、李洵たちの前に、王宗儒本人が降り立つ。劉女将の義弟と聞くだけに若く、なかなかの好男子である。

「我が父の命の恩人のそのまた命の恩人。何もできねば、恩を知らぬ者と謗られましょう。周庠さまとも御相談し、義父上にお願いしました。義父上は、韓建どのの顔も立ててやらねばなるまいかと思案されていましたから、脈が

あるやも知れません」

李洵と韋荘が礼を言うのも聞かずに、王宗儒はすぐに走り去る。

期待してよいものかどうか、その日は、再びの報せがないままに暮れる。

漢州の知事と同じく、時間稼ぎをしているだけではないのかとの疑念が湧く。

翌朝、夜明け前に粥を啜っているところに王宗儒がくる。今日の一回目の休息時に会える可能性があると言う。

「この休息は戦鬪を始める前、兵士に腹ごしらえをさせるためのものです。義父上が出陣の姿にてお目にかかりますのを御承知おきください」

王宗儒は険しい顔を一度も崩すことなく去る。

「華州を出たときにすでに覚悟は決めました」

李洵は勅使の衣服を身に付ける。

貝の音が谷間に鳴り渡り、蜀軍が動き出す。李洵と韋荘はその後ろに付く。

日が梢を昇りゆき、蜀軍が止まる。

李洵と韋荘は蜀軍の中へと入っていく。王宗儒が道に立って迎えてくれる。

「あの旗の下です」

緩い坂を下った川のほとりに白い幔幕が連なる。大きな軍旗が高々と風を受けている。

槍で作られた仮の軍門の前で馬を降りる。鎧武者が左右に二列に並ぶ間を、王宗儒に従って歩む。数十人の兵士は石像のようにびくりとも動かない。

幔幕が持ち上げられ、その内側に入る。燦然たる武器の輝きに目が眩む。

中央の最も奥まったところ、一段高くに座するのが王建であるに違いない。

王宗儒が脇に退き、李洵が前に進む。鎧姿の王建が立ち、直垂の金具を鳴らし大股で向かってくる。李洵はためらわず前へと歩み、韋荘も従う。

王建は李洵と向き合うつと、さっと片膝をつき、

「わざわざ遠くここにまでおみ足をお運びいただき、まこと痛み入ります」  
王建の声は太くよく響く。

李洵は威儀を正し、

「今日は帝の勅使として参りました」

李洵は皇帝の正使。節度使の前に堂々と立っていけばよい。

王建は大きな四角い顔で李洵を見上げる。鼻筋が通り、額が秀で、目は横に切れ長である。

「某ども田舎武者の小競り合いに、陛下が御心を痛めておられると聞き、陛下の子としてこれ以上の不孝はないと、身を縮めるばかりです」

王建は肩を揺すって両腕を広げ、大きく詫びるような身振りをする。

「宣諭の詔はここでお受けになられましょうか」

李洵が尋ねる。

「奥に場所を御用意いたしております」

王建は前に立って二人を導く。奥の壇が取り除かれ、その先の幕が左右に開かれる。目にも綾な紅の布地が一面に敷かれ、高い壇が設けられている。王建に促されて李洵は壇に上り、韋荘は下に立ち、王建が壇に向かって跪く。

李洵は威儀を正して構え、韋荘が皇帝の詔を厳かに読み上げる。

王建は畏まって聞き、韋荘が読み終わると、李洵は壇より下り、王建の前

に立って会釈し、

「兵は引いて下さいませようか」

王建は膝をついたまま拳を振り上げ、紅の敷物を強く撃つ。

「これほどの不孝者は天下広しといえども某の他にはいませんでしょう。陛下の赤子として、かくも愚かな者もおりますまい。嘆かわしい限りです」

「如何に言われませうか」

王建は拳で自身の頭を撃ち、

「この不孝者、頭を砕くよりありません」

王建は数度にわたって頭を打ち続け、韋荘が歩み寄ってその腕を軽く抑える。王建は静かに畏まり、

「もはや時を過ぎたのでございます」

韋荘は退き、王建はゆっくりと立ち上がる。

全ての幔幕が一斉に取り払われる。

王建を中心にして、数知れぬ兵士が幾重もの同心円状に並び立って谷を埋

め尽くす。

風に揺れる軍旗へと腕を伸ばし、

「勅使どの、あれが戦士の情でございます」

李洵は青褪めた顔で、

「戦は止められぬと言われるのか」

「旗はかように勇んでおります。戦士の情は奪えません。某にはどうするこ

ともできません」

「これはお上の詔でございますぞ」

「お上の御心に副えませぬまことの不孝者でございます」

王建は無念そうに胸を叩く。

李洵が詔の主旨を繰り返し、王建を説得しようとする。

王建は顔を背け、李洵が話しているのも構わずに、

「我が息子の宗儒より聞きましたが、息子が世話になっておるとか。義父として礼を申さねば義理にもとりましよう」



韋莊に向かつて言う。李洵は口を閉じる。

「私は王宗儒さまには何もいたしておりません  
ためらいがちに王建に応える。

「赤虎亭と何か関わりがおありであったとか」

王建は韋莊に微笑みかけ、それにつられて、劉赤虎とのかことを手短かに述べる。

「劉赤虎は一本気の男。赤虎亭の扁額は某も見ております。副使どのの詩であったとはまことに奇縁。失礼ながら、この記憶に留めたく、お名前をお聞かせいただけませんか」

「左拾遺を務める韋莊にございます」

王建は目を見開き、

「まことか」

「京兆杜陵出身の韋莊でございます」

王建は振り返り、

「宗儒はどこだ。ここにこい」

太い声で怒鳴る。

すぐに王宗儒が飛び出してくる。

「息子よ、貴様は怪しからん奴だ。危うく大失態を致すところであった。副使どののお名前をどうして言わずにおったのか。この大馬鹿者め」

王建の激しい叱責に王宗儒はひれ伏す。

「誰ぞ床几を持ってこい。こちらのお方に座っていただくのだ」  
一人が走って床几を据える。

「どうぞお掛けください」

とまどう韋荘に、王建は寄ってきて、肩を抱え込むようにして座らせる。

「皆の者ども、よく聞け。このお方こそ、常々話をしている、かの『秦婦吟』をお作りになったお方である。宗儒はこの大事なことを言わなかった。大馬鹿者め」

王宗儒は身を縮め、

『秦婦吟』のことは存じておりましたが、まさか秦婦吟の秀才と呼ばれるお方がこのお人とは思いませんでしたので」

消え入るように言う。

王建は手をつき、

「秦婦吟の秀才どのお目にかかれる日があるうとは夢にも考えておりませんでした。息子の愚かさのため、御無礼を働き、平にお詫び申し上げます」  
頭を下げる王建の前に、床几より滑り下る。何がここで起きているのか理解できない。王建は韋莊を抱えて再び床几に座らせる。

「戦場を駆け巡るばかりの某、まことに恥ずかしながら、この歳になってわずかな文字しか読めません。ただ耳で聞いたことばかりは忘れぬようにと心がけ、『秦婦吟』は初めより終わりまで全て朗誦できます。お疑いなされましようか。試しにお聞きいただきましょう。間違っておりますならばお直してください。秦婦吟の秀才どの御自らお教えいただければこれ以上の幸はございません」

王建は立ち、詩の一節を高らかに詠じる。

北隣少婦行相促 北隣りの娘たちは行き惑い

旋拆雲鬢拭眉緑 髪を崩し化粧を乱してぐるぐるとまわります。

已聞擊托壞高門 聞こえるのは、門を叩き壊す音

不覺攀縁上重屋 どうにもできず屋根に攀じ登ります。

須臾四面火光来 たちまち四方は炎に囲まれ

欲下迴梯梯又摧 降りようとしても梯子は碎けてしまいます。

煙中大叫猶求救 煙の中に救いを求める叫び声がありました

梁上懸屍已作灰 梁に残ったのは灰となった屍体でした。

呆然とその声を聞く。

「いかがでしょうか。誤っておりますでしょうか」

床几より立ち、

「拙ない我が詩をここでお聞かせいただくとは、あまりの意外さに、驚くばかりでございます」

「秦婦吟の秀才どのお目にかかれる意外さに、某こそが驚いております」

王建の顔に嘘があるとは見えない。少しく気持ちを強く持ち直し、

「一つお聞かせ願ってもよろしいでしょうか」

「何なりとも」

「長い『秦婦吟』の中で、いまの箇所を歌われたのには何か訳でもございませうか」

王建は微笑み、すぐに顔を引き締めて兵士たちの方を向き、

「この兵士どもに常日頃よりここをよく聞かせており、口をついて出て参ったのです。戦とはかの軍旗のはためきによってやむを得ず行うもの。それに乗じて、己の醜い欲を遂げてはならぬと、兵士どもを戒めるために、ここを聞かせておるのです。そうだな」

王建が腕を回すと、王宗儒を初め皆がうなづく。

王建は、なお困惑する韋荘を見て、

「戦に明け暮れる某に、似つかわしくないことを申すと思われましょう。そ

の通りです。戦の中にある者は、戦ほど愚かなものはないと言う単純な事実がかえってわからなくなっております。某もそうでした、『秦婦吟』を聞くまでは、『秦婦吟』を聞き、戦の愚かさに目を見開かされました。まこと戦ほど愚かなものはありません。しかし、残念なことに、戦は避けられません。人の世に争い事はなくならず、戦が愚かであるのを知らぬ者は絶えません。戦を好んで行う者が勝者になれば、世は滅ぶよりありません。戦を愚かとする者こそ戦わねばなりません。大きな矛盾です。戦はやめられなくとも、戦のやり方は変えられます。某は陣中であつて『秦婦吟』を思い、秦婦の嘆きが聞かれぬ戦はいかにしたら為し得るかを常に考えております。『秦婦吟』こそは我が経典です。この言が偽りでないことをお示しいたしましょう」

王建は再び『秦婦吟』の一節を吟じる。

四面従茲多厄束

災厄は四方より束になって押し寄せ

一斗黄金一升粟

一升の粟が一斗の黄金となりました。

尚讓厨中食木皮

宰相の尚讓の厨にも木の皮しかなく

黄巢机上刳人肉

黄巢の食卓に載るのは人の肉ばかり。

東南断絶無糧道

東南の道は断えて食糧はこず

溝壑漸平人渐少

生きる人の姿が減り、溝は屍で埋まって平らになりました。

六軍門外倚殭尸

六軍の門の外にも死骸が並び

七架営中填餓殍

近衛兵の営中も飢える者ばかりとなりました。

「これほど愚かな戦がありましたか。民を飢えさせ、溝が死骸で埋まるとは、何のための戦でしょう。戦は民を救うものでなければなりません。黄巢が洛陽に入ったときも、長安に入ったときも、民は歓呼して迎えたと聞きます。民は黄巢に救いを求めたのです。しかし、その結果がこのありさまです。不義の戦をした黄巢は当然のことながら滅びました。黄巢を滅ぼすには戦が必要でした。戦はなくせません。正しい義を踏み行うために戦が必要です。軍旗が戦の時を告げるとき、我等は義のために戦い、勝たねばなりません。我等が戦わずにいれば、不義が栄え、民の苦しみは酷くなるばかりです。勅

使どの、どうして愚かな戦をこの世からなくすることができないのでしょうか」

王建に問われて李洵は、

「仁義の教えを広げることで戦をなくしようと、孔子も孟子も考え、以来、二千年にわたって我等はその教えに従って努力を続けています。今日、ここに参ったのも、戦を止めるためです」

王建は深くうなずき、

「秦婦吟の秀才どのお伺いいたします。某が踏み行うべき正しい道はどこにありませうか。御覧ください、あの軍旗のはためきを。いまが戦の時であると告げております。我等は義のために武器を取らねばなりません」

その旗を見つめ、何を言うべきか、言葉を選んでみると、王建は、

「尋ねることが間違っておりました。『秦婦吟』は申したように我が経典。秦婦吟の秀才どのお目にかかれましたこの機会に伺うべきは『秦婦吟』をおいて他にないはずでした。我等兵士は『秦婦吟』を如何に読んだらよろしいと、秦婦吟の秀才どのはお考えでありませうか」



先の間に答えねばならなかった。和睦を導き出さねばならない。

『秦婦吟』は拙い作です。長安において見聞しましたことを、秦婦の口を借りて歌ったまでです。『秦婦吟』を作った時点で私の役目は終わり、『秦婦吟』をどう読むかは、それぞれの人のお考えのままでよろしいと考えます」

静かに答える。『秦婦吟』は銀犁の作とも思う。如何に読めばよいのか己が決めるべきでない。

和睦については言えずにいる。

王建は頭を下げ、

「何と秦婦吟の秀才どのは謙虚なお方である。某の不躓な問を平にお許し願います。『秦婦吟』より某が学ばなければいけません。安直に教えを請うなどもつての他でした」

王建は腕を組んで天を見上げ、しばしの沈黙の後に、王宗儒を呼び、

「よいか、皆の者どもに言え、秦婦吟の秀才どのの前で、『秦婦吟』を歌うのだ。そなたが皆を導け。一字たりとて間違えてはならぬ。秦婦吟の秀才どの

の前でこの義父に恥をかかせたら許さぬぞ」

王宗儒は畏まって命を受ける。

蜀軍の兵士が並んで『秦婦吟』を朗誦する。信じ難いことが起こっている。

長い詩の全てが終わると、王建は軍旗を指差し、

「ああ、見られよ。旗が垂れております。戦の時は去り申した」

風が止み、軍旗は力を失った。

「では、軍を引いて下さるのでしょうか」

李洵の問に、

「勅使どの、この王建、不孝の子となる一歩手前で留まることができました。

『秦婦吟』のお蔭です。勅使どの、この世から戦がなくなる道筋がここに見

えてきたような気がいたします。唐土の民の全てが『秦婦吟』を知るように

なれば、あの旗が力を失ったように、戦もなくなるでしょう。そうは思いま

せんか」

『秦婦吟』は我等の時代が生んだ最も優れた詩でありましょう」

王建は韋莊の肩を叩き、

「弟の韓建の顔も立たせてやりましょう。これより某は成都に帰ります。二言はありません」

「忝い」

応じる声が震える。

「息子よ、酒宴の用意をせよ。兵士どもに酒を振る舞い、明日は帰還と触れよ。兵士を送り出した家で、父が、夫が、息子が、無事に帰ってくるのを喜ばぬところはあるまい。祝いの宴を開くのだ」

李洵は王建と盃を交わすと、直ちに辞すと告げる。

王建は韋莊の手を取り、

「これがお別れとは、某には思えません」

分厚く大きな手のひらの内に、己の手がすつぽりとおさまる。

■諭使としての任務が全うできた喜びが湧いてきたのは漢州に戻ってからだ。時の流れとは無縁の漢州の風光に触れ、ようやく緊張がほどける。

「父が受けた御恩に比べましたら何ほどのこともございません」

劉女将の丸顔がとりわけ福々しく見え、いくら礼を言っても足りない。劉女将がいなければ、王建に会えぬまま、戦争が始まっていたに違いない。

劉女将が勧める祝いの酒に、李洵も珍しく饒舌になり、秦婦吟の秀才が王建の心を動かしたありさまを語る。

「父が長く記憶していたお方だけのことはございます」

劉女将は感激の面持ちで、

「父は、お偉い方の卑劣な仕業で死にかけたことから、お歴々の方々を毛嫌いしております。稀には異なる方もおられると申しておりましたのが、雀蛤先生とあなたさまのお二人でございました。王建さまもきつとおわかりになったのでありしょう」

「あれはすべて従弟が為したことです。お父上は私に向かって、いずれは朝

廷に居並ぶお歴々になる気であるのだろうが、自分たちのような虫けら同然のように思われている兵士にも血は通っているし、恩義を忘れないことを覚えておいてほしいと、言われました。当時の私は、朝廷に出仕するようなこととはあるまい、お父上が嫌われるお歴々の中に入ることとはあるまいと考えておりました。現在、官人の端くれとなり、お父上のお叱りを免れ得ないので、と秘かに恐れを抱いております」

「何をおっしゃいますか。父はただの乱暴者。虫けら同然の兵士が、本当の虫けらにならずにすむには、信義を重んじよりないと、それだけは厳しく申しております。商売も同じ考えでした。儲けよりも信義が第一である」と、口癖のように申しておりました」

「旅籠屋を開かれたのには何か理由があったのでしょうか」

「徐州からの放浪の日々に、様々な苦勞を味わったことから、いかなる人も受け入れる宿を作ろうと考えたのでございます」

似たようなことを縁が言っていたのを思い出し、大事の用を終えられた気

安さから、

「旅籠屋に婿入りしたいと願っている甥がおりまして」

と、綜の話を持ち出す。

「綜くんはなかなかの好男子」

ことの他陽気な李洵は、劉女将の義理の妹と綜は齡が合いそうだと言い出し、自分の弟と韋莊の姪の縁談を披露しつつ、綜の両親を褒め讃え、

「ここでもう一つの縁を結べたらさぞ愉快でしょう」

大いに笑う。

韋莊は少々慌て、

「どうも変な話を持ち出してしまいました。ただの座興です。あれがこちらに婿入りなどしたら、大変な御迷惑をおかけします。あれが旅籠屋の婿になるのを望んでおりますのは、全くもって不届きな了見からです。店のことを全部女房に任せ、自分は釣り三昧を決め込みたいと。どうにもならない愚かな甥です」

綜を笑いの種にしてこの話を終わらせる。

漢州は一泊しただけで帰還を急ぐ。

城門を出て、李洵はまことに晴れやかな顔。死を覚悟して李洵はこの旅に上った。任務が完了すれば、官を辞し、故郷に帰る。李洵には思い煩うことはない。

韋荘は、この漢州にまた戻ってくることはあるまいとの悲しみに襲われる。この漢州のような場所は、恐らくこの地上にはどこにもない。笑って終わらせたが、綜を赤虎亭に婿入りさせられたらどれだけよいか。綜の好むことを初めてしてやれる。

己は唐朝の官人、この蜀の地は実質は唐とは別の王建の国だ。ここにくることはもうあり得ない。

昨夜の喜びが早くも凋む。

華州に帰る。宣諭使の任務を成し遂げられたのはまたとない幸いであったが、任務が終われば、その先に別の日々がある。韓建は「気晴らし」と言

った。旅の非日常にあることで考えずにすむこともある。ここからは離れていた日常へと日一日と近づく帰路だ。旅の始めに止めて置いた場所にまで戻り、その先へといかなければならない。春琴のいない官舎に戻って、己はどのような思いを抱くようになるのか。そこで何をするのか。これまで春琴のことを忘れていたのではない。忘れたがっていたのでもない。それでも、旅の前と同じことになるのかと思うと、いまからすでにして辛い。

劍門までは豊かな蜀の国。その先は荒廃した関中の地。その片隅の華州の町の片隅の州署に押し込められた氣息奄々の唐朝がある。その中へと己は帰っていく。

漢州を後にし、実際に劍門を越え、旅の終わりが見えてくる。

ここにくる前に、皇帝への絶望感を抱いた。それはまだ消えずにある。それを持ったまま華州に帰るのか。皇帝の苦悩を思えば、皇帝のために何かをしたいといまも強く思う。その一方で、王建に握られた手の感触が残る。王建は自身の意志で行動し、自由を奪われた唐の皇帝は無力感に喘ぐ。皇帝と



王建を比べてはならない。皇帝は絶対的なものであったはずだ。

お上のために、民のために、官人として立派な仕事をするとは己は言い、春琴もそれを望んでいた。お上のために、民のためにと、躊躇なく並べて言うことはもはや難しい。春琴は無理を強いたと詫びた。春琴は最後に何を考えていたのか。春琴の心に応えるにはどうしたらよいのか。

このたびの宣諭使の仕事もそうであったように、己は常に多くの人々に助けられてきた。このような結果になったからなのだが、韓建や愠に悪意があったとは考え難い。韓建が「気晴らし」と言い、愠が「兄上のため」と言ったのは、全くの虚言ではなかったようだ。彩霞がどのような考えから、どのような手紙を書いたのかわからないが、彩霞にも助けられた。官人としての立派な仕事にこれが当たるとは思い難くとも、勅使としての任務は果たしおせた。人々のお蔭で生かされている。

華州を目前にして回り道をし、韋一族の墓所を訪れる。弟の嫁に淑娥を迎えると決めた李洵の希望でもある。

先祖を祀るのは、貢奉に合格したのを報告して以来のこと。誇らしげであった己が苦々しく思い出される。先祖に詫びることばかりだ。己の一生は、虢州の莊園を滅ぼし、唐の衰えとともに韋家を終わらせてしまうものだったのか。恥ずべき己は、人々の助けで命を繋いでいる。杖で撃った慍にまで助けてもらった。

先祖のために、人々のために、己は何をしてきたのか。これから何ができるのか。とりわけ、春琴のために何かをしなければいけない。それは何であるのか、糸口さえ見えていない。華州に帰ってから、最も恐るべきは、一切何もないという現実と向き合わねばなることだ。

微かな望みを淑娥に託す。廬山の愚笠子の予言はまやかしに違いないが、藹の子孫に官位を授かる者が出ると言っていたのが当たるとすれば、それは淑娥の子のことであろうか。淑娥が育てる花のように美しく咲く未来があると思いたい。

「くれぐれも頼みます」

李洵に頭を下げる。

その日の夕刻に樊川に着く。

記憶にはないが、父が在世の折にここで遊んだと聞かされていた。

却到樊川訪旧遊　樊川の懐かしい場所にまたやってきた

夕陽衰草杜陵秋　枯れ始めた草に夕日が射す杜陵の秋。

衰草と言うには事実としてはまだ季節が早い。しかし、己の目にはそのように見える。

あれも秋だった。劉赤虎を救った旅、蘭は唐の衰亡を予言した。いまここに蘭がいたならばここの秋をどう見るだろうか。

千桑万海無人見　見渡す限り丘にも平原にも人はいない

横笛一声空涙流　笛はひと声のみ、涙のうちに消える。

蘭の笛が聞えるような気がする。蘭なら、己にこれからどうせよと言うだろうか。蘭は、『秦婦吟』とともに生きるようになるだろうと言った。やはりそうなのか。己が何かを為したと敢えて言えるものがあるとするれば『秦婦吟』

であろうか。『秦婦吟』を書くための己の一生であったと思うべきか。

王建の大きな手の感触が甦ってくる。

『秦婦吟』は銀犁もその一人である秦婦たちの作だ。王建が『秦婦吟』を大切にしてくれているのは、『秦婦吟』が、秦婦吟の秀才などと呼ばれている己の作ではなく、銀犁たちの作だからだ。だからこそ『秦婦吟』には戦を止めさせる力があるのかも知れない。『秦婦吟』にはそれだけの価値があつてほしい。

李洵に歩み寄り、

「王建どのが『秦婦吟』について言われましたこと、どうかお一人の胸の内  
にしまっておいてはいただけませんかでしょうか」

李洵は怪訝そうに、

「御名誉なことではありませんか」

「王建どのはお上の思し召しに素直に従われたと、そのようにしていただけ  
ませんかでしょうか。それが何よりよいと思われまます」

李洵は一考して同意する。

「お上も、韓建どのも、この度の和睦をお喜びになりましょう」

李洵がどのように理解したかはわからない。謙遜したと思ったか、あるいは王建と特別な関係を結んだと疑われるのを避けたいと思ったか。事實はそのどちらでもない。華州の朝廷で、『秦婦吟』についてとやかく言われたくないのだ。『秦婦吟』にまつわる噂はすでにいくつかあった。これ以上、あの連中に、銀犁たちの『秦婦吟』を汚されたくない。

薄汚れた陰謀の渦巻く朝廷を、それほどまでに嫌っていることを改めて自覚する。皇帝への絶望感もくつきりと残っている。そのような心境で華州に帰るのは辛い。

しかしながら、朝廷に帰還して和議が成ったことを報告すると、皇帝からも韓建からも賛辞を受け、褒美を得、祝宴も設けられる。韋荘とて喜びが全くないものでもない。

韋家と李家の間に使いが行き来して、淑娥の縁談が進められる。どこか華

やいだ気持ちにならないものでもない。

韋諷夫婦は一度は辞退したが、二度とは望めぬ良縁である。朝廷を辞した李洵の帰還に合わせて、秋の半ばに、淑娥を荊州に送り出す。

感情を表に出すことが稀な諷も、淑娥が大事の種子を残して、

「落ち着く場所を得ましたならば、これを蒔いてお心をお慰めください」と、言えば、さすがに泣き、陸氏は、

「何があっても最後まで夫に従うのです」

自身がまさにそうしていることを娘に言い付ける。

淑娥は韋荘に向かつて、

「父母のことは、兄が何とでもいたしましょう。伯父上さまはどうぞ大事なお仕事にお心をお向けてください」

何かをせねばならぬと悩む伯父の心を知っているのだろう。

綜が韋家の代表として妹に同行し、華州の官舎は、弟夫婦と鄭郎、林婆さんと五人だけとなる。少し寂しいが、不思議と穏やかな暮らしとなる。勅使

の大役を終え、淡々とした職務に戻る。婚礼を終えて綜が帰ってくるまでは、官人としてのこの務めを地道に果たしていこうと、取りあえずは考える。

だが、華州は平穩ではない。得体の知れぬ陰謀の数々に、韓建が怒りを爆発させる。長安に軍隊を送り、十六宅坊を囲み、小競り合いの末に十一人の王を捕らえる。石隄谷に連れ出し、皇帝の許しもなしに皆殺しにする。韓建が次に何を為すのか、朝廷は戦々恐々となり、全く不可解な足の引っ張り合いに明け暮れる。

韓建のこの暴虐と、韋荘に見せてくれた笑みとは、大きな開きがある。韓建が民衆の間に人気があるのは、自分たちに近い存在であると感じるからなのだろう。唐の皇帝は、手元に置くには韓建にとって重すぎる荷であるに違いない。

王建と顧彦暉の和睦は長続きせず、戦が再び始まる。王建の圧倒的な強さの前に、顧彦暉が自害して果てる。

十一月、綜が帰る。

淑娥の夫は、李洵が言っていた通りに篤美そのものであると、綜が言うので、皆は一樣に安堵する。荊州はよく治まって大いに繁栄していると、綜はその賑やかな様子を語り、

「かつては北韓南郭と併称されていましたが、いまではどうですか、華州などは遠く及ばないではないでしょうか」

華州も荊州も一時は人がほとんど絶えるまで荒廃し、それぞれ韓建と郭禹によって復興が進められ、世の賞賛を受けた。華州に皇帝がきてからは、各地からの貢納品がここに集中され、大いに繁盛しているので、

「いくら何でも、ここほどではありませんでしょう」  
しばらく前の荊州を知る鄭郎が疑いの口をはさむ。

「人の数と物の量だけを見れば、それは華州の方が多いかも知れませんが、あちらは明るく輝き、清々しい風が吹いておりました。こちらは城門の内側に入った途端に、暗く翳り、淀んだ空気が充満し、窒息するばかりですな」  
綜がまだ少年だったところに、韋蘭に連れられて杭州にいき、帰ってくる



潤州は息が詰まると言った。その時と同じだ。

華州の逼塞した雰囲気を韓建も気にしてのことだろう、何（か）淑妃を皇后に立てる儀式を華やかに執り行う。官人にも町人にも祝いの品が配られ、町は夜も明るい灯で飾られる。

十二月、右拾遺の張道古（ちょうこう）が皇帝を諫める文書を提出する。

「漢の時代に文帝は御即位から間をおかずに国家の事に明習されました。いま陛下は御即位されてすでに十年、しかるに臣下を馭す道をなお御存知ではありません。我が太宗は内は中原を安んじられ、外は四方の夷に威を開かれ、世界の国で唐の臣下とならないところはありませんでした。しかるにいま陛下の号令の及ぶところは日々に縮まり、ほとんど無になろうとしております。臣は微賤といえども、陛下の朝廷、社稷が姦臣の弄ぶところとなり、ついには賊臣の有するところとなってしまふのをひそかに痛むものであります」

張道古は左拾遺の韋荘と同等の立場にある者。これは皇帝を諫める役目を担う者としての立派な文章であろうか。韋荘は索寞とした思いを抱く。

漢の文帝や唐の太宗と比べて劣っていると批判して、それが皇帝を諫めることになるのか。皇帝は即位の際には、漢の文帝や唐の太宗のようになろうと志した。その思いを皇帝自身の口から聞いている。皇帝は過去の大皇帝に引けを取らない器量も具え、それでいながら、如何ともし難い時代の流れのために、華州に閉じ込められるに至った。皇帝を責めてどうかなるのか。漢の文帝や唐の太宗のようになれずに、最も苦しんでいるのは皇帝自身だ。その苦しみから解き放つ手立てもなしに皇帝を批判するのは、自身の名を挙げようとする賤しい行為であると思えない。

ならば己は何をしているのか。皇帝に対する絶望感をいまま消せない。皇帝を諫めることをせず、正月の宴では痴情の詞を歌った。

皇帝は上疏文に激怒し、張道古を罷免にする。

苦い思いを噛み締める。張道古の文章に賛同はしないが、罷免を恐れ、保身のために敢えて黙っているのと己は同じだ。杜甫は皇帝を諫め、周囲との摩擦から、官を辞した。

とりあえず綜が帰るまでは官人としての務めを地道に果たしていこうと思つたのだったが、綜はとつくに帰ってきていて、依然として何もしいままになっている。

いまはこのようなことをしている時ではないとの例の焦燥感を頭をもたげる。時に、気が変になるばかりに責め立てられる。焦るばかりで考えようがない。心が乱れ、春琴がいなければ何もできないのだと、老残の身をさらす己の情けなさに、人知れず泣く。

**翌**乾寧五（八九八）年の初め、韓建は皇帝を手放すことにする。最も恐れるのは朱全忠との関係だ。朱全忠は東方で李克用を圧倒し、洛陽の復興に努め、そこに皇帝を迎え入れると天下に公言している。朱全忠が実力行使に出たならば、韓建は到底太刀打ちできない。韓建は、李茂貞、李克用、王建と同盟を結び、一致して皇帝を盛り上げることで、朱全忠に対抗していくことにす

る。朱全忠に対する四人の節度使の利害は一致し、力を出し合って長安の宮殿を修復し、皇帝を都に帰還させることになる。

春の終わり、修復工事が進む長安城に韋莊は入る。ほぼ二年ぶりの都。見上げる春明門は、その高さは変わらないものの、すっかり黒ずみ焼かれた痕もあって、昔日の姿とは似ても似つかない。

官人たちが住む場所を準備する仕事を命じられた。同僚たちよりも、半日ほど早くに到着した。華州を出るこの機会に、仮に埋葬したままになっていた春琴の棺を杜陵の墓所に移した。家の廟に入れられるのは正妻だけの特権で、春琴には決して許されないことで、かつてなら一族の猛反対を受けた。韋莊の痴情ぶりは同僚たちにも知れていることから、別行動をとって華州を先に出ることが黙認された。

春琴を妻として遇せたことにささやかな満足感を覚えた。これをもって春琴に何か報い得たと考えようとしている己がいることに気づき、慄然とした。これだけのことで、春琴の心に応えたとするのはあまりにも安直すぎる。己

が情けない。

地道に職務を果たす、取りあえずはやはりそれしかない。まずは今回の仕事。皇帝が長安に帰還し、唐朝にも己にも転機が訪れようか。そのときにこそ、己の為すべきことが見えてくるかも知れない。そう期待しよう。

門柱にもたれてしゃがんでいた老兵が立ち上がり、大儀そうに歩んでくる。韓建に支給された札を見せると、ろくに確かめもせず、通れと言う。

鄭郎とともに門より入る。東西に真直ぐに伸びる大通りに、晩春の日が注ぎ、ゆらゆらと遠く人影が陽炎のように揺れる。それだけを見れば、まことに長閑であるのだが、通りをはさむ左右の坊の壁は崩れ、得体の知れない臭気が漂い出てきている。輝きに満ちていた大唐の都のいまの姿がこれである。

皇城の修復を進める音が微かに聞こえる。希望はそれだ。己は六十四歳。何かを為し得るとしたらこれが最後だろう。貢奉を受けるために十二年振りに安邑坊に戻ったときに、なぜ己一人が帰ったのかと嘆じ、春琴が「旦那さまには生きていくべき理由があるからでございませう」と言った。そのときの

「理由」がなおあると思いたい。

東市への入り口がある。門が消え失せ、一步入ってみると、真黒な光景に足が竦む。韋蘭と武大人の店の屋根裏に隠れていた日から、ここで略奪と破壊が幾度繰り返されたのか。

満目墻匡春草深　町の垣はどこも崩れ、春の草に深く覆われている

傷時傷事更傷心　時を傷み、事を傷み、心を傷ませる。

車輪馬跡今何在　縦横に走っていた車や馬の跡はどこにあるのか

十二玉楼無処尋　皇城の十二の楼閣はもう尋ねようがない。

一篇の詩を詠んで東市を去る。

「結局のところ、阿枉にも何もしてやれなかった」

重くつぶやく。

破壊された安邑坊に帰っていったあの夜の光景が、脳裏にありありと甦ってきている。お狐さまは阿枉を救ってくれたのに、阿枉の幸せを守ってやれなかった。阿枉の看病で命を取り留めたのに、阿枉は同じ病で死んでしまっ

た。いつも同じだ。人に助けられ、しかし人には何もできない。

「旦那さまによくしていただき、妹はこの上なく幸せでありました」

阿枉の話をすると、鄭郎は必ずそう言う。

「何一つしてやれなかった。どうしてなのか」

「世の中がそのようなものだからでしょう」

「そもそも天の道が正しいのか、正しくないのか、それを問うのは無駄なのか。たまたまいまの時代がいけないのか。都というこの場所が悪いのか」

「難しいことはわかりませんが、どこもかしこも悪いものではありませんでしょう。良い目に遭う奴もいれば、悪い目に遭う奴もいる。運と言いましようか、必ず思ったようにできるものではありません。戦の場で矢が飛んできて、かすめるだけなのか当たるのか、生きるか死ぬかの大きな差が生じるにはわずか一寸に足りぬ長さです」

「そうなのだろう。ならばどうだい、杭州にいつてみないかい」

いま口にしたことの唐突さに韋莊は自身で驚く。

「都にいらしたばかりで、お辞めになるのですか」

「そなた一人がいくのだ。向こうで伍伝に親孝行してはどうかい。阿枉に何もしてやれなかった。そなたにはせめて豊かな杭州にいつてほしいと、いま思ったのだ」

「旦那さまのおそばを離れることはできません。義父の言いつけです」

「もう十分過ぎることをしてもらった。阿枉もそうだった。そなたほどの男、私などに仕えていなければもつともつと大きな仕事ができただろうに」

「どのようなことがあっても杭州には参りません」  
 鄭郎は怒ったように言う。

「そうなのかい」

韋荘もそれで黙る。

鄭郎がいてくれなくては困る。人に助けられてようやくよく生きている。何も返すことができない。

翌日から仕事が始まる。百官とその家族が住むべき場所をどこにどう確保



するか、長安城内は想像以上に荒れ果て、そこに広く分散して住むのは危険極まりない。宮城の近くにまとまって住むのが妥当だろう。比較的損傷のない仏寺に場所を借り、官舎を用意するのがよいだろう。

都に移りくる人数に合わせて、どこにどのような建物をどのようにして作っていくのか、具体的な作業はなかなか面倒である。朝廷には力がないので、四節度使から派遣された役人たちと一つ一つ折衝していかなければならない。煩瑣な仕事の合間を見て、安昌坊や青竜寺を訪ねる。安昌坊の家もお狐さまの祠も、幸いなことに、目だった被害はない。林婆さんや淑娥が花やら作物やらを植えていた畑は、雑然と様々な草に覆われている。

「ここでまた昔のような暮らしは営めぬのか」

極めて難しいと思いつつも、鄭郎とともにお狐さまに祈りを捧げる。

青竜寺の牡丹は花の時期を終え、蟻光は、

「冬の間は、心地悪しき日が続き、何の手入れもしてやれませんでした。それでも牡丹はいつも通りに咲きました」

蟻光の体はさらに細く、顔の皺が深くなった。

「御加減はいまはよろしいのでしょうか」

「先師の心を継ぎ、変わらずに牡丹を咲かせようと努めてまいりましたが、寿命が尽きる日が近づくに及んでようやくのこと、愚僧などおらずとも牡丹は咲くのだと気づかされました」

「禅師さまがいらしてこそその牡丹でございましょう。まだまだお元気でいただかねば、牡丹が悲しみます」

「時を遡れば、この寺など影も形もなかった昔があり、遠い先を見通せば、この寺が影も形もない将来があります。牡丹はその昔にも花を咲かせ、遙かな将来にも花を咲かせます。花の心は過去現在未来に常住しております。愚僧ごときに何かができるものではありません」

「牡丹に注がれる禅師さまの御慈愛があるから、今年も佳き花を咲かせたのでしよう。確かに牡丹は常に世にありましようが、常に同じに咲くのではありません」

「かつて愚僧もそのように思っておりました。自ずと咲く花の心の他に、人が何かをできると考えるのはまこと知恵のないことでしよう」

蟻光は韋莊を本堂へと連れる。

歩行の際も、座すときも、蟻光は寺僧の手を借りねばならない。

「若き人を先に亡くす以上に悲しいことはございませんでしょう」

蟻光は春琴のために経を読んでくれる。

「あれは花を咲かせ損ないました」

「牡丹が年々咲くのと同じです。春琴さんのお心が朽ちずにあるならば、花はこれからも咲きましょう」

「そのようなことがありますでしょうか」

「ないと思わねばならない理由はありませんでしょう」

蟻光に会って、少しばかり心の落ち着きを得る。

華州に一度帰って、同じ年の八月、皇帝とともに都に戻る。

唐朝の光が再び四方に及ぶとの願いを込めて光化と改元。皇帝にも期するところがあり、韓建、李茂貞、王建、朱全忠、李克用の五人の節度使を都に集め、和解させようとする。皇帝の使者が各地に飛び、李克用は上京の意欲を見せる。韓建、李茂貞、王建は様子見を決め、朱全忠は黙殺する。朱全忠が動かねば何も始まらない。話は流れる。

皇帝は天下の情勢に関わろうと試みる。しかし、実際に行えるのは宮中の年中行事だけ。朝廷で何事かを決めても、それが都の外に及ぶことはまずない。韓建、李茂貞、王建、李克用らが送ってくれる物資を頼りに唐朝は命を繋ぐ。たまにはどこかの節度使やら実力者やらが爵位を欲しがると、皇帝は詔を書いてやり、その見返りに幾許かの金品を得る。皇室の重要な収入源で、間を取り持つ宦官にも金が落ちる。

都には静かに無為な日々が流れ、その裏で、策謀の網が張り巡らされている。大きく二つの勢力がある。最も危機感を募らせているのが宦官だ。宦官

は元来が皇帝の私的な使用人で、皇室がなくなれば宦官の存在そのものが意味を失う。宦官は、皇帝本人にも、朱全忠にも、宰相の崔胤にも毛嫌いされている。韓建は皇帝に殿後の兵を返し、その指揮権は伝統的に宦官の手の内にあり、宦官の頼みの綱である。第二の勢力は崔胤を中心とする派閥で、多くの官人が属す。宦官は武力を有しているからうかつには動けないが、背後に崔胤との結びつきを強くした朱全忠が控える。第三の勢力は最も弱小な守旧派である。宦官も節度使も排し、皇帝の復権を夢見る忠義の士、理想の王道政治の復活に身を捧げようとする清流派である。

韋荘は心情的には清流派に近いが、どこにも属さずにいる孤独な痴情の人である。朝廷が都に帰ってくれば、何かができるようになるのではとの期待があつたものの、華州にいたときと変るところはない。何もできないと、最後の見極めをいずれしなければならぬとすればそれは辛い。

皇帝も同じような辛さからであろうか酒びたりになる。

十二月。黄巢が入城してから十九回目の冬。同じ季節の同じような朝がく

れば、自ずと古い記憶が呼び戻される。銀犁のいる平康坊にいけずに悶々としていたときと同じ味が腹の内に苦くさせる。あのときもぐずぐずと決断を伸ばすうちに、結局は銀犁を失い、弟たちを死なせてしまった。

藁とともに薄い粥をすすり、鄭郎を連れて官舎を出る。寺の門を潜ると後ろに足音がする。いつもの通り綜である。韋莊は北の宮城に向かい、綜は日によつて方角が違ふ。肩に釣竿がある。薄暗がりに消えていく綜の背を返り見て、

「あれは近頃、怒っているのかい」

鄭郎に尋ねる。

「お気持ちを抑えていらっしやるのでしょうか」

「このような日々にはさぞ苛立つているのだらうな。あれは、安邑坊あたりに  
も、やはりいったりしていいのかい」

「池で糸を垂らしておられます」

「あんな小さな池で何か釣れるかい」

「せいせい目高がいますかどうか」

「虢州の狐潭を偲んでいるのだろうか」

狐潭を発った最後の日に、綜は一匹の魚を釣り上げて追ってきた。まさかそれからこうも長く帰れなくなるとは思っていなかっただろう。

「そなたは西の市で生まれたのだったな」

「妹と食うや食わずの惨めな生い立ちでしたが、あのころの市の賑わいと言ったら、もう夢のようです。ひと晩で大金持ちになったなんて話はさらでした」

「掌を返すようにして、たちまち昔に戻る術でもあればよいのだが」

「お坊ちやまも同じようなことをおっしゃって、そんなことができるのはお狐さましかいないと、祈っておられました」

「あれがお狐さまを祈っているのかい。それは知らなかった」

「お気持ちの遣り場がないからなのでしよう」

綜はお狐さまに最も不熱心だった。鄭郎が言う通りなのだろう。

方々から出てきた人々と大路で合流して皇城へと入っていく。銀犁と最後に別れたあの朝、平康坊を出て、官人の流れと逆の方向に歩いた。官人たちは皇帝が逃げたのを知らずにいつも通りに登城した。あのときの官人と同様に、己は世の動きを知らずに、もはや意味を失ったことをしているのか。

皇城に着くと、昨日と同じく何事もない日が始まり、いつものように何事もなく終わる。これで何の意味があるのかを考えずにいられ、このような日々がこれからもずっと続いていくのならまことに結構である。そうなるはずもない。韋荘はいつもの辛い焦燥感に駆られ、綜が怒りを顕わにせず抑えているのが悲しく思われる。

公務を終え、皇城の門を出ると、風が強く吹き、黒い雲が流れる。

「降られる前に帰れるといいのですが」

鄭郎の言葉に足を早める。土埃が渦を巻き、目を開けているのが難しい。俄に風が冷たくなり、雨が落ち出す。突風に飛ばされそうになり、ばらばらと雹が降る。



官舎に飛び込む。雷が鳴り出す。

濡れた衣類を鄭郎に手伝ってもらって脱いでいると、

「いつも勝手なことばかりしていて、雷に打たれてしまえばよいのです。今日こそは厳しく叱ってやりましょう」

陸氏が林婆さんを相手に話している。このごろは綜は母親に対しても反抗的で、そうなる原因は己にあると韋荘は思う。

しばらくすると、裏の戸があき、

「天気がもう少しもてばもっと釣れたのですがなあ。今日はせつかくよい場所を見つめましたのに」

ひどく暢気そうな声で綜が帰ってくる。

「毎日ふらふらと何をしているのですか。お父上のお仕事のお手伝をなさい。明日からはもう出るの許しませんから」

陸氏の叱責に綜は、

「はあ、まあこんな天気ですからな、今日はこれで家にいるしかありません」

ので、まあ、やるとしますかな」

「その言い方は何ですか」

「はあ」

綜は竿と魚籠を置いて上がろうとすると、

「その汚れた手ではいけません。井戸でよく洗ってきなさい」

綜は魚籠を持ち直して、

「これは井戸端に置いておくから、後で料理してくれ」

林婆さんに言い置いて出ていく。

藹は一人静かに仕事を進めている。焼け残った文書類の修復である。宮中に保管され、焼け焦げてしまった竹やら紙やらから文字を読み取り、一字ずつ写していく。藹の字は誰からも好まれ、丹念に文字を書いて飽くことを知らない藹にぴったりの仕事である。

綜は父の隣に座して手伝いを始める。綜の書も父に似てなかなかのものである。

いつしか屋根を打つ音が静かになり、林婆さんが戸を開けると、雪に変わっている。韋荘も戸口に立ち、空から白雲が降りてきたかのようにあたりを真白に包む雪を眺める。

荒れ果てたこの都も間もなく白い雪に埋め尽くされるだろう。都で起こった悲惨な数々の痕跡も隠れる。何もかも白く美しい雪に消されてしまおうがい。

林婆さんは綜の釣ってきた魚をさばき始め、身の内に寒さが通って、戸を立てて内に入る。

藹は黙々と仕事を続けている。筆写し終わり、墨が乾くのを待っている紙を眺める。弟の筆の跡はいつも気持ちいを和ませてくれる。常に変らぬ弟の書は、李洵も言っていた通り、いま眼前にありながら不思議だ。外で雪が降り積もりつつあることも、いまが唐朝の終焉にさしかかっていることも、ここがかつては繁栄を誇った大唐も都であることも、一切関わりなしに、弟でなければ書けない文字が並んでいる。誰もが何の気なしに筆を持って書け

そうでありながら、弟にしか書けないものだ。

「夔夔」の二文字が目を捉える。意味を忘れて字の形ばかりを見ていた韋荘は、その前後を読む。

旧制京城内金吾暁瞑伝呼以戒行者馬周獻封章始置街鼓俗号夔夔公私便焉  
「旧くは、京城内の金吾の兵士が、暁と宵に、声で往来の者を戒めていた。馬周が提案して、初めて街に太鼓を置くようになった。それを俗に『夔夔』と呼び、公私ともに便利であった」

何十年も前の記憶が呼び戻される。父がまだ健在で長安に住んでいたころ、「ほら、もうすぐ夔夔だ」などと、たまに年寄りたちが言っていた。長安で朝夕に打たれる太鼓を「夔夔」と呼んでいたのは老人だけで、それは幼い韋荘にもわかりやすいよう、太鼓の響きの擬音語のままに話してくれていたのだらうと考えていた。そうではなかった。唐の初めのころは町の人は普通に「夔夔」と呼んでいて、時代が下るにつれ老人の間にだけその呼び方が残ったのだ。

この些細な事実に愛おしさを覚える。藹が写しているこの書物を見なければ、己も「夔夔」の呼び名を忘れたままになっていた。だからと言って、何が困ると言うことはない。いつか唐が減れば、長安に朝夕の太鼓が響くことさえもなくなるだろう。必要がなくなれば太鼓が打たれなくなるだけのこと、それでどうということもない。しかし、忘れられ、消えていくと思うと、ひどく愛おしい。すでに半ば以上は忘れられ、消えてしまった。

朝夕の太鼓は都の人々に様々な感情を呼び起こしてきた。己は、とりわけこの十二月に特別な感情で太鼓を聞いた。銀犁との最後の夜の前に聞いた太鼓、そしてその次の明け方に聞いた太鼓。日一日と状況が悪化する中で、銀犁を想いつつ聞いた太鼓。それ以外にもなおたくさんのことに結びつく太鼓の響きがある。

己ばかりではない。長安にいた人々には、それぞれに特別な意味を持った太鼓の音があった。いずれもごく些細なことだ。過ぎ去れば、忘れられ、誰も見返ることなく、それでどうということもない。「夔夔」の呼び名など誰一

人覚えていなくても何ら不都合でない。しかし、それだけに愛おしくてならない。

都にあつた数々の痕跡が白く美しい雪に埋もれてしまえばよいと思つたのは大変な間違いだった。消えてはならない。

雪と言へば、王元宝の豪勢な夜宴があつた。黄巢が都に入った後の十二月のある雪の日に、武大人が「旧き世にはそのようなこともあつたそうだ」と感慨を込めて語つた。王元宝の夜宴は遠く、武大人の話も旧き世のことだ。

旧き唐を愛したのは叔父の韜。いつか南山の隠居所で市井の詩人たちが残した作品に読みふけていた。それら素朴な詩の真似をして、韋荘は華やかにりし長安の町を詠んだ。

長安二月多香塵　長安の二月、塵さえも香り高く

六街車馬声騾騾　街はどこもかしこも車馬の響き。

家家楼上如花人　家々の楼の上に、花のような人が並び

千枝万枝紅艷新　千枝万枝に紅の花が艶やかに開く。

当時すでに唐の盛時は過去のものになっていた。

この同じ詩を、進士及第の後、婺州に向けて長安を発つ際に春琴に聞かせた。昔を知る者がいるから昔を取り戻そうとする力が生まれると、春琴は言った。それもすでに昔だ。

雪が埋めずとも、唐代に生きた人間の心はずでに大方は消え去った。「皜皜」を聞いた人々の思いは跡形もなくなっていく。

いま己には為さねばならないことがある。都にいるいまだから、為しておかねばならないことがあると、不意に思う。突然に思ったことでありながら、それははつきりと具体的な姿を見せて現れる。

お上のためになるかどうか、民のためになるかどうか、春琴のためになるかどうか、それはわからない。しかし、この一つは己がしなければいけないことだ。思いついた瞬間に決意を固める。

その日を境にして、宮中に残る書物に片端から目を通し、都の寺社を巡って埋もれる書物を掘り起こす。ひたすら詩を集める。世の動きも、家の中の

ことも、全て忘れて没頭する。

幸いにも節度使間の均衡が保たれ、翌光化三（九〇〇）年七月、百五十人の詩、三百首を選んで編んだ詩集が成る。かつて姚合が当時までの唐人の詩を集めた『極玄集』の後を継ぐとして『又玄集』と名づける。自ら序文を付し、藹が浄書し、一本を宮中におさめ、一本を青童寺におさめる。蟻光が言う牡丹の常住する心に似て、『又玄集』が唐人の心を後世に伝え、新たな花を咲かせるよすがとなればと願う。

**都**の奇妙な平穩はほぼ一年で終焉を迎える。

崔胤が朝廷に復帰する。宦官と崔胤の対立が先鋭化し不測の事態が起こるのを懸念した皇帝と、中庸を得た宰相の王搏（おう はく）、そして清流派に、宦官の思惑も一致して、崔胤は二月に宰相から引きずり降ろされ都の外に放逐されていた。崔胤は朱全忠に手紙を送り、朱全忠は崔胤を宰相に復帰させ



ると朝廷を脅し、皇帝に抗する術はなかった。

崔胤は都に戻ると、朱全忠の全面的な支援を受け、王搏とそれに結託した宦官の首謀者を都から追放し、道の途中において自尽させる。崔胤と宦官との対立は、相手を殺さねば自分が殺されるとの最終局面へと突き進まねばおさまらない情勢となる。

成都から王宗儒が王建の使者として上京する。王建が顧彦暉を滅ぼして以降、朝廷との間にあった若干のわだかまりがほどけ、皇帝は王建に東川信武軍兩道都指揮制置等使の称を授けた。名目上のものであるが、その答礼に、王宗儒は蜀の国の種々の産物を携えてきたのである。

皇帝は王宗儒を引見し、宣諭副使としてかつて蜀にいった韋莊も並ぶ。二年振りに見る王宗儒は皇帝の前でも臆することなく振る舞う。対する皇帝の言辞ははなはだ不明瞭、唐突に笑いもする。酒毒に害されているのは隠しよ  
うがない。痛ましさに胸が潰れる。

儀式が終わってその日の用はすみ、官舎に帰ろうとすると、鄭郎が寄って

きて小さな紙片を差し出す。小雁塔の北東隅で待つと書いてある。名は記されずとも、見覚えのある東呉くんの手だ。鄭郎は口を押さえ、何も言わぬよう止める。

荒廃した都にあつて、小雁塔は以前の幾層倍も目立つ。初冬の晴天に今日も美しく聳え、皇城からそこまで真直ぐに歩いていける。塔を見上げれば、それは昔のまま、かつての日々が偲ばれる。もしも塔に登つて下を眺めるならば、昔のままのものは恐らくほとんど何もない。だから小雁塔には長らく登っていない。

深く笠を被った男がうずくまっている。背に落ちる影の動きに、わずかに顔を上げる。

「これでお会いすることもあるまいと思い、お呼びしました」

東呉くんとは、富平の夜明け以来。

「遠くへでもいかれるのですか」

東呉くんは笠の下から周囲を見て、声を一段と低くし、

「太原です」

言葉はそれで切れ、富平からの日々を思う。東呉くんにも多くのことがあったのだろう。

東呉くんの隣に座る。かつてここにもあった建物の礎石。わずかに見える東呉くんの横顔は青褪めている。

「晋王さまのところへとは、それは宰相どこの御用でしょうか」

そうではあるまいと思いつつも、話を継ぐため尋ねる。

晋王とは李克用。太原は李克用の本拠地だ。

「宰相どこのには知られぬよう、いまから都を發ちます」

「何があつたのですか」

「いろいろ考えた末です」

重い声に、詳細は聞くまでもない。

「太原からのお誘いですか」

「張承業さまが呼んでくださるのです」

張承業は李克用に篤く信頼される宦官。太原に滞在している。

「あちらでは何を」

「我が唐朝になお未来があると信じたいのです。あのときに渭水を渡って戻られたのが悔やまれるのです」

「華州にいかねば違っていたでしょうか」

皇帝が華州に入ってからの日々に、責任の一半が己にもない訳ではない。

無位無官の東呉くんに対し、己は左拾遺の職まで授けられた。

それでいながら何をしてきたのか。唐朝になお未来があると信じていようか。『又玄集』を編み終わり、お上のためにも、民のためにも、春琴のためにも何もしていない己が残った。朝廷内の暗闘は、自身も渦中にいるはずだが、紗を通し見るかのような印象しか持ち得ない。『又玄集』に注いだ情熱は消え、新たに事を起こす気力は湧いてこない。

東呉くんに問うよりも自分を責めねばならない。

「晋王さまはあのときの勢いを失っておられます。その理由はおわかりでし

ようか」

「東方で朱全忠どのに圧倒されたからでしょう」

「それは結果です。晋王さまは他の人の及ばぬ忠義のお心をお持ちです。しかし、まことに遺憾ながら、民を慈しむことを十分に御存知ではありません。戦に勝ち、土地を広げても、人を得られずにいます。民を育めば晋王さまは根元から強くなられましょうに、それをなさらないために、朱全忠どのに遅れをとりました。張承業さまが呼んでくださいましたのは、そのためです。遠い遠い回り道のようにですが、太原の地に善政を敷くことが唐の再興に繋がると信じたいのです」

「よきお考えです」

「まことにそう思われますか」

「最も近道であるのかも知れません。太原の民にとって待ち望むものでしょう」

「この困難な時期に都を去るのは唐朝を裏切る行為と言われれば否定しよう

がありません。どれほど遠回りであり、いかに些細なことであっても、残りの人生を使ってみたいのです」

「悩み抜かれた末の選択でありましょう。必ず正しい結果を生むと信じます」  
「ありがとうございます」

東呉くんは韋荘の手を取り、

「一緒に参りませんか」

目と目が合い、すぐに地面に視線を落とす、

「長安の壁を潜って外に出ましたときに、西と東に別れました。今回も」

「やはり、そうですね」

東呉くんの誘いを断る理由はない。迷いが無い訳ではない。壁の下の穴を出たときもそうだった。

「これ以上は申しません」

東呉くんはあのとときも成都に同行しない理由を問いはしなかった。

「御成功を祈ります」

「人に気づかれぬよう、すぐに城門を出ます」

東呉くんは立ち、背を向けて歩き出す。

これは今生の別れであるのか。十分な言葉を尽くしていない。それでも深い友情によつて結ばれていると信じたい。

去りゆく東呉くんの背に、以前と同じく、孟子の言葉を贈る。

居天下之広居 広々とした天下にいて

立天下之正位 天下の正しい位置に立つて

行天下之大道 天下の大いなる道を実践する。

東呉くんも己も同じく大道を歩んでいきたい。そう信じ続けるのは難しくとも。

小雁塔の長い影を踏んで寺の門を出る。鄭郎がすつと出てきて後ろに従う。無言のまま官舎の口にまでくると、林婆さんが立っている。

「先ほどからお客さまがお待ちでございます」

成都の商人だと言う。訝しく思いながら戻ると、中で待っていたのは、宮

中で見たのとは服装を一変させた王宗儒だ。

なりは確かに商人のものだが、武張った容貌とはなはだ不釣合い。狭い官舎の部屋で向き合くと、若い武将の存在感に圧倒される。唐の朝廷に、これほどの力強さを周囲に発散させる者はいない。

目を細め、王宗儒に劉赤虎の昔の姿を重ねる。

王宗儒は挨拶もそこそこに単刀直入に切り出す。

「本日は義父の望みを申し上げるために参上いたしました。掌書記の座を御用意いたしております。某と御同道いただければ最も幸い。それが叶わず、何時になろうとも、お待ちすると申しております」

義父とは王建。掌書記は朝廷で言えば宰相に当る。

意味を掴みかねていると、王宗儒は畳み掛けるようにして、

「かつて劉備がした通りに、義父自身ここに参って、三顧の礼を尽すべきと存じます。某如きが代理では義父の思いの万分の一も伝えられません。この無骨者、言葉も選べません。ただ頭を下げるのみです」



王宗儒は床に平伏する。

これは王建からの招聘であるとようやく理解する。

「唐の小官に過ぎぬこの私を」

「義父の夢は、秦婦の嘆きを聞くことのない国を作ること。そのためには是非ともお力を頂戴したい。武士と武士の間ならば、剣に賭けてこの場で御返事を迫るところです。性急な真似をしてはならぬと義父に厳しく戒められました。申すことはこれで尽きました。失礼いたします」

唐突に立ち上がる。

王宗儒を止めようとして、王建の分厚い手の記憶が甦る。ここで、王宗儒を呼び止めれば返事は一つしかなくなる。

王宗儒の背を見送る。先ほどの東呉くんの背が重なる。

「よいのでしょうか」

弟が言う。

「丁重にお送りしてくれ」

王宗儒が帰ると、綜が怒ったような顔でいる。

「いまこられたあの方、私をお待ちになつてゐる間に、何か話をしたのかい」  
王宗儒がたつたいま言い置いていったことがすでに信じられなくなつてい  
る。

綜は表情を変え、

「商人という割には妙に怖そうに見えましたが、話してみると案外、感じがよくて、蘭おじさんがお助けになつた劉赤虎さんのことや、赤虎亭のことなどを、いろいろと聞かせてくださいました」

「そうなのかい」

「赤虎亭に一度きてみてはどうかとおっしゃっていました」

「赤虎亭のある漢州、あれはよい町だ」

二度とくることはあるまいと思つた町の風光が脳裏に浮かぶ。

「お誘いを受けるのですか」

「赤虎亭は素晴らしい宿だ。またいつてみたいものだ」

「お断りをするのなら、すぐにすべきではありませんかな」

綜の言う通り、いますぐに断る以外にない話だ。己は唐の官人、韋家の末裔として、晩節を汚すようなことは決してしたくない。朝廷が困難に時期に、よい誘いを渡りに船とばかりに都を去るのはいかにも卑劣だ。

東呉くんの誘いに従わずして王宗儒の話に応じるなどあり得ない。それに、王建の思惑は測りようがない。

しかし、綜に向かつては、

「即答はあまりに不躰ではないかい」

伯父の言葉に怒った顔に戻る。

その日はそのままになり、翌日も翌々日も公務に紛らわして敢えて断りを入れぬうちに、王宗儒は都を去ったと知れる。

東呉くんと王宗儒、己は時を失ったのか。いつもの焦燥感に襲われる。

## 十一月、破局が訪れる。

奇妙な男の叫びに、筆を手にしたまま立ち上がる。

いまのは何であったのか。

皇城の役所のいつも部屋で、窓より外を見る。動くものは目に入らない。

耳に聞こえた叫びが繰り返される。

どこから聞こえるのか。一つでなく、様々な方向からも次々に聞こえる。

何やらわめき、何やら駆け回っている。

何の異変か。部屋の人々とともに外に出る。あちこちの建物からも人が出てくる。

一人の男が走ってくる。服を乱した異様な姿だ。やたらに大きな声を発しているのだが、意味ある言葉としては聞き取れない。男はこちらにはこないで走り去る。

違う男がきて、言葉が聞き取れる。

「太極殿に集まれ」

反対からも人がきて、

「早くだ」

呼び止めて、

「何事か」

尋ねるが、聞かれても、同じ叫びを続けて駆けていく。

言われた通りにすべきものなのか、当惑していると、がちやがちやと剣を鳴らして兵士の一団がくる。

「いつまでぐずぐずしているのだ。さっさと太極殿にいけ」

厳しく駆り立てられ、仕方なくぞろぞろと動く。訳を尋ねても怒鳴り返される。

太極殿前の広場に人々が集まる。何事であろうかなどと言いつ合っていると、階段より上がれとの命令。中に入って朝儀と同じ順に並ぶ。

官人が去って開いた空間を、足音高く兵士が埋める。人々ははつきりと恐怖を覚える。世に言う甘露の変の二の舞か。それは崔胤の父が若いころに遭

遇した惨劇。ときの皇帝は宦官の横暴を挫こうと、宰相とともに宦官を殺戮する計画を立て、いよいよ実行の日、宦官に先手を打たれた。皇帝は拘禁され、宮中の門は鎖され、内にあった官人は皆殺しとなった。死者は千人とも二千人とも言われた。

「後ろを見るな」

兵士の動きを見ていた人々の頭上に怒声が轟く。

太極殿の奥の扉が開く。崔胤以下の高官が入ってくる。

崔胤がこの事態を掌握しているのなら、己は生きられる。薄明かりに見る崔胤の様子はそうではないようだ。

鎧を着込んだ男たちが後に続く。その先頭は劉季述（りゅう きしゅつ）だ。禁軍の指揮官にして、崔胤の最大の敵。崔胤は敗れたのだ。

崔胤たちは先に入っていた百官の前に一列に並ぶ。劉季述は全体を睨みつけるように横に立つ。その剣の動きに促されて崔胤が口を開く。

「皆に集まってもらったのは他でもない、ここに用意した連名状に署名をし

てもらいたい。我等はすでに書いた。百官の総意としてこれをお上に御覧いただく。そう言うことだ」

いかにも不承不承と言った風だ。

小吏が机を前に並べる。上に長い書状が広げられ、硯と筆が何箇所かに据えられる。

「部署ごとに名を記す場所が設けてある。迅速にやってほしい」

「何の連名状でしょうか」

誰かが問う。

「最初に書いてある通りだ」

崔胤は投げやりに言う。

問いたただす声が他からも上がる。

「騒ぐな」

劉季述が怒鳴る。それでも人々のざわめきが収まらないので、足を踏み鳴らし、長い剣を抜いてひと振りする。

「聞きたければ教えてやろう。一言に縮めて言えばだ、皇太子さまに監国になつていただくのだ」

宦官特有の甲高い声に、

「なぜだ」

との声。

監国とは皇帝代行に相当する。監国になれば、日を置かずして皇帝として即位する例が多い。

劉季述は鼻を鳴らして笑う。

「わかりきったこと。問うまでもあるまい。昏迷な天子を廃し、明敏な天子を戴くのは古からの定めだ。社稷の大計を諸君らとともに立てる。我が唐朝を救うためだ。歴史に残るこの連名状に名を記せるのは光栄であろう」

なお続くさわめきに、劉季述は外の兵士を上らせる。壁に沿って剣を手にした兵士が並び、百官を睨みつける。

静かに署名が始まる。



劉季述は、

「訳を知りたければいまま少し聞かせてやろうかな。今朝のことだ、定時になつても、奥の門は閉ざされたままであった。異変があつたに相違あるまいと、宰相どこの許可を得て門に向いた。守る者もおらず、開けて通ると、人々は呆然自失のありさま。問えば、昨日、お上は禁苑で狩を催され、獲物を前に、御酒をしたたかに召された。何のはずみであつたものか、突如、劍を手に立ち上がられると、見境なく振り回された。近くいた宦官、侍女が血まみれになって逃げた。『佳き獲物が増えた』と、死んだ者も、まだ半死半生の者も、狩で獲た物と一緒に積み上げるようお命じになった。お上はすこぶる御満悦の体で、さらにお酒をお召しになり、そのまま酔いつぶれてしまわれた。かような次第だ。お上はいまも乞巧楼でお休みされている。おのおの方、いかが思われるかな、お上がこのようであつて天下が治まりましようか」

全員が署名を終えると、

「決してここを動かぬ。動けば命はない」

劉季述はそう言い置き、崔胤らを引き連れて出て行く。

百官は、睨みつける兵士に囲まれて取り残される。この太極殿の床がいつ赤い血で染まるのか、劉季述が言った獲物の山のように自分たちも死骸になってここに積まれるのか、その恐怖と戦いながら立っているしかない。

ここで死ぬくらいならば、東呉くんについていくか、王宗儒の誘いに応じるかしていればよかったのではないか。唐の官人としてはここで死ぬのが定めであるのなら、皇帝のため、民のため、そして春琴のためにできることはなかったのも、止むを得ぬ次第と納得するのか。

長い時間の後に、

「下がってよい」

突然の号令で、人々は解放される。

もとい役所に引き上げ、宮中で一体何が起こっているのかわからぬまま、「ともあれ命を保って帰れるのを喜ぼうではないか」と、同僚の言葉に促され、他の者たちとともに皇城を後にする。

「酒はどうにもならぬものです」

太極殿での出来事を弟たちに告げると、押し黙った重苦しさをほぐそうとしてか、林婆さんが昔話を始める。

長安は西の市のある親父、普段はひどく大人しいが、酒が入るとがらりと変わる。客を相手に刃傷沙汰に及び、

「悪いのは誰が見ても客の方。捕まったのは親父さんだけ。なぜか杖打ち五十と決まり、それでも袖の下を渡せば手加減してくれるものを、喧嘩相手の客がたんまり積んだのでしよう、力任せの滅多打ち、死人に口なしと、親父さんは殺されてしまいました。妻や幼い子もいたのですが、哀れなものでした。酒で間違いをしてしまうのは、下々もお上も同じなのでしょう」

王朝の破滅の淵に立つ皇帝と、林婆さんの話の親父と、どちらが同情に値しようか。親爺が殺されその妻や子は路頭に迷い、王朝が倒れば臣下は何かも失う。太極殿でまず思うべきだったのは、我が一家のことではなかったのか。お上のこと、民のこと、死んだ春琴よりも、ここに目の前の人々を

考えるべきではなかったのか。何もかも失う時がすぐそこに迫っているのだ。己はどうすべきか。春琴への情ばかりを大事にしようとしてはいけないのか。ここにいる人々を路頭に迷わせる選択はできない。春琴を喪った直後に、春琴なしでこの一家を保っていけるのかと、強い不安を抱いた。それへの答えを見出す努力をしないままに今日に至った。

これから己はどうするのか。猶予はない。太極殿で殺されていれば、時すでに遅しと終わっていた。明日が最後の日になるかも知れない。

「酒のために思慮を失った親父のようであってはなるまい。今日は幸いにも殺されずにすんだ。明日ももし無事であるのなら、我等はどうしたらよいのか。狐潭の小屋を発ち、洛陽において窮したとき、どうしたらよいか皆に尋ねた。揚州、潤州、杭州、婺州、華州、そして長安と転々とし、ここに再び窮するに至った。ならばまた皆に尋ねたい、我等はこれよりどうするのか、思うところを率直に話してはくれまいか」

弟から順に顔を見ていくと、綜が口を開く。

「洛陽では妹が最初に答え、僕が二番目でした。いま妹はいません。あのとき僕は、母と妹を守る力は僕にはないから、一緒にいてほしいと楊胆に頼みました。それがよかったのか、いまもわからずにいます。楊胆に頼んだりしなければ、楊胆は死んだりせずにもすんだかも知れません。伯父上に申し上げたいのは、どうしたらよいのかなどと僕には聞かないでくださいと言うことです。それともう一つ、どうせ背負えるはずのない荷なのです、肩に荷おうなどもうなさらないでください。蘭おじさんが言っていた通り、そのような馬鹿な真似はもうやめていただけませんか。誰のためにもならないのですからな」

綜は蘭の口調を真似る。

陸氏が息子の膝を叩き、

「その口のききかたは何ですか」

「率直にと、伯父上がおっしゃる通りにしたまでです」

韋荘は陸氏を止め、

「綜くんを叱らないでください。綜くんの言う通りです。重過ぎる荷を無理に荷おうとしてきました。確かにそれは馬鹿なことでした。造物主がこの私を生んだ理由があると信じたくてそのようにしてきたのです。しかし、胆や春琴はその犠牲となったのです」

「もうおやめになったらよいのです。それだけのことです。違いますか」  
綜が言い、陸氏は、

「偉そうに言うそなたは何なのですか。釣をしているだけではありませんか。十分によい歳になったそなたがこの一家を支えなければならぬのに、大きな口を叩くだけで、何をしているのですか」

「僕の本当の願いは、伯父上と竿を並べて釣をすることです。何も釣れなければ、飢え死にする。それでよいではありませんか」

「そなた一人が勝手にそうなさい」

綜が言うのは正しいのだろう。六十五歳にもなった己に、まだ何かができるようなどと言う無茶な思い込みを捨て去り、飢え死にするのが最もふさわし

い。己一人ならそれで少しも構わない。

陸氏は息子を叱り、

「この子に何も任せられないのを母として情けなく思います。私が知恵を絞る他ないのでしよう。と申しても、女の知恵はたかが知れています。思い付くのは、我が里にお越しいただくくらいのことです。風の便りに聞けば、里はさほど変らぬ様子です。辺鄙な山の中の有難さです。いくら小さな村でも、この人数くらいなら、身を収める場所の御用意もできましょう」

陸氏の提案は、これまで全く考えたこともなかったが、聞いてみれば、最も望ましいくらいに有難い話だ。黄巢支配下の長安から蘭と二人で帰るのが遅れていたならば、楊胆の小屋に残っていた人々は、食物が底をつく前に陸氏の里へと向かっていたことだろう。そこに戻る訳だ。山中の平穏な暮らしは老齡の己には何よりだ。

しかし、己にもささやかな意地がまだある。楊胆の小屋から皆を洛陽に連れるときに、若干のためらいがあった。この選択を悔いることがないよう努

めるのだと決意して、そのためらいを振り払った。まだ努め続けていたい。

「よいお話です。勿体ないくらい有難く聞こえます。しかし、陸の皆さまにまで御迷惑はかけられません。退隱するのであれば、むしろ杭州に行く方がよいでしょう。そなたはどう思うかい」

陸氏の里の話が魅力的であるだけに、急いで話を鄭郎に向ける。

杭州には蘭の店があり、錢鏐は年々勢いを増し、近くの婺州に貫休がいる。

杭州でなら、己にも何かやれることがあるのかも知れない。

「旦那さまがいらつしやれば、義父はきつと喜んでお迎えいたしますよう」

鄭郎はとまどいながら言う。

「向こうでは范完が死に、伍伝もかなりの年齢だ。私らは迷惑でも、そなたがいくのは伝を安心させるだろう」

「あつしが杭州にいきましても、お店では出る幕はありませんでしょう。范完さまには立派な跡継ぎがいらつしやいましたし、義父も養子を迎えました。あつしは旦那さまにお仕えし続けるだけです」



「十分過ぎることをしてもらった。杭州にいったら、好きにしてもらいたい」

「好きにしてよろしければ、旦那さまにお仕えするのを選びます」

鄭郎は常にこのように言う。

杭州の風光が心に甦ってくる。

「そなたはどうだい、杭州はよいところだ、いってみるか」

林婆さんに尋ねる。

「長安から出たことがないのが何よりの自慢だったこの婆、以前であれば、せつかくですがとお断りするところですが、一度華州にいつてしまいましたから、唯一の自慢の種もなくなりました。この上は、お見捨てでなければ、どこへでもついてまいります」

「そうかい、有難い話だ。ならば、西湖でそなたとまた竿を並べようか」  
綜に向かって言う。

弟が唐突に割り込んでくる。

「なぜ杭州なのですか。成都ではないのですか」

勃然と言って、兄を見つめる。

「杭州ではいけないのかい」

「いけないとは申しません。しかし、成都有るではありませんか」

「成都会かい」

そのままにしてしまった王宗儒の誘いがある。

「そうです」

「成都会いくのがよいと思うのかい」

弟は首を傾げ、

「兄上が最初の貢挙で不合格になって帰ってこられたとき、落とした連中が悪いと私は腹を立てました。洛陽に入る前の晩に、『秦婦吟』をよく覚えるようにと兄上は私に言われました。南山での重陽の節句のありさまを最期まで覚えていたのは私だろうと、叔父上はおっしゃいました。あのときに、仏蕃上人さまから王建さまのことを初めて聞きました。ですから、王建さまこそは、兄上を知る人ではありませんか。違うのですか」

弟にしては珍しく勢い込んで言葉を並べる。

「そうなのかい。どうしてそう思うのかい」

弟は俄に困り切った顔になり、

「わかりません」

ぼそりと言う。

王建に握られた手の感触が戻ってくる。

しかし、成都に行くことにはないように思う。東呉くんの誘いを断ったのだ。忠義無類の李克用のところでなくてどうして王建なのか。錢鏐の方がまだあり得るだろう。

「洛陽では蘭くんもいた。蘭くんがもしもここにいればどう言うだろうか。風に任せると言っていたその風は、いまだちらへと吹いているのだろうか。蘭くんの店のある杭州だろうか」

皆の顔を見ていくと、綜が憤然と睨み返し、

「あのときは彩霞ねえさんもいました。ねえさんのことは考えないのですか

な」

突き刺ささるような痛みを胸に覚える。

そっだ彩霞がいた。いつも彩霞のことを忘れそうになる。

「あれにも聞きたい。あれが教えてくれるのなら、あれの言う通りにしたい」  
婺州を出るときにとうとう会えなかった。貫休の寺を舟が離れたとき、もしも彩霞が現れていたなら、長安にくることはなかったのかも知れない。

綜はなお怒った顔のまま、

「で、いろいろな人に聞いてですな、伯父上御自身はどう考えておられるのですかな」

静かにうなずき、

「私がどう考えているのか、本当はそれを言わなければならぬ。そうは思っているのだが、私の考えはまだない。そう聞けば、腹も立つだろう。皆が言ってくれたそれぞれが私の心を動かす。だから蘭くんにも聞いてみたい。蘭くんが劉赤虎を助けた。劉赤虎が親代わりになって王宗儒さまを育てた。

彩霞にも聞いてみたい。彩霞が慍に書いた手紙がなければ、成都に誘われる話などはそもそも生まれつきはしなかつた」

「それは、成都にいかれる気があると言うことですか。賊王八は、秦婦吟の秀才を飾り物にしようと考えているだけです。いけばますます御自身を苦しめることになりましょう。やめたらよいではありませんか」

「成都に行く気があるのかどうか、それはわからない」

「さつさと決めればよいではありませんか。明日ももし無事であるのなら、伯父上はたつたいま私たちにおっしゃったのではなかつたですか。悠長に構えている時間などないはずです」

「その通りだ。為すのはこれと選んでも、情勢はそれを許さないかも知れない。己の道を選ぶ最後の機会だろうから、決めた限りは、為せるものであつてほしいと思う」

「ならば、早く決めてください」

綜は気色ばむ。

しかし、

「蘭くんにも聞きたい。彩霞にも問わねばならない」

そう言って、事の決定はいま少し先へと延ばされる。

次の日、皇太子が即位する儀式に並ぶ用意をして待つようにとの指示が回り、宮中の事情が少しく聞こえる。

劉季述は連名状を携えて宣化門より入って思政殿に陣取った。驚き騒ぐ宮人を兵士が斬り、逃げ惑う女たちの悲鳴で皇帝は目覚めた。乞巧楼から出ようとしたところで劉季述に身柄を捕獲された。

皇后が思政殿に赴き、「お上を驚かされませんように」と劉季述を拝した。「酔いが一向に醒めぬ御様子だ。水でも差し上げるがよろしかろう」。劉季述はせせら笑った。「全てはそなたの度量にかかっております」。皇后は哀願した。

水を飲まされた皇帝の前に連名状が差し出された。「朕はいかにしたらよいのか」「東宮にお出ましいただきましようか」「朕は殺されるのか」。劉季述は

大笑した。「某はお上が御存知の通りの忠臣にござります」。皇后は「その言葉に間違いないと誓えましようや」「むろんです」「お上のお命に関わることは一切しないと、天の神、地の神に誓われるのなら、伝国の璽を預けましよう」。劉季述は皇后を拝し、皇帝のしるしである伝国の璽を受け取った。皇帝は少陽院に送られた。

皇太子の即位の儀はまことに貧弱で、末席に連なった韋莊は、唐朝の衰えをまざまざと感じる。劉季述は、連名状に名を記した者の爵秩を増し、韋莊も幾許かの絹を得る。

先帝が入った少陽院の門は鎖で嚴重に括られ、塀の穴を通して、わずかな食物が中に送られる。先帝のお気に入りの宮女、宦官、方士、道士が、お上を惑わした罪で夜ごと処刑される。翌日、その死骸を載せた車が都大路を一巡する。車は十両を連ねるのを定めとし、その数を満たすだけの罪人が毎日用意される。

劉季述としては、崔胤こそを最も血祭に挙げたいのだが、後ろに控える朱

全忠が恐ろしい。養子の劉季度を朱全忠のもとに送り懐柔工作を図る。朱全忠はお上に不忠を働いたとして劉季度を拘禁し、代わって李振を都に送り込む。李振は朱全忠を支える官僚の長で、そのもとに慍はいったはずだが、慍については何も聞こえてこない。李振は新皇帝の朝廷を厳しく圧迫する。

ここで劉季述の頼みとするのは李茂貞である。しかし、皇帝を取り替える荒業には李茂貞もおいそれとは同調できず、劉季述は孤立する。

年が改まって光化四（九〇二）年の正月、安福門外で、劉季述の右腕とされる王仲先（おう ちゅうせん）が殺される。斬った男は首を携えて少陽院へと走り、「逆賊は誅されました。兵士はお上のお出ましを待ち望んでおります」。門を叩いて叫ぶ。皇后が首実検をし、先の皇帝が門外に立つ。禁軍はその命令に従い、劉季述は敗れ、皇帝は復位する。

李振の支援を得た崔胤が勝利したのだ。

一連の騒動がようやくひとまず収まると、白々とした気分だけが残る。皇帝の地位が揺らぎ、己も死の危険に確かにさらされたのだが、重大な事件が



起こったとの実感が無い。林婆さんが話した酔っぱらい親父の事件と軽重の差がさほどないようにさえ思える。

何事も虚しいようであり、いつもの焦燥感があり、時はすでに失われたとの諦めもあり、また最後の決断をするのならいさかかの遺漏もあつてはならぬとの思いもある。それらが縋い交ぜとなつて、表面上はただの優柔不断のままに日が過ぎ去っていく。

**春**のある日、杭州からきた僧の訪問を受ける。青竜寺に用事があり、そのついでに手紙を託されてきたと言う。手紙を書いたのは范完の息子で、伍伝が暮れに死んだとある。事実を告げるだけの文面に、杭州にいく話はほぼなくなつたと感じる。

蘭の世話になり続けてはいけなさと決意したのは、遠く揚州を出るときだった。蘭は日本にいったままだ。店は范完と伍伝に譲られ、さらにその息子

たちの代になった。いまさら主人面をしていくのは向こうにとって迷惑に違いない。

翌日の公休日に鄭郎を連れて東に向かう。

崩れた門の前に立ち、

「今日が入ってみよう」

わざわざ口にして中へと歩む。

平康坊。春琴ときたときは数軒ばかり残っていた南曲の店も消え、ここが遊里であったのを示すものは何も残っていない。北曲に一軒だけあった檻樓小屋もなく、その老婆がいなければ、昔を尋ねる相手もない。

「全ては夢か幻か」

月並みではあってもそれが実感だ。昔の平康坊の姿は己の記憶にしかない。「良くも悪くもなくて、これが人の世のごく普通のありさまなのでしょう」

鄭郎は達観したように言う。

「普通か。この唐土にこの程度の廃墟ならいくらでもあろう。私も数多くそ

のような場所を見てきた。その度、ことに心を動かしてはいられない。しかし、それでもここに立てば、ここにしかなかったものが思われ、ここでしかない思いに沈んでいくのを如何ともできない」

だから、それを避けて平康坊に足を踏み入れないようにしてきたのだ。

「生きているから廃墟を見ねばならぬのでしよう。早くに死んだ者はまだしも幸せだったと、戦で斃れた仲間を見てそう思ったものです。死人はもう死ぬのを怖がったりしないですみますから」

「生きる者は苦悩を免れない。だからと言って、不幸なままに死んだ者が哀れではないとは言えない」

「死んだ者は、たぶん有難いお坊さま方が救ってくださいませよう」

「我等には如何ともし難いものだから、そう思う他はないからかい」

「お坊さま方に本当にできるかどうか、あつしは勿論知りません。そうであつてほしいと願うだけです。不幸にも生きている者の方は、誰が救えると思いませんし、ここに昔はいて、心ならずも他所に流れていった女もいます

よう。その女たちには、生きている限りは不幸が続きましょうか」

「都を離れていた間、そなたはここに帰ってきたいと思っていたかい」

「妹に会いたいとずっと思っていました。いまに思えば虚しい願いだったのですが、虚しいかどうかは、都に帰ってこなければわかりませんでした」

「そうだったな」

「その結果、いまは虚しい願いを抱くことなくすんでいます」

「遠く離れた者にはやはり不幸が大きいのかい」

「誰が大きいと言うこともないでしょう。比べても意味がないほどにどれも大きいに違いありません。寂し過ぎる話ですが」

平康坊を長く見るのは辛く、道の順序で通る東の市も一瞥しただけで十分で、安昌坊にいつて、お狐さまの祠の前に立つ。綜や鄭郎や林婆さんが時折きては供え物をしている。

楊胆が祠を再建してからの八年余りが経った。虢州の莊園を復活させたいと、お狐さまに幾度となく祈った。それは叶わずにいるが、今日まで、己に

は確かにお狐さまの御加護があつたのだろう。そうでなければこの時代にくうして生きていられるはずがない。莊園復活の望みが断たれたままであるのは、お狐さまの力が及ばないのではなく己のせいだ。祈るよりは詫びねばならない。

祠の内にあるお狐さまの像を思い浮かべ、頭を垂れていると、幻影が現れ出てくる。遠いあの日と同じく、祠の内より阿枉が、

「旦那さま、よくぞ御無事で」

若い姿のまま、老いた韋莊の前に立つ。

念爾辛勤歳已深　長い年月の苦勞の間にもおまえを思ってきた

乱離相失又相尋　世の乱れに離れ離れになって、また尋ね会えた。

他年待我門如市　ほら、もう何年もすればここも門前市をなすばかり

に繁盛し

報爾千金与万金　おまえにもたくさんの金をあげられるだろう。

言い訳のように阿枉に詩を聞かせる。

「都も元通りになっていく。おまえも幸せになれる」

詩に示した通りに繁栄を取り戻した店を指差そうとすると、半ば崩れた倉があるだけ、阿枉の姿はどこにもない。

長安寂寂今何有　長安は寂寂として今は何があるのでしょうか

廃市荒街麦苗秀　廃れた市に荒れた街、草が伸びるばかりです。

このように歌った『秦婦吟』よりもいまの長安は寂しい。

池の縁を歩む。以前に淑娥が植えた草がまた伸び出してきている。

「確かに春だな」

屈んで、これから咲くであろう花を思う。

「お嬢さまのお心がここに残っているのですよう」

「そう思いたいものだ」

花の心は常住すると蟻光は言った。淑娥の心はここにもあり、荊州にもある。

春琴の心はどうなのか。春琴の花を咲かせたいと、蟻光の前で思った。春

琴のために何かできないかと考え続けて、何もないと見極めるのが辛く今日まで時を延ばした。春琴のためにと考えるだけでなく、一家の者について考えねばならないと思いつつも、それが何であるのか決めずにきた。

結局は絶望しかないのか。そうではないのかも知れない。この草にそう思い始める。

淑娥から春琴へ、春琴から銀犁へ、銀犁から阿枉へと、心が動いていくと、「妹はなぜ命を惜しまずに旦那さまにお仕えしていたのか、旦那さまはその訳をどのようにお考えでしょうか」

鄭郎が問いかける。

「それは不思議なことだった。いま改めて考えてみて、確かな訳はわからない。情けないこのような私であるのに」

阿枉だけではない。楊爺が仕えてくれるのが不思議だった。どうして楊爺ほどの男が己に尽くしてくれたのか。

「まさにそこなのでしょう。旦那さまが他の人とそこが違うからなのでしょう

う

「情けないところがかい」

「旦那さま以外の方は、あつしの妹のような者にまでは気を配ってくださいません。男の中の男と仲間に褒められる人間をたくさん見てきました。そんな連中こそ、妹たちにとっては最も恐ろしいのです。旦那さまのお優しさに触れることのできる女は、悲しいことに、この世ではごく稀です」

「優しいのではない。弱いだけだ。阿枉に何もしてやれなかった」

「そのようにいまも思っていただけで妹は幸せでした」

「何もしてやれなかった。残念でならない」

「旦那さまのお優しさを待つ者がどこかに必ずいるとあつしは思っています」

「私はこれまでに何もできなかった。それでどうして待つのかい。この時代、力のない者は不幸に死ぬだけだ」

「何を見ても、天の定めだと決め、心を動かすまいとあつしはしてきました。そうしなければ辛すぎるからです」



「私も同じように思う」

「それでは不幸な者は救われません」

「救う術がない」

「あつしは思うのです、旦那さまには旦那さまでなければできないことがあ  
るはずなのです」

「私にかい」

「そうです」

鄭郎は普段に似ない熱を帯びた物言いをする。

「いまま少し考えてみよう」

話を切り、安邑坊を出てさらに東に歩む。

青竜寺の大門は鎖され、裏に回って小さな潜り戸を叩く。寺にいまも残る  
のは蟻光とわずかな僧侶だけ。広い境内は荒れが目立ち、牡丹の庭だけが昔  
ながらの姿に近い。

蟻光は秋から再び病み、今日はまだしもいくらか気分が良いと、弟子に支

えられて体を斜めに起こし、韋莊を迎える。

「牡丹には立派に蕾があります。花が開くころには御全快でしょう」

見舞いを言うと、蟻光の震える唇から、息が漏れるような途切れ途切れの  
声、

「まだ牡丹の近くにいられるのは有難いことです」

「禅師さまや皆さまが御丹精されておられればこそ今年もまた立派に咲く  
でしょう」

「自ずから咲くだけです」

「世の乱れに抗して花が咲きますのも、禅師さまの不動のお心があればこそ  
です」

「愚僧が死んでも咲きます」

「病に打ち克たられ、これからも幾久しく牡丹の春をお迎えにきつとなりま  
しょう。禅師さまがいらしてこそ花も美しく咲くのですから」

「花に惑い、蟻の一匹さえ教え導けぬ一生でした」

蟻光の言葉に触れ、胸の内からりと何かが鳴る。

「蟻の一匹。花にも惑いましょう」

我知らずに蟻光の言った一部を繰り返す。

衰えた蟻光に見据えられる。

そのまま時が流れて、我に返ってより、

「ようやく気づきました。蟻の一匹です。花に惑いましょう。私にもすべきことがあるのをいまはつきりと知りました」

蟻光は微笑む。

頭を下げ、

「この春の牡丹を私は拝見できなくなりました。禅師さまともお別れでございます」

「どこぞかにいらっしやいませうか」

「成都に参ります」

蟻光はうなずき、

「海棠が美しく咲きましょう」

「せめてその一つの枝にでも花を咲かせたいものです」

「花は自ずから咲きましょう」

叔父の韋韜は、莊園の人々が自ずとよくなっていくのを望んでいた。その理想は潰え去ったとは思いたくない。

「多くは望みません。蟻の一匹、花にも惑いましょう」

「望みはささやかがよろしかろう。ただ貫休に会えるとの望みばかりは外れはせぬでしょう」

蟻光は笑う。

訳を尋ねると、話に疲れて横になる蟻光に代わり、弟子が答えてくれる。范完の息子の手紙を届けてくれた僧は、蟻光に宛てた貫休の手紙も携え、そちらが長安にくる主目的だった。手紙は短いもので、初心に返って修行の旅に出る旨が記されていた。

使いの僧によると、貫休は錢鏐と仲違いし、羅漢寺と呼び慣わされてきた

婺州の寺を、元の開元寺の名に戻して人に譲ることにしたと言う。

事は詩中のわずか二文字から始まった。錢鏐が催したある祝宴で貫休が披露した詩に、

満堂花酔三千客　　満堂　花に酔う　三千の客

一劍霜寒十四州　　一劍　霜寒　十四州。

とあった。霜のように白く輝くひとふりの劍で十四の州を靡かせ、宴に三千もの客が連なると、やや大袈裟に錢鏐を讃えた。長年の馴染みの錢鏐であるから、仰々しい字句で茶化したとも読める。錢鏐も心得たもので、十四州では少なからう、四十州に改めてくれないかと戯れた。貫休は笑って応じてくれると、錢鏐は思っていたのだろうが、「詩は、愚僧一人の心をもって作るのではなく、天の心に従って字を並べるものです。天の心を表した詩を改めるなどできません」と拒絶した。「字の順序を入れ替えるだけではありませんか」。もう一度所望すると、「字句は改められても天命は改められません」。貫休は席を立ち、以来、二人は会っていないと言う。

横になった蟻光は、

「このようなことがなくても、あの貫休ですから、いずれは離れねばならなかったでしょう」

と、楽しげに言う。

婺州を去る最後のとき、「心が臆せば時に遅れ、心が逸れば時流に吞まれる」と貫休は言った。錢鏐は心が逸る者になったと、貫休は見たのだろうか。

「貫休さまは婺州を離れてどこにいかれるでしょう」

「誰がああ男を受け入れましょうか」

「貫休さまの名は天下に響き渡っております。どこでも歓迎されましょう」

「錢鏐でさえ持て余しました。並みの御仁では難しいでしょう。錢鏐の上をいくのは広い天下にもせいぜい一人いるのかどうか。さればこそ、成都でお会いになられましょう」

蟻光は大いに笑い、笑い疲れて目を閉じる。

それを潮に青竜寺を辞去し、帰りがけにまた安邑坊に立ち寄る。

「お狐さまに、蟻光に言った決心を告げる。どうして急に心が定まったのかはわからない。しかし、そう決まる他はなかった。」

「よき御決断と妹も思っておりますよう」  
鄭郎にも後押しされる。

官舎に帰って、

「一人でもよい、小さなことでよい。不幸な女を救えるのならば、それ以上に望むことはない」

皆に話せば、決意したのはこのようなことだと己で知れる。

志は大きくはない。しかし、我が一身、我が家族だけの安穩を求めるのではない。

蟻光のように、あるいは淑娥のように、花を一輪だけでも咲かせたい。阿枉や銀犁や嫋嫋のような女に、小さな幸せをもしも与えられるのならば、造物主が己に授けた任務としてこれ以上のものはないと言ってよい。これは春琴の心にもそうと思いたい。

必ずしも成都でなくてもよい。成都を選ぶのは、この小さなことが最も叶いやすいように見えるからだ。成都しかないのかも知れない。

意外にも、綜も含めて、反対する者はいない。

弟の藹が望んだ通りになったからなのだろう。藹の純朴を疑う者は誰もいない。

弟の言葉通りに決心できたのが格別に嬉しく感じられる。

**心**が定まれば、後はいかにして官を辞して旅に立つかだ。

折り合いを付けねばならないことが一つある。生まれてから貢奉とともに生きてきた。長い年月を隔てた二度の落第の後によく合格した。それほどまでにして得た官位を捨てて許されるのか。己が許さないのではない。唐朝への忠義でもない。貢奉を目指し、生涯受からず、悲運を嘆きつつ死んだ者たちへの信義の問題だ。



考えた末に、皇帝に願ひ文を提出する。皇帝は復位してより酒を慎み、政務に励み、唐のためになるいかなる提言でもするようと求めている。崔胤の仲間が相次いで策を献じる中、はなはだ見当違いと見られるようなことを韋荘は申し出る。

詩人として優れ奇才ありと世に認められながらも貢挙に受からなかった劉得仁ら十四人に、進士及第の称号を追賜するよう願う。何年も昔に死んだ者を形だけ合格にして何の意味があるのか。皇帝がそのような者にまで思いを致していると天下に示すのは、志ある者を鼓舞し、有為の者を朝廷に集めることにつながると、上奏文に述べる。本心はそればかりではない。唐の皇帝の名で進士及第の資格を与えられるのはいまを置いてない。唐の命運の尽きる前におかなければならない。

何ら害のないこの提言を崔胤は認め、十四人に進士及第と同等の資格を与える詔書が皇帝より下される。

幾度となく詣でた劉得仁の墓に立つ。劉季述が配ってくれた絹が墓碑を修

復する費用となる。

皇帝の御璽の押された詔書を墓碑に掛ける。劉得仁一人でなく、ここに名を連ねた十四人ばかりでなく、全ての落第者の恨みを、唐が滅亡する前に消しておきたい。

かつて韋蘭は、貢挙は唐朝を恨む者を生み出す仕組みだと言った。黄巢を筆頭に、唐に反旗を翻した者の多くは貢挙の落第者だった。唐が滅びるに当たって、よき記憶、例えば『又玄集』に編んだような心だけを残したい。

蟻光の弟子による読経が流れる。

時はあたかも春の半ば。新たな及第者たちが馬を連ねて、曲江での祝宴に向かう季節だ。栄光に包まれた人々が都大路を南へと走る光景はもう二度と見られない。

都において己のなすべきことはこれで終わった。

麗らかな陽射しに雲雀が上がる。都の内もいまでは城外の野原と何も変わらない。雲雀は城壁の存在とは無関係に、何の境もない空へと上っていく。

貢拳の呪縛から解放されたのは、劉得仁たちであるよりも己の方であるようだ。

「これでよい」

成都にいけば、綜の言う通りただの飾り物にされる恐れもある。それでもよいでしょう。成都にいるであろう不幸な女をわずかばかりでも幸せにできる可能性がある限りは、全てを受け入れよう。

抱柱の信だ。蘭はいつも笑っていたが、蘭に聞けば、これでよしと言ってくれるだろう。己が本当に大切にすべきだったのはこれだった。春琴はわかっていてくれるだろう。彩霞との再会の日もあるかも知れない。彩霞に聞いて、よしとの返事がもらえるだろうか。

六十六歳にして己の道を正しく自覚できたように感じる。

